

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十八年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九五三号



日川協加盟

No. 953

平成十八年度六賞発表

十月号

第12回 川柳塔まつり

《同人総会》

と き 10月8日(日) 午前10時～11時

ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生 駒

(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車・TEL 06-6772-1441)

議 事 平成17年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成18年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金 剛 中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・

各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「さぷりせんりゅう」 新 家 完 司 氏

兼 題 「やわらかい」 (兵庫) 長 浜 美 籠 選

「遊 ぶ」 (奈良) 坊 農 柳 弘 選

「 白 」 (鳥 取) 鈴 木 公 弘 選

「 奥 」 (青 森) 福 士 慕 情 選

「ド ラ マ」 (和歌山) 古久保 和 子 選

「ま つ り」(締切りました。) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後5時終了予定

会 費 2,000 円 (記念品呈)・当日いただきます。

《懇 親 宴》

と き 同 日 午後5時半～7時半

ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛 城

会 費 7,000 円

宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000 円 (朝食付)

事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは締切りました。

同人総会(同人のみ)・記念句会の当日参加も歓迎しますので、
ふるってご出席下さいますようお願い致します。

主催 川 柳 塔 社

脳の老化防止

河内 天笑

こしの二月から三月にかけて、六回に亘って東北大学教授・川島隆太氏の放送を視聴する機会を得た。その都度解剖図を見て位置を確かめたり慣れるまで大変だったが、私の納得出来た事をかいつまんで言えば、人間の脳の組織は四十五歳でその九〇パーセントが完成し、二〇歳くらいから七〇〜八〇歳まではほぼ直線的に神経細胞が減少する。

しかし神経細胞と神経細胞を連絡するネットワークの電線（これを「白質」という）は、知識や経験等積極的な作業で年とともに増え続けたくわえられていて、これが神経細胞の減少によるダメージを補い支えている。加齢による記憶力の減退は誰しも経験するところだが、これにしても「記憶した事を何回か復習する事によって知識にしてしまふ。」つまり白質を刺激して「記憶を知識に変換」すればよい。学者も芸術家も文化人もみな年とともに体力は減退し、それに伴って脳の神経細胞も減少するのは避けられないが白質の線は太くなり続けるという。

ここで脳の構造を簡単に説明すると、大脳、小脳と脳幹の三部分から構成され、大脳は全体の四分の三を占め考えたり覚えたりする。後頭部の下にある小脳は体のバランス等を、小脳の前側にある脳幹は生命維持に深くかわる所で、呼吸や心臓の

働き、体温の調節などをつかさどり脊髄につながっている。大脳は四部分に分けられ、更に働き方により前頭前野、運動野、視覚野などに分かれている。この中で人間にしか無いのが「前頭前野」で、抑制や決断、理性、善悪のけじめ等を司る重要な部分で、この内側にある。最近はずいぶんケレル人や引きこもり等社会問題になっているが、前頭前野の未発達とも関係がありそうで「躁鬱症」もここが原因。

「読み書きそろばん」と子供の頃から言われた事だが、文章を音読する、歌を歌う、料理する、そして簡単な計算を早くする等の作業が脳の血流を活発にし、新しい脳細胞をつくる。減りつづける脳細胞を、自分流の工夫と努力で新しい脳細胞を補充して行けば、そして白質をどんどん鍛えて太い電線の束にする事により、脳の老化は十分に防ぐことが出来る。

二年程前から私のカルチャー教室では、川柳の前に二、三曲ユニゾンで合唱している。最近では二、三曲歌わないと川柳がはじまらなくなった。歌うことにより前頭前野が活性化し、感情移入がよりスムーズになるのである。

自選句

中古品みたいないのち大事がり

天笑

屋根修理身軽な頃を思いつつ

みのもんだ言う通り食べ二キロ増え

山のいのち海のいのちに支えられ

百歳へ二十八年十日あり

一路集	「朱」	川崎ひかり選	(96)
	「童」	小川注湖選	(96)
	「燃える」	源田八千代選	(97)
初歩教室	「無」	三宅保州	(98)
秀句鑑賞	同人吟	海老池 洋	(100)
	水煙抄	高橋 宏臣	(102)
岩屋美明さんを偲ぶ		山田 耕治	(103)
九月本社句会			(104)
各地柳壇(佳句地十選/石原淑子)			(110)
「擬態」		阿 萬 萬 的	(123)
柳界展望			(125)
十月各地句会案内			(126)
■編集後記(ひとこと/金子美千代)		希久子・朱夏	(128)

座右の句

風向きを変える素顔が炎えている

(寿子)

私の句

正直という栄光を胸に抱き

堂 上 泰 女

上町台地をうろうろ。上本町の交差点で父と再会して抱き合い号泣したのが昨日のようだ。その父が死去して今年で31年。

もし終戦が長引いていて戦艦が、駆逐艦が、潜水艦があったなら、僕も白い大きな袋を抱いて少年兵として軍艦に乗っていたかも。「男たちの大和」のように。

アメリカから見た硫黄島、「父親達の星条旗」、日本から見た硫黄島、「硫黄島からの手紙」。

右二本の映画がアカデミー賞監督、クリント・イーストウッドによって米国より先に日本で十月二十八日上映される。

硫黄島の防衛の先頭に立った指揮官、栗林忠道中将の想像力、独創性、機知に富んだ人物を興味深く読んだ。栗林中将は英雄だったのか僕は少し疑問に思う。二万人の軍隊の指揮官として、六万人のより優れた米国海兵隊と交戦して、四日間で陥落すると見た。そして、35日間も交戦して二万人全員が20日間飲まず食わずで餓死した。早く白旗を上げていたら二万人が死なずにすんでいたのではないかと、思うと残念でならない。

戦争も人生もどちらかが正義で、どちらかが悪だとは思わない。川柳生活47年の間に遠くで畏敬の対象だった路郎、葭乃、生々庵、栞、薫風各先生方から、川柳という接点を目指し、やさしさと、思いやりを教わった。押し出した歯磨きをチューブに戻すように。



河内天笑選

三田市 北野哲男

たこ焼きは歩いて食べてこそその味

口喧嘩大阪弁になつてくる

五十年楷書のままの夫といふ

年寄りになり過ぎぬよう氣をつける

年金と世相を憂う紙おむつ

ああ平和誰もが乗れる靈柩車

弘前市 高橋岳水

一切を拒む樹海へ踏み迷う

真実が透ける眼鏡を所望する

妥協して胸の炎が消え失せる

鍵穴を覗くと濁る心の目

路地裏で交わすコントが温かい

人間の知恵を嘲る土石流

海南市 三宅保州

言い訳はしない男の胃潰瘍

根回しをしすぎたことが致命傷

節あつてこそ真つ直ぐな竹になる

リストラをされて天下の素浪人

握手以外はセクハラですと言う講師

巣づくりの蜘蛛には話しかけまいぞ

出雲市 佐藤治代

トコロテン一氣に突いて夏を食う

バツと脱ぐさつと夫は目をそらす

曲がる腰伸ばせば広い空がある

平凡な楽しみもありしじみ汁

一人居の軒を増やしてお葬式

生きているからいいんだよ山法師

倉吉市 松本よしえ

走らねばどんどん虹が淡くなる

三角の底辺にいて莫塵を敷く

年金の輪の中でしか動けない

紫外線カットの帽子買いに行く

蜜よりも甘い札束チラつかす

舵取りに口出しをして睨まれる

和歌山市 川上大輪

どのページ捲つてみても熱帯夜
友達の輪にシロアリが紛れ込む
何処にいつても灰皿を先ず探す
パンザイが済んだら用のない私
サービスに山ほど盛った練りワサビ
回転寿司が通りすぎると過去になる

八尾市 高杉千歩

余生まだ小さな願ひ抱いている
二代目の主治医は息子より若い
体調に合せベッドと仲がよい
収入のない家計簿をつけている
モノクロの余生ハイビスカスが真つ赤
補聴器できく美辞麗句秋になる

和歌山市 上地登美代

ボンコツ車せめて心を光らせる
利息八円末広がりと笑つとく
髪切つて強い女になるつもり
大文字燃えて平和を祈りたし
沈む陽の向こうはきつと遊園地
ニアミスを巧みに躲す生き上手

吹田市 山本希久子

秋の真ん中右往左往の初仕事
段差温度差実力の差に悩まされ
一病抱え力まぬようあせらぬよう

私を誘う罫かも知れぬいい匂い
主婦の目確か国産品か輸入品
人づてに友の計を聞く秋彼岸

鳥取県 石谷美恵子

玄関に並んだ靴が物を言う
ライバルよ前世はきつと恋敵
動物愛護唱える口で肉を食べ
子育ては動物たちに負けている
形見分け上手に泣いて選っている
診察券一枚増えて梅雨明ける

鳥取市 岸本章

汗知らぬ金はどこかで蹴躓く
偉人伝やっぱりすごい親がいる
ごみ捨てる大人を子らが見て真似る
法律の抜け道雑魚は通さない
詐欺師らの知恵を生かせばすごかろう
憎しみを捨て去る穴は深く掘る

八王子市 播本充子

女史よりもお利口そうなかバン持ち
化けて出るなんて余程の事だろう
正直に言えば許してあげたのに
煙突のない火葬場に慣らされる
椅子一つうるさい人に空けておく
恋をしてだんだん赤くなるトンボ

鳥取市 植田 一 京

気分だけルンルン足が付いて来ず

プライドを道連れにして坂登る

アベックに人気のお化け屋敷かな

煙もう出ぬ煙突に雀くる

人の世や忘れることが薬なり

月冴えて魂持つて行かれそう

竹原市 石 原 淑 子

八月の空が慟哭しています

戦争の悲惨理不尽硫黄島

百人を敵にまわして愛し切る

睡蓮の終の美学に惹かれます

セロテープ私の指紋たと取り

順風満帆私の器見失う

東かがわ市 川 崎 ひかり

親は子を子は親の事案じ合う

赤信号貧乏ゆすり始まった

押入れに十年前の引出物

降れば大雨照れば猛暑という地球

十指まだ自由に動く今日の幸

岸に着くペットボトルにハンゲル語

尼崎市 田 辺 鹿 太

禁煙の効果やたらと腹が減る

汗をして得たガラクタは捨てられぬ

僕のものより妻の名刺がよくしゃべる

手鏡に先は長いと言いつ聞かす

忠告も助言もしない影法師

母が来てもつたいたいを連呼する

富田林市 中 井 ア キ

老眼でしげしげ見つめられている

逢いにゆく靴はびちびち跳ねている

結局は目線を変えて折れてやる

焦点の決まらぬ呆母を抱きしめる

空っぽの脳へも恋が来て騒ぐ

助っ人では満足できぬ妻がいる

藤井寺市 太 田 扶美代

甘い罌とことん堕ちてみるもよし

私の成金草が枯れている

掴み取りこんな小さな手にも欲

遠い絵の奥に棲んでる糸トンボ

嬉しいのか金魚が見せたイナバウアー

記念日の夫婦は飢えた日のはなし

堺市 加 島 由 一

アルプスが同窓会の甲子園

追うものがあり職安へパチンコへ

友情か恋かジュースの回し飲み

妻正座長い話になりそうだ

お隣はこちらを裏といっている

あんな目で見られてみたい終電車

東かがわ市 成重 放任

待ちわびて夏を飲みほす野良仕事

梅雨明けを待っていたよな蟬しぐれ

一枝の陰に身を寄せ涼を盗る

三十五度うだる暑さに身を余し

あの塀の向こうの新婚気にかかる

東かがわ市 清川 玲子

つくづくと平和と思う日程表

弱ささえ武器に世の中渡る知恵

雨ごとにたのもしくなるナスキュウリ

イケメンの医者に病が一つ増え

休日のほうが疲れが倍になる

東かがわ市 池内 かおり

小さい目カッと見開き生きて行く

大きな目ホコリ入って笑わせる

繕うて知恵をしぼって生きている

すらすらと言わねば嘘がばれますよ

おきばりやす言うてるあんたやりなはれ

東かがわ市 原 賢

欠点をとみに補う夫婦傘

奇跡など考えないとかじを買う

言い切った後で気付いた四面楚歌

平凡が倖せですと老い夫婦

遠回りばかりしている人生譜

東かがわ市 伊勢 八重子

満天の星を両手で掬いたい

父母も逝きふる里遠くなるばかり

土壇場で真の姿が顔を出す

下り坂休耕田を持て余し

風鈴がまどろみ誘う昼下がり

松山市 高橋 宏臣

おくびにも出せぬ本音を飼い馴らす

ひょうひょうと陽に古本をぶら下げる

時々は負けず嫌いの爪を切る

簡単に微笑みくれる人の顔

難しい漢字は避けて通り抜け

松山市 古手川 光

終戦後貧しい頃の子沢山

あの世との間の便も混むお盆

孫が去にポカンと穴があきました

この頃の地球やケクソかも知れぬ

台風が実りの秋へいけずする

松山市 宮尾 みのり

シングルの女いきいき同期会

こだわりの人で少うしづれている

遺言でも書こうか雨の日の無聊

アウトドア本領発揮して男

花札を並べ日本の四季は良し

八月十五日反戦歌を歌う

大田市 中居善信

反逆児そんな男はもう居ない

右へならえそれで日本いいですか

昇平が残したレイテ島戦記

靖国へ依怙地に見えてならないが

西予市 黒田茂代

笑顔の美しいひとにしんから懂れる

目を瞑った自分の写真見たくない

フラメンコのタップ歌舞伎の足拍子

貸し衣装で俄か舞子に成りますます

九十二の命全う父天に

高知市 小川てるみ

ママチャリの汗も我慢の原油高

早場米競って唸るコンバイン

響かない心へパンチしてみよう

返答へ時を稼いでいる紫煙

価値観の違う夫婦でよく揉める

高知県 小澤幸泉

雷の聞こえぬ街にひとり住み

空想にだまされている老いの夏

灯を消した夏の思い出淋しすぎ

半生の秘密をみんな妻にあげ

人生の赤字路線をまだ変えず

土佐の夏鳴子のリズムで街はゆれ

御巢鷹の山が泣いてる夕茜

友情があふれ出ている宅急便

焼夷彈落ちるあの音はなれない

初恋は七ツボタンの君だった

高知県 赤川菊野

お土産はただの土です甲子園

神棚に上げて夢見たジャンボくじ

朝帰りお天道様が眼にしみる

プライドが死語になったる紙オムツ

水溜り跳べたよプライド捨てたから

唐津市 市丸晴翠

劣化した目と耳世間丸く見せ

健やかに老いば貧乏怖くない

祖母の腰らつきよも梅も漬け伸びる

大鍋も磨き帰省子待ち侘びる

枯木にも花が咲く日を信じよう

唐津市 山口高明

列島は他国どころじゃ無い赤字

姑よりも血の氣が多い若嫁ご

止まり木でおとこ惑わす泣き上戸

やり直し出来る歳なら慌てない

SLの模型が走る父の部屋

唐津市 坂本 蜂 朗

妻と娘の電話に謝して独り酌む

匙投げた子ものびのびと生きている

口閉じて小癪な妻に譲る勝ち

保証印忘れた頃に食うパンチ

逆縁の通夜でせりふがけつまずく

唐津市 久保 正 剣

早合点駅の南北待ち呆け

ラストダンスの余韻を冷ます一人酒

忍の字を捨てた時から肥えはじめ

バツ一の女同士の屋台酒

いたずらな風が残り火吹きにくる

唐津市 宗 水 笑

盲導犬利他の姿の極まれり

どれほどと唯一神の三つ巴

これからも何度言うだろすみません

商用に軍艦マーチ使われる

傍目には仲のよさそな熟女たち

唐津市 井上 勝 視

ぶっこわし後は委せてドンが去る

有難う料理が好きな老妻という

逆らわぬ老妻が支えた五十年

寝込んでも老妻は床から指図する

サブリメントまた一ツ買う命乞い

熊本市 永田 俊子

胸出しルック臍出しルックそして騙される

ロボットが笑い出す日が恐ろしい

パソコン ワープロ不要老いの一徹

ゴマメの歯ざしり私も太鼓を叩きたい

テポドン発射ドン・キホーテが手を叩く

熊本市 高野 宵 草

歩くにもバックミラーが欲しい道

諦めて犬が寝ころぶ立ち話

薬漬け植山行きをふと思う

肩書きを外せばシャイな友だった

愉快さも辛さも減って老い一途

熊本市 岩切 康子

甘い物朝だけにして自愛する

種々と愛の詰まった荷を受ける

集中力低下暑さばかりじゃなさそうだ

人の腹見させてくれるドアの音

思った時始めなければ始まらぬ

砂川市 大橋 政 良

自己宣伝のうがき暗記しています

雲ふわりローカル線の風のいろ

あの星が僕の天国かもしれぬ

無愛想な娘婿だが頼られる

喜々として女を語る時おんな

弘前市 櫻庭順風

亡父の土地降って湧くよう持つことに

薄暗い藪これが我が家の土地なのか

薄暗い藪溜め息をつくばかり

開拓は見通しきかぬ藪の中

予期しない腕の関節痛み出す

弘前市 福士慕情

休肝日調子が狂うから止める

腹が出た体重増えたやかましい

残すのが勿体ないと瘦せられぬ

ハイハイと妻に逆らわぬのも愛

一病を他人に会うたび自慢する

弘前市 岡本花匠

ラベンダーのひと和ませる分離帯

冷茶酌み話題が弾む夏の午後

鴨の子の生長見てる万歩計

血糖値上がりあわてる生活風

血圧計安心示す笑みこぼれ

弘前市 高瀬霜石

薬だと信じて飲めば効くクスリ

貴方はアナタ私はワタシ夫婦著

雨しとど二度と戻ってこない傘

リストラの父は夕刊待っている

五百円玉をこっそり溜めている

弘前市 須郷井蛙

安いから二着も買うて着る間なし

介護には世話になるまい願をかけ

強制はしないが割当寄付が来る

向こうから来たからゆっくり長電話

自動ドアに慣れて困った閉め忘れ

弘前市 相馬銀波

川の音今夜も雨の欲しい稲

損得になると足踏み長くなり

温度差を埋めたい時の自己主張

検討で終る予算のない車

スタートに欠かしたくない生ビール

弘前市 宮崎ヒサ子

ねぶただんどこ送り絵の目に掴まれる

今日の出来事じつと見ていたフライパン

庭の草見て見ぬ振りももう限界

隣の犬も夏負けしたか吠えもせぬ

お盆控えて夏負けなどはしておれず

弘前市 今愁女

送り絵の後からそよと秋の風

三井寺の晩鐘撞いて旅の中

戦乱の世しのぶ古跡湖北旅

古蹟めぐり桐一葉落つ音をきく

岐阜提灯秋草涼し孟蘭盆会

黒石市 相馬 一花

朝食も取らずに磨く美顔法

肩書きを捨てた男に乾杯す

諸肌を脱ぐ美女たちの乱れ打ち

公園で自己主張するダンボール

リハーサル重ねて嵌める詐欺師たち

平川市 小寺 花峯

チクタク時計は過去を語らない

鏡の裏では偽装が笑つてゐる

煮こぼれを怒つてみても独り身で

傷口を舐めても晴れぬ北の空

散り際は椿と牡丹競わない

さいたま市 八田 敏

民営化母校の寄付がどんとふえ

自衛隊無事復員に安堵する

老老介護する側すでに先が見え

パソコンに埃が積もる喜寿傘寿

手のひらが痺れむくんで頸椎症

さいたま市 星野 育子

ボランティア参加するたび教えられ

乗りません人の車と口車

アナログのテレビの寿命どうするか

若者が格差社会に夢閉ざす

公園の砂場は猫のトイレなり

日高市 根岸 方子

絵手紙に心のヒダを忍ばせる

星の降る村善人の庵建つ

水だつて飲めそう雲水のバケツ

今だつて何なく出来る逆上り

転居先猫の名前も添えてあり

柏市 永峰 宣子

アリゾナは四十五度になるような

ゆっくりとゆっくりと解くゼロ金利

招かざる客よ隣の薮枯らし

露地植えが大きく実るミニトマト

朝顔に催促される庭掃除

柏市 河野 桃葉

相槌に大人の知恵はいやらしい

乗り継いで優しいお湯のフルムーン

母の背を見て美しい娘に育つ

老いの恋ジョークも入れたプロポーズ

無口な子嫁の留守には良く喋る

佐倉市 岡井 やすお

骨抜きになつて満場一致する

撃たぬ良し撃たれた時はどうします

民営は安全よりも先ず儲け

パスタ食べ豊年満作じやと踊る

スポーツに明け暮れ若者国忘れ

国分寺市 野崎 勝

先生の見立てはいつも歳のせい
使われぬ机に本の山ができ
久しぶり友が来るから髭を剃る
蹴つまずく段差年々低くなり
高原に星はこんなになつたのか

武蔵野市 亀井 円 女

親子でつかに嫁も私も照れ笑い
わたしより先に逝つてと子の願い
背のびして今日はでっかい夢を見た
相談もせずよい友みんな天国へ
おとんにおかん これも嬉しい大阪弁

東京都 長谷川 康 子

若者が座に加わると出る活気
雨傘を日傘に使う油照り
真夏日にハシゴしているロードショー
悪いヤツなのか夫はよく眠り
重量にじつと耐えてるピンヒール

東京都 清原 悦 子

始まりと終わり笑顔で繋げよう
忙しい日々だからこそ張りも出る
全体の色がつかめぬコンパクト
乗り越えた山に大きな氣をもらう
やれやれと思つた時の皺の数

東京都 岸 野 あやめ

悠々と生きてはいない池の鯉
秋祭り済んだら人の居ない村
姉いもと内緒話はメールです
離れたらすぐに忘れるほどの仲
つき通す小さい嘘にも要る覚悟

東京都 小川 賀世子

西瓜ひと切れでんと描き残暑御見舞
遠雷やあれば娘が住む川向こう
大変だあ混線してる友の脳
パニックに脆い熟女の脳回路
年金は亡夫の汗の臭いする

横浜市 菊地 政 勝

惜敗を負けとはすぐに認めない
追い風と知らず自分を過信する
頑張ると自分の非力良く判る
ケチは駄目もつたいないを良しとする
価値観が古いまままで共白髪

横浜市 小野 句多留

総崩れ大関陣も多国籍
骨太になる牛乳の低迷期
ケータイの津々浦々の阿波踊り
恐山地蔵道路の無心箱
産む事が苦にはならない子沢山

富山市 島

ひかる

汗になることを承知で水を飲む

梅雨明けの夕陽奥穂の小屋で見る

爛爛と燃えて夕日の落ちる音

山小屋で今年も見てる天の川

疲労困憊食べる話も途切れがち

静岡県 蘭田 獏 杏

肩書きも椅子も失いごろ寝する

一発でゴキブリ仕止め母のうつ

泰然と富士の据った駿河湾

梅雨晴間母の動きにそつがない

人情がちよっぴり絡む草野球

可見市 板山 まみ子

夢のない話は聞かぬ耳が良い

昼寝でもするほかはないこの暑さ

台風がそれで水まきやめられず

裏話聞いて納得市長選

弱点も見えて安心すごい人

犬山市 金子 美千代

お日様の味するトマト丸かじり

梅干を食べて飛び出す炎天下

フラッペになって氷の値が上がり

信じられ足枷ちよつと重くなり

過去の事ですと笑ってやっと言え

犬山市 吉田 幸子

こだわりは汗スッキリの綿に惚れ

可愛さに残した草のえこひいき

川底を洗い流した稲光

丹念に手掛けた桃の熱射病

自転車で転び取り上げられた足

犬山市 関本 かつ子

父母は背中あたりか盆明かり

男物干して魔除けにする小窓

宣誓の選手の母校とうに消え

叩かれて蚊には逃げられ血は吸われ

棟梁もデイスカウントで買う工具

愛知県 早川 盛夫

追いつめられると凄じ力が出る

ネクタイを外した首がよく回り

ふるりの山に抱かれて眠りたい

賞味期限切れた男の使い道

隠れ家に髭も剃らずに住んでおり

大津市 中 宗明

かき餅を炙るそばから幾つも手

強い人ゴジラと称しあこがれる

水虫と縁切りするにひと苦労

こけしにも喜怒哀楽の顔がある

人生の幕引く機会むつかしい

京都市 都 倉 求 芽

野心まだ炎える空き地の草いきれ

夕立の残骸空に降り残す

軽い気にさせて抱き込む最初はグー

遠慮にも意地最後まで空いた席

図太さが妻 母 女へ少しずつ

京都市 高 島 啓 子

愛読書から川風が吹いてくる

占い師嵌めると光る猫目石

雑兵のきちんとタイを締めている

スンニ派もシーア派もない鳩雀

秋の夜テレビは12チャンネルに

亀岡市 井 上 森 生

送り火にそつと七十の手を合わす

老い悟る今日は何日何曜日

漂うてUFO気分で老いの旅

信じ切つてすべてを吐いた息が良い

さしあたり是非にやるべきこともない

長岡京市 山 田 葉 子

明日への一步踏み出す爪を切る

咲きたくてただ咲いている山の花

つい相手して粘られる電話口

仏壇がまたかときいた頼みごと

洗ってもおちないしみを抱いたまま

大阪市 神夏磯 典 子

川柳にしがみついている元気です

何回つまんで出来た味だろう

朝顔のいちず添え木に素直なり

元気だから年金少しづつたまる

猛暑にも負けぬ河内の盆太鼓

大阪市 板 東 倫 子

浴衣着て打水をする御堂筋

裏金の紙幣は黒い焰上げ

何でやろオシム日本勝っている

団欒のない街の子の夏休み

大根と地酒を買った道の駅

大阪市 前 たもつ

医者薬止めて元気になりました

二三日履けばそのうち靴に合う

完全に禁酒をしてるわけでない

公園に規制がなくていい街だ

土踏まずやつぱり好きな土の道

大阪市 古今堂 蕉 子

親は親子は子しみじみさとする夜

田圃から蛙の歌が消えたとか

旅の宿ただただテレビ見てるだけ

ブランドの豆腐さしみの顔をして

不思議な顔されてごまかす人違い

大阪市 川端 一步

煙突なら君の苦情は聞くだろう

大樹にも雑魚の群れにも陽は当たる

泣きたくば大空という胸で泣け

友という打ち出の小槌持っている

風の神貧乏神を連れて行け

大阪市 岩崎 公誠

月冴えて新しいことみな忘れ

目先追う癖が抜けずに生きて鈍

三年のローンで払う総入れ歯

五十階エレベーターがすぐ来ない

鉄筋のお寺昼間にフラダンス

大阪市 津守 柳伸

風光明媚鉄砲水は感知せず

五七五喋りだしたら止まらない

松たけと桃デバ地下のVIP

おもてなし螢見物させるバス

浴衣帯きりり打ち水涼を呼ぶ

大阪市 津守 なぎさ

反戦歌忘れられない地獄絵図

聞き返すまだまだ呆けていられない

バーゲンにつられいつしか顔なじみ

床料理舞妓踊りも京の宿

足腰に負担かからぬ旅プラン

大阪市 松尾 柳右子

思い切り捨てて片付く狭い部屋

捨て場所にされたきれいな山の道

湖の底は知らないアメンボウ

瞑想の目疲れしばし休ませる

苦瓜の味は大人の仲間入り

大阪市 川原 章久

梅雨明けて頭から降る蟬時雨

娘と妻に狙の音僅かに差

汗臭いシャツに若さが滲み出し

黒髪と白髪が同じクラス会

大助が並ぶと花子光り出す

大阪市 小泉 ひさ乃

梅雨晴れ間ぱりつと乾く白いシャツ

ひと呼吸して自分らしさに戻す

補聴器を外して笑顔絶やさない

不都合なことは忘れた振りをする

携帯を持って淋しい仲間入り

大阪市 星野 きらり

点滴へ生命まかせて作句する

梅雨明けて足音忙し人の波

蟬の声を先途と賑やかに

ウオーキング行き交う顔の清すがし

五欲みな捨ててこの世の明日を見る

大阪市 榎本舞夢

いっち好き何言われてもついて行く
今そんなこと言われても手おくれよ
狙っても射止められない片思い
胸の内すつかり吐いておなかへる
墓まいりやさしい父のことばかり

大阪市 榎本日の出

風鈴のきれいな音を聞く平和
転びぐせ急所はいつも外れてる
私の手には負えない棘もあり
中心が見えなくなった核家族
寄り道をして来た人のいい話

大阪市 近藤正

腹のない人が他人の腹を読む
国民は貧乏くじをあてがわれ
増税に笑顔が消えた高齢者
ひたひたと政治の潮目寄せてくる
核廃絶かけがえのない地球ゆえ

大阪市 井丸昌紀

つらい事のみ詰まるメモリー
裏の裏かいて墓穴を掘りました
囲炉裏端みんなやさしい顔になる
物忘れ暑さのせいにしておこう
長生きの秘訣当たりを引かぬ事

大阪市 大川桃花

何遍もピンチ救った子の笑顔
この頃はちよつと横にも振れる首
寄せて上げたスタイル家で解き放つ
約束をしたのに駅の裏表
遠来の友をもてなす花を選ぶ

大阪市 奥村五月

免許ない妻が操る火の車
長電話孫が黙ってお茶を置く
生きるには苦勞は九分で楽一分
墓石に語る涙に嘘はない
ばあちゃんと言えば財布がすぐゆるむ

大阪市 岡本久峰

やんちゃくれ今日はどこまで行つたやら
宦官にされかけてくる金バツジ
勿体ない一本槍の美人知事
長い間浪費に慣れてきたバツジ
かぶと脱ぎ尻尾を垂れてどないする

大阪市 小糸昭子

豪雨情報人事のように聞いている
人間の差別に泣いて国を捨て
病院の臭いはこの頃無臭だな
音の無い風鈴風でぶうらぶら
右で泣き左で笑うのも女

大阪市 渡部 さと美

失聴がきこえてしゃべるみぎひだり

引算の余生も楽し心満ち

台風のさいごつ屁だったこの暑さ

娘の財布ゆとりが見える母の服

造花にも似合う場所あり華やける

大阪市 清水 絹子

中華料理英気やしない盆供養

花屋さんもうお手上げと五割引き

赤ちゃんの瞳に負けた意地っ張り

車内化粧みるに見かねて目を逸す

夾竹桃めらめら燃えて八月忌

大阪市 町田 達子

元気げんきといつも頭に聞かせてる

毎日の猛暑に散歩さばり勝ち

観音さまにご無沙汰詫びるねんごろに

公園の鳩や雀にあやかろう

これからのプランへやっぱり歳おmoi

大阪市 小谷 集一

慰めの言葉に腹が立つて来る

保護色にすぐに変われるイエスマン

免疫力落ちて誰でも好きになる

悪友で始まり親友で幕閉じる

水茄子の糠漬け母の味守る

大阪市 津村 志華子

幸水と言う名の梨を丸かじり

豊作を願う案山子のコンテスト

ごしごしと心の垢を洗つてる

フンフンと聴いてはいるが上の空

女とは微罪ひとつを潜ませて

大阪市 伊藤 博仁

ピンポンに居留守はボチの吠え具合

振り向いて突き付けられた忘れ物

わが家でも舶来の鮭たべている

降る雨で網戸を洗う知恵雑誌

おばちゃんの素顔はなんとただの人

大阪市 中村 れんげ

生きたくてサプリメントの箱並ぶ

水琴窟至福一時京の庭

麦秋の夕日車窓を額にする

CTで脳の具合を聞くこわさ

電子辞書助っ人にして翔んでいる

大阪市 升成 好

三食におやつも食べて痩せてはる

サイレンに気付かなかったいい眠り

千羽目の鶴が病魔を追いつ返す

画像見る医師が言葉をよつている

ガム踏んだ靴が嘆いているマナー

大阪市 鶴田遠野

池田市 栗田久子

常連のボトルに付ける胃腸薬
旅ひとり道連れ探す夕茜

女の過去に謎解きはやめておく

ビンボール時々投げる妻の勘

あまい汁吸わされていたご接待

大阪市 池上清治

見る影もない被災地に立ち尽くす

そのうちに弾いてみせるぞマンドリン

腰のないうどんが馴染む私の胃

庭掃除腰と相談しています

朽ち果てた里に夕日を見に帰る

大阪市 中村叡子

親の古い案じ子供ら皆優し

年寄りが金持ちだとは限らない

年寄りには次の総理に願いかけ

団塊の世代今から世を変える

こんな世に段段なれてゆく怖さ

大阪市 福岡末吉

浮世風なぜにすぎなく頬を撫で

手の内を見せずその場は持ち上げる

甘言の義理もからんだ胃の重さ

省りみて自負と野心の身が荒ぶ

背を向けて競った友の霊に詫ぶ

ていねいな謝意いつまでも終わらない
うとまれぬほどの余生を存分に

生かされるチャンスは一度きりと見る

外濠を埋めてわたしをどうする気

妙案と聞きつのり出す不信感

和泉市 西岡洛醉

一輪草妻の心が活けてあり

ふたり酒何時か夢見る夫婦坂

蒲焼を贅沢と言う貧に生き

心配と気苦勞妻に白髪増え

阿弥陀経唱えて抹香心地良く

和泉市 横山捷也

保険屋にすっかり趣味を読まれてる

時々ボケたふりして嫁と住む

いさぎ良い男背すじがまつすぐだ

約束を思い出したとヒザを打つ

熱燗とヤッコで熱さ吹き飛ばす

泉佐野市 山本蛙城

おさかな様子電話をよく待たす

お若いと言えば曾孫の数聞かす

欲幾つ振り切つて独楽よく回る

なんとなく果鴨見下ろすヒルズビル

稀少価値狙いケータイ持たぬ主義

茨木市 藤井正雄

交野市 田岡九好

留守番を進んで買って昼の酒
小言聞く母の形見の着物から
少し美化して出来事を書く日記
湯煙の向こうで妻が若く見え
気短が相手に少し距離をおく

大阪狭山市 矢野 梓

あと一球ラストチャンスに賭ける夢
巣づくりの鳩にペランダ貸すことに
黙祷に付き添うように蟬が鳴き
冷蔵庫に入れて大事に腐らせる
後回しした事みんな忘れ去り

交野市 山川日出子

鶯が心経うたう山の寺
川水も原爆ドームも被爆者だ
レバノンとイスラエルの和願つて
人間のコミュニケーションまつりから
ほら貝を耳に当てると海の音

交野市 森本弘風

自分史を飾る美談はウソばかり
医療費負担三割になる通知来る
二百グラム辞書十冊が入ってる
分別ゴミ私はどこに入れられる
初盆に去年の元気語り合う

外へ出て見ずにテレビで見る天気
温暖化地球静かに狂いおり
お一人様一つに亭主駆り出され
生き物を飼うと死ぬのを見にやならん
酒を飲む時間まであと三時間

河内長野市 山岡富美子

アナログとデジタルで住む三世代
にこにこしてると変わる風の彩
梅雨明けて真夏の音になる蛇口
身勝手な願い聞いているお賽銭
人間も猫もののびてる熱帯夜

河内長野市 村上直樹

米麦そば芋のジュースでなお元氣
休肝の念押す妻が憎らしい
ありがたや年金を生む夫です
駅裏で時事放談の大ジョッキ
ヒロシマにいのち芽生えた日の歓喜

河内長野市 水谷正子

閻魔様お釈迦様にも横むかれ
大正が九十代を闊歩する
遊び事の予定があつて今元氣
娘婿生真面目なのが玉に瑕
報道の仕方政治透けて見え

河内長野市 井上喜醉

岸和田市 原 さよ子

退屈な余生で楽しい無駄はなし
ブレッシャー姿見せずに肩へ乗り

片棒を担ぐと怖い後始末

正直な鏡と素顔にらめっこ

泥かぶる覚悟で変える風の向き

河内長野市 坂上淳司

書出しがなかなか出ない遺言書

年金の元とれてないから逝けぬ

いいですよタキヤンの癖聞いてます

ムームーはハワイ日本はアツパツバ

すててこで昭和一桁暑氣払い

河内長野市 植村喜代

夏の空染めて喜ぶ夏祭り

遠花火音に淋しいものがある

物を思えば蟬の声にも気にならず

何思ったか急に蟬鳴き止んだ

人は皆楽になっても苦が多い

岸和田市 井伊東吉

夏草が主の怠惰嘲笑う

プールでは大人の箍が緩んでる

学校も家も教えぬ耐えること

子育てを厭う身勝手若夫婦

いくつもの感動貰う甲子園

味噌汁の湯気が包んでいる平和

傘寿には傘寿のおしゃれコンパクト

口あいた方が飲ませている薬

褒められた服を外出用に作る

旧姓で今日ひとときをクラス会

岸和田市 森元 ふみよ

孤影です淋しいですと泣けもせず

悠々と自論曲げずに生きている

歳重ねまさかの坂をころげ落ち

戦中派勿体ないに大賛成

七不思議君主のメモがまかり出る

岸和田市 林 力子

丸めたらたたきとなる新聞紙

弁当を包んだ新聞昼間読み

譲り合い犬と猿とが手を結ぶ

トランプで占う恋の過去未来

ためらって前に進めぬカタツムリ

岸和田市 岩佐 ダン吉

九条の鼓動に僕は安堵する

玉の汗知らず奇跡だなんて言う

夢が覚め僕はフツになってる

脇の甘さやはり突かれた七合目

知ったか振り今がらがらと崩れてる

岸和田市 土橋房枝

思い出を捨てよう勇氣あるうちに
宝くじ当たった時の計画す

馴れ合いの判定をして悔い残す

身構えたばかりにライバル視される

ライバルとお目あて一緒かも知れぬ

岸和田市 堤 楢代

はまったら恐いネットの落し穴

おしゃべりが何より好きな友がいて

人間でどこか可愛いとこがある

さきのさき見えないだけに頑張れる

愚痴らずに生きて行きたい残り分

岸和田市 雪 本 珠子

負けて泣き勝つても泣いた球児達

人生の裏表知る老いの皺

群れてても何故か孤独の風が吹く

思い出は人と一緒に色褪せる

今度こそはつきり言うよイエスノー

堺市 村上 玄也

ロボットに狙われている僕の椅子

妻の膝あしたの雨を言い当てる

病名が分からないいまま薬くれ

他人から見れば我が家も平和そう

悪人の顔になつてゐるモンタージュ

堺市 近藤 豊子

雑念に似てふえてゆく不用品

眠そうに地面みている石の亀

まえを見てうしろへまわる二面石

欄干からこぼれそうなり祭の夜

船渡御へ花火へゆれる影法師

堺市 志田 千代

メモ用紙ないと脳みそ慌ててる

ボクの絵と字がはつてある冷蔵庫

贗作と知らされてた絵がいと美しい

ずば抜けた右脳を持った落ちこぼれ

エンジンをつかし煙草を買いにいく

堺市 山本 半 銭

八月の火種は九段坂辺り

土用干し今年も無事に梅と紫蘇

夏木立羅漢と並ぶ一休み

火の章の途中で筆が止まつてる

婆ちゃんの焚火おいもが焼けている

堺市 國見 蘭香

覗き見るこの家の花だん品のよさ

買い忘れ恥ずかしいからレジを変え

吊り忍ぶおいでおいでと肩を撫で

美しく生きる忍耐とても要る

愛犬が死ぬまで私生かされる

堺市和田 つづや

両親の夢はずいぶん見ていない
腎不全のち身近に感じつつ
腹這いで雑草のうた聞いてやる
覚悟してつき合うすっぱん料理店
ギャマンのよう涼やかな女という

堺市石堂 潤子

樺一樹わんさわんさと蟬時雨
さあお飲み花に言葉を掛けて水
夢で泣いてほんとの涙流れてた
やれやれと避暑の旅より戻りけり
明日も在る事疑わず米をとく

堺市矢倉 五月

ホップステップジャンプの前で定年に
嬉しくてちよつと悲しい年金日
感心をして読んだのに何やった
贅沢す朝取り野菜の自家ジュース
学校も親も凭れる塾通い

堺市西村 りつえ

銀いろの道で咲かそう赤い薔薇
飛んでいく時間をさいてまた昼寝
大太鼓過疎へ帰れと秋まつり
だんだんと痩せる絆に添え木する
核保有許してならぬ原爆忌

堺市奥 時雄

激辛に口あけたまま立ちあがる
口裏をぴたり合わせ底割れる
終電で寝て終点で起こされる
別嬪は電車で化粧などしない
青年は金なく中年余裕なし

堺市宮本 かりん

挨拶を交わしてホツとする夜道
白黒を曖昧にして仲直り
につこりとおさえ込んでる腹の虫
生真面目な口調共感させられる
ゆっくりと心ゆたかに回り道

堺市柿花 和夫

駅裏に投錨したい船溜り
近頃は風を切るより吹かれてる
春を待つ梅雨明けを待つ秋を待つ
横顔を見ていただけの花火の夜
根性を出せと中味のない叱咤

堺市源田 八千代

腕白も絵を描く時は別の顔
絵日記に想い出添える里帰り
現生を喜ぶ孫のEメール
シヨッピングカートをバスにどっこいしょ
割引券ブランド品は扱わず

四條畷市 吉岡 修

不器用で隙いっぱい言葉じり

見ろグラフ熱意は買うが伸びとらん

二の糸のしらべ男の骨を抜く

銀行の決算聞くと切なすぎ

ライバルの噂ずしんと腹にくる

吹田市 早川 棲世

軽音楽だな初夏の車内の服装は

人類史恐竜食った先祖いる

英語少ししゃべり教養として聖書

一言もいわず都会の昼食終わる

補欠で出 邪飛一本で夏終わる

吹田市 瀬戸 まさよ

八月は千々に乱れて過ぎ去る日

懐かしい日の丸弁当敗戦記

子は楽し老いは切なし盆行事

色紙の隅きつちりと折る五歳

日焼け止め帽子日傘にサンガラス

吹田市 穴吹 尚士

俺よりは長生きすると妻は決め

グリーン車に初めて乗せたフルムーン

二人きりなのにひそひそ話する

古希近くまだ直球で生きている

本場の事を言うから嫌われる

吹田市 太田 昭

むっくりと自分の影が起き上がる

語り部のまた一人逝き敗戦忌

はた餅の丸め加減や亡母の味

野仏と半分ずつか握り飯

憎い医師仏に見えて今朝の粥

吹田市 大谷 篤子

あるがまま宇宙の中で生かされる

新しい扉を開けて夢を追う

タイミング悪く虫歯が痛み出す

無印に何にも負けぬ自負がある

昼の月ばかり女いさめられ

吹田市 野下 之男

侵略が大きな顔で歩いてる

付き合いで妻の南面を褒めてみる

女房は引き算だけのお小遣

どうすれば子供を上手く叱れるの

牛蛙自分の声に聞き惚れる

吹田市 木下 敏子

七癖を丸く包んでくれた愛

コツコツと金婚式へ蟻の足

どっこいしょ軋む日もあり蟻の足

聞き流すことに慣れたな老いの耳

角のある言葉も丸く巻き返す

吹田市 須磨活恵

目も耳もちびたか夫婦とちんかん
今日も無事哀れに思う蟬のこえ
御無沙汰をわびる暑中見舞書く
永平寺亡父の思い出夏木立
八月の傷の深さはまだ癒えぬ

高石市 浅野房子

秋がくる何かいいことないかいな
無為徒食それでも暮れる日は暮れる
死なへんか死なれへんかと苦勞性
待つことに草臥れた頃結果出る
浮き草の流れていつか着く彼岸

高槻市 執行稲子

理不尽な理屈に仰天してしまう
いらち癖信号無視で嗚呼星に
過去伏せて幸福のぞみ睨まれる
引出しで右往左往する秘密
隣から香りたいだくこぼれ花

高槻市 左右田 泰雄

打ち解けて日増しにつる思慕の情
老い先の不安を抱えうずくまる
攻めるより引く時にこそ要る勇氣
胸に手を当てれば思い当る節
押しボタン一つで決まる運もある

高槻市 杉本義昭

シンブルに生きて体が軽くなり
病状を明るく話す癒えた人
梅雨明けを待つて介護の窓を開け
おもちゃ箱手のない人形笑つてる
散歩犬毛並みと餌を競い合い

高槻市 井上照子

暑い陽を浴びて白百合凜と咲く
メルヘンの広場いろんな花がある
狭い門くぐる努力のピアノの音
根深さに意地を見せてる移植こて
体温の上ゆく暑さ負けまいぞ

高槻市 乙倉武史

走れ走れ遮二無二走れオシム節
万人の眼に審判の依古曩眞
判定は神の声です誤審でも
有頂天挫折時には良い薬
悲喜交々誤算続きが人生だ

高槻市 指宿 千枝子

神主の御辞儀は腰を深く折り
へそ出してヒップハングの女の子
カラオケは歌えなくてもついて行き
コンピニでおにぎり買ったエトランゼ
午後三時私も蟬もひと休み

高槻市 大崎 侑子

顔見えぬ犯罪助長ＩＴ化

腰掛けのはずがどつぷり嵌まりこみ

腰痛に医者薬はダイエット

目鼻立整っていて犯罪者

心根をそのまま見せる笑顔良し

高槻市 傍島 克治

逆風に耐えて男の真価みせ

拍手するから社長がマイク離さない

老いてなお妻との段差そのままに

内緒事あって人生楽しけれ

ここだけの話が減ってつまらない

高槻市 佐甲 昭二

裏のある話の輪には入らない

時々素顔見たくて拭く鏡

功名を焦る男がはまる罠

留守番をさせた金魚に餌をやる

母さんのひと言にみな黙り込む

高槻市 西谷 治三郎

気は心増税したので金利上げ

タバコやめ酒やめさされ葉増え

この歳でニートと変わらん暮しぶり

あんなだけと言った人が震源地

定年後ゼニにならない仕事増え

高槻市 富田 美義

裏返して見ると人間みな同じ

一冊の本に人生否定され

カネ多く食べて小さい事を言い

虚も実も信じてこそその二人です

せまい日本だから急げば早く死ぬ

高槻市 瀧本 きよし

少子化の日本憂える鬼子母神

笛の音に浮かれ踊っている天狗

足腰は強く心臓だけ弱い

雑巾を絞れない手が増えている

顔見たい里の母から来るハガキ

高槻市 生田 義一

梅雨晴れ間粹な女のサングラス

病得てあの食欲はどこへやら

天皇のメモで国中震度七

千秋楽日本力士はかやの外

迷ジャッジ世界のファンをハツとさせ

豊中市 安藤 寿美子

腹立てて蹴りたい石も無い八月

雑用と言うな大事な用ばかり

雑魚という立場気楽に生きている

雑踏に孤独な顔を埋めておく

役不足一寸すねてる顔が来る

豊中市 江見清

ネクタイの用意もしてるクールビズ
傘さしてあげるチャンスに雨が止む
合の手を時どき入れて聞き上手
いい傘が残りわたしの傘がない
役人はお詫びも形式ばっている

豊中市 水野黒兎

一杯のワインで妻は雲に乗る
一日の長さを決める哀と楽
ドリンク剤日本国中疲れ気味
ふる里に残ってほしい星月夜
掃除する妻から避難粗大ゴミ

豊中市 吉田あずき

地球にもシッペ返し意地がある
人間の知恵人間の首締める
よく見れば但しと書いてあったのに
お互いに尻尾を出して笑い合う
昼寝して脳のサイクル変えてみる

豊中市 藤井則彦

ウエストに抜かれバストが呆れ顔
せっちな人だと分かる影法師
デジカメのへっぴり腰へハイチーズ
腰痛と相談してる老いの恋
銀髪の美女に見とれて乗り過ごし

豊中市 樫谷郁子

忌はめぐる亡夫の想い出走馬灯
嗚呼八月運命だろか重い月
昭和史に見える情けのあつい文字
靖国に静かに眠る兄や祖父
故里も見知らぬ風が吹くばかり

豊中市 山門タミ

弱いとこ労り合って五体です
獣医院犬猫つれて仲よなり
朝ドラの婚約で征く身におぼえ
ニコニコと歳は忘れたおばあちゃん
この猫は大卒並の二十二よ

豊中市 岸田知香子

棚うめた柳誌整理に小半日
自慢する朝顔配り台車引く
筆筒出て浴衣変身アツパツバ
盆休み予定組まれぬ動けぬ身
差し向い兎小屋でもルールあり

富田林市 片岡智恵子

薄れゆく平和黙禱六十一回目
十万発の花火哀しいこと忘れ
芥子の花盛りはとうに過ぎました
あっちへ行つて吸うてと言える禁煙者
諍いをするもおっくう老いふたり

富田林市 稲川 惠 勇

夏バテをもつとジョッキで凌いでる
知らぬ間に診察券が束になる

子や孫に踏ませたくない同じ轍
リハビリを見舞つて逆に励まされ
葬送は河内音頭と書き遺す

富田林市 大橋 鐘 造

昭和史に蓄のままで散った花
銭いらぬうちに空気を吸つておく
ブライドを捨てて治った肩の凝り
気休めに言つた一言怪我のもと
偽善者のメールにまたも騙される

寝屋川市 籠島 恵 子

喜びごと悲しみ事を越えてくる
あれこれと考えないでまず当たる
桃の種かなり強情かもしれぬ
ふるさとはもつともつとの蟬しぐれ
まるで他人天気の話ばかりして

寝屋川市 平松 かすみ

生年月日はるか昔になって来た
バリ島は余程良いところらしい孫
退職金年々痩せてパンの耳
新聞は老いを困らすことを載せ
夕暮れの土手を彩る月見草

寝屋川市 坂上 高 栄

聞く耳を持たぬミサイル発射する
丁髷もまだ幼くて上位陣

事件事故あおおぞましくなる末世
自衛隊無事お務めをお疲れさま
淋しいね浪速の夜空星がない

寝屋川市 森 茜

ジュースサーバー部活帰りも立ち止まる
すつぱりと蚊帳外壁の塗装中
ムンクの絵わたしの雨期もこのように
なかよしになりたい針で突く言葉
笑わない幼な子母の痛み知る

寝屋川市 太田 とし子

ゆつたりと構えて屋根のない仏
ユニークな挨拶新人が翔んでいる
囁いて胸の斑をもて余す
八ツ当り蹴ちらす石が見当らぬ
盆の月いつか私に用がある

寝屋川市 富山 ルイ子

死生観ぶつつけとことん議論する
ホームへの見学誰も手を挙げぬ
倒れると友に迷惑一人行く
明日逝くも悔いぬ命を抱いている
待ちぼうけ君は絶対させぬ人

羽曳野市 徳山 みつこ

居眠りのセンセイお国で反り返り

DNA継いだか けちんぼの息子

介護ロボット買ってお金貯めている

丸投げに列島ポコポコと沈む

ストレスを食べてスカートまた泣かす

羽曳野市 吉川 寿美

こよなきものまだ引きずって愛その他

白を白と言うて吹き矢が飛んできた

煮凍りの好きな男でたわいない

身から出た錆に行く手を阻まれる

言い訳につまずく花が白すぎて

羽曳野市 酒井 一壺

老人も元氣すぎると憎まれる

お金では買えないものも今はない

鉛筆を粗末に使う不勉強

見えみえのお芝居ばかり永田町

休刊日二十四時間持て余す

羽曳野市 三好 専平

心を買うための金ならたんとある

カネよりもコネの利く世は住みにくい

無農薬ウソとわかっていても買い

孫請けのその孫請けの先は何

テクニクをコロツケに変え生きのびる

八月の朝寝許さぬ蟬の声

ある物で済ます昼餉へ雨止まず

一人居にバントマイムの日が暮れる

声変りして帰省子の無口なり

高校球児昭和が遠くなりにつけり

阪南市 森村 美花

肉じゃがの甘味が家族和ませる

本心はどうあれ仲良くしてる嫁

映画でもそんな時間が出来ました

ばあちゃんと風呂に入ると言ってくれ

感想が微妙美味しくないらしい

東大阪市 谷口 義

雑用がすんだら敵討ちに行く

雑念を捨てると退屈するだらう

家計簿は雑費と書いてあるばかり

大雑把なDNAを継いでいる

一番に生まれただけで長男だ

東大阪市 西村 哲夫

嘘だとは分っているが笑顔好き

点と線妻が引くからケンがある

雨こんこん我が家の猫は土足なり

クラシック終ったようだ拍手をし

平等と言えどもそれぞれの思い

東大阪市 北村 賢子

出勤時気軽にゴミを出すスーツ
敗北の球児涙と汗まみれ

ぶつからぬようにスーパの冷めぬ距離
ぶつからぬ気配りアナタオカアサマ
されるよりしてあげる幸ボランティア

東大阪市 米田 水昇

祭り果て金魚大きなあくびする
流し目は日本舞踊で身につける
直下降パン横取りす肥えた鳩
京めぐり物静かなる野の仏
紗の着物お茶の師匠は爽やかに

東大阪市 佐々木 満作

胃薬を飲んだ直後に酒を飲み
価値観がすっかり変わる世の動き
空財布金あるようにティッシュ詰め
年金の目減りバイトで補填する
お互いに凭れあつてゐる日と米

東大阪市 笠井 欣子

退院を指折り待った青畳
まっ当に生きてストレス溜めてます
上澄みの下で沈澱してる自我
フライドがバリアフリーを寄せつけず
家中が携帯持つて逃げ場なし

枚方市 海老池 洋

どんどんと野猿の増える少子国
地球儀を回して少し旅気分
肩書きがなくなり丸くなった影
断つて骨ある人にされている
隠し味みたいな妻の力添え

枚方市 寺川 弘一

青信号の前では誰も迷わない
終電車まで働く人と遊ぶ人
老い一人いま響くのは歯痛のみ
百歳までは生きてこの頃当たり前
嘘も吐きます私は並みの人間だから

枚方市 二宮 山久

孫が来る妻と二人で大掃除
孫の顔元気はつらつ気をもらう
玉の汗かいて草引きこれ仕事
九十三歳母は暑さにかつ電話
孫台風通り過ぎたる部屋の中

枚方市 宮川 珠笑

御先祖のお宝鑑定人苦笑い
菓の妙を見てるとくもが舞うてくれ
御来光地動説など忘れとこ
散水を手抜きした如もう乾き
主夫に馴れちらしの店は皆なじみ

枚方市 安達 忠 央

しくじりに妻の温さが待っていた
ありがたや趣味にはまっつて歳忘れ
褒め上手子の成績に実ってる
薬効を信じきれたら熱下がり
左遷の地鄙の人情あつたかく

枚方市 丹後屋 肇

有難たや背中をかいてくれる妻
のめり込む息子に恐くなるゲーム
オンザロック擦れ合う音を吞んでいる
逃げ水や路面電車の千鳥足
高瀬川柳引きざるネオンの灯

枚方市 荘 司 弘 之

人生を考えたくて一人旅
マイペース満喫してる一人旅
青海島我が物顔で泳ぐ僕
炎天下ゆうゆうと飛ぶビーヒョロロ
夏漁港もぬけの殻の昼下がり

枚方市 森 本 節 子

ペット同伴丹後半島の旅に出る
滔滔と円山川はおだやかに
玄武洞奇岩の前で小さく立ち
きらめいた星の最後は白い残骸
オートロック裏門たびたび開いている

枚方市 伊達 郁 夫

雑巾にされた戦士の白いシャツ
道譲り風を避けてる老いの知恵
一年も待った桜がすぐに散る
全力に薬一本が味方する
すぐ怒るきつと素直な人なんだ

藤井寺市 高 田 美代子

銀杏の出来を眺める御堂筋
夕立ちが来そうで走る橋一つ
アスファルトの路を荷馬車のゆうるりと
道修町煎じ薬の匂いして
ご利益や南御堂に御霊さん

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

追うことはやめたしゃぼんは逃げてゆく
乾杯の好きな友達増えてくる
書き出せばいっきに恋の綱渡り
朝になり握り拳は解けていた
わがままを通して横になつてゐる

藤井寺市 中 島 志 洋

ある振りも無い振りもする年の功
手の届く処で男泳がされ
聞き捨てはしない貴方の罪な嘘
やどかりが次の我が家と決めた貝
自惚れがあるから続く趣味の道

藤井寺市 楠 昭子

柔らかい方が良いのか脳と餅
私の脳どこかに穴があいている
子等自立夫婦は元の絵に戻る
助っ人と思つた人が来てくれず
別びんで仲間はずれにされている

藤井寺市 鈴木 いさお

いつどこで果てるか今を熱く生き
たかぶりをぐっと抑えて深呼吸
ありたけの力で乳を吸う赤子
S I N J Y O のパフォーマンスが客を呼ぶ
不束なムスメだけれどわが娘

藤井寺市 若松 雅枝

お若いと言われて怒ることはない
恒例の花火が済めば秋の音
ぶつかった嫁と姑にあるドラマ
抜け殻を残して消えた蟬時雨
暇だから明日飲む薬揃えとこ

箕面市 出口 セツ子

傷つけられるたびにしている垢落とし
おせっかいやける五体がまだ元氣
身の丈の幸福もらうナストマト
悩みなど溶けてく盆の墓洗う
子の笑顔明日へパワーが満ちてくる

守口市 井上 桂作

被爆認定生きている間にまに合せ
核兵器怖さを知らぬ国ばかり
天はまだ許しはしないアメリカを
沖縄戦現地さまよいまた涙
靖国論いくさ知らない世代まで

八尾市 宮崎 シマ子

やがて鬼になる予備軍にいるわたし
夏まけもせずひまわりと蟬しぐれ
車座の丸さにあつた心意気
子供等に当てにされてるまだ生きた
待ちかねたバスおおらかにやって来る

八尾市 山本 宏至

公平に配り自分の分がない
気配りのボディブローが効いてくる
隣との間に深い谷がある
ご近所に配れと里の旬届く
痛みわかる人の言葉に情こもる

八尾市 吉村 一風

七夕に内緒を吊って見つけれ
黙ってはいるけどほんに嬉しそう
ちさい嘘入れてるなあとグラス干す
あたたかいハガキ二度見る三度読む
優しさについてほだされて馬鹿を見る

八尾市 村上 ミツ子

起立して黙祷八時十五分

大阪と京都が暑さ競い合う

元氣かと友は一声かけてくれ

うっかりと下手な指切りしてしまう

約束を忘れあの世へいったきり

八尾市 生嶋 ますみ

お供えは口実すきなオハギ買う

つけ忘れたり消し忘れたり門灯

一日を重ねかさねて八十路なり

何もかも暑さのせいにして手抜き

湯に浸り身の振り方を考える

八尾市 長谷川 春蘭

自動ドア出でし一步の暑さかな

雨激しビルは都会の金魚鉢

夏のれん二つに割れて女出す

九十六歳たたかっている暑さかな

大阪の長き残暑がはじまりぬ

大阪府 初山 隆盛

薦の這う甲子園から祈る声

極寒の隙間風ほし熱帯夜

民宿の穴場で愛でる海の幸

ジャンボくじここの売り場で買えという

湯上がりに牌を囲んでいる羅漢

大阪府 米澤 俣子

雑念に脳がビイビイ鳴りつづけ

通帳にホクロのようにつく利息

ときめきを胸のリボンに覗かれる

耳鳴りは脳が乾いたんだきつと

あつさりと引き受けたけど荷が重い

大阪府 野田 栄呼

金と杖しかと持ちたい終焉へ

顔つくる早さで中身つくれたら

炎天下野良へ出る人ない時代

見る方がいらだってくる長い爪

自家野菜食卓飾り動く箸

大阪府 桑田 ゆきの

手波こぎ父母の流灯寄り添わす

自己主張両手の拳握りしめ

手抜きした料理暑さのせいにする

星月夜探し当てたる恋星座

父と子の絆濃くなる肩車

大阪府 澤田 和重

病ぬけ妻は多弁を取り戻す

声だして笑うと福の神がくる

おふくろの味に出合わぬ試食会

パチンコへ指が年季を積んでいる

裏の顔みせたことないクラス会

大阪府 熊代菜月

神戸市 田中章子

山彦の返事待つてゐるツアー客
もう一步出せば明日が近くなる

一年の早さが恐い年になり

七曲りして人生に味があり

午の背で母帰る来る盆の入り

大阪府 前田 ゆい

浜木綿を供え今年も元気です

花植える土あり何を不足言う

インパクト足りぬ他人の恋の詩

激動の世に見通しは立てられず

久々に三十路婚聞き胸撫でる

神戸市 山田 婦美子

一人居て金魚の欠伸聞く午睡

溜息も吐息もまじる梅雨最中

玉の汗かいてストレス追い払う

する事のない日は何故か落着かぬ

弱気など吐けぬ猛暑に咲く木蓮

神戸市 伊勢田 毅

年金の枠を越えてる好奇心

三面の隅ではのほの記事に会う

キヤスターが人間の死を軽く言う

口も手も達者な古希が煙がられ

少子化で蟬伸び伸びと鳴き踊る

暑ければ暑いで文句言うからだ

非日常入院さえもときめいて

旅慣れた靴に御礼を言つて捨て

まず土産買えば半分旅終る

それだけのことが救いになることも

神戸市 木村 貴代子

好きそうな記事だけを読む老眼鏡

置き忘れのあれこれ探す時間惜し

ゾツとする事件も続けば慣れてくる

真夏日に蟬が歓喜の大合唱

憎しみが憎しみ生んで消耗戦

神戸市 山口 光久

這い這いの先に無限の可能性

孫たちとの指切りだけは破れない

浮き沈みあつて帳尻合つた今

雲行きを読んでタクトが踊りだす

公園のベンチはドラマ知っている

神戸市 山口 美穂

この暑さ捨つるとこなし麦茶飲む

ファッションはズボンずらして穴をあけ

元気ではないけど見栄をはっている

悪いこともそつと見てます昼の月

正義の戦などない多くの人が泣く

相生市 中塚礎石

負け組もそれなりの輪で盛り上がり
そこそこの話手土産たかくつき
体調もよし口紅のつきがよい
リハビリの一步一步に希望もち
正座した膝に手を置き食いしる

芦屋市 黒田能子

うずうずとやる気のために合図待つ
今朝も元氣大きな声を出してみる
母さんが一番強くなってきた
スランプと言つてしまえば格好いい
雨の日はゆつくりと聞く雨の音

尼崎市 春城 武庫坊

ひとつ知りひとつ忘れて無事すごす
紫の艶食欲が出るお漬物
地球の何処かで平和を破る音続く
雑草と害虫といくさ炎天下
風鈴を吊るして秋を呼びこもう

尼崎市 春城 年代

便りとだえて友それぞれに老いて候
この歳になれば自ずと席定まる
夜に爪切るこの世に父母はもう居らぬ
ココアに焼酎ひとさじ入れて召し上れ
ある日おへそがもぐもぐと喋り出す

尼崎市 長浜美籠

エコロジーこの児の寝顔守らねば
墓前にはいい話だけ聞かせます
言い変えてみても本音は変らない
知らぬ振りするのも愛の一つかも
年月が育ててくれた思いやり

尼崎市 松下比ろ志

夏煽る天神さんとギャル神輿
背比べの柱に遠き夏祭り
幸せは逃げたりせぬが見えにくい
曖昧な顔で追い風待つている
老友と会えば一期の別れ言う

尼崎市 軸丸勝巳

一億が世界を食べる食事情
輸入肉よろける牛が目に浮かぶ
安全な地産地消の食文化
栄養の講話に食事不味くなり
栄養学知らずに育ち目指す百

尼崎市 林 昭三

唯今と写真に語り灯を点す
茅葺きの屋根出稼ぎの父を待つ
エベレスト世界の屋根を越える鶴
梅雨あけに何時生まれか蝉が鳴く
流れ星一つ気になる里のこと

伊丹市 山崎 君子

蟬の合唱目覚しがわり今日も晴れ

夏祭り今年も母の浴衣着て

原爆忌あなたに逢う日近いかも

お寺さんバイクにスーッ袈裟ゆれる

里の井戸西瓜の上にうすい月

川西市 西内 朋月

顔色を見ながら嘘を組立てる

棚経の知らせ来る頃梅雨が明け

浄土へと誘うが如き遠花火

酔うほどに本音がぼろり零れだし

残照が風紋染めて旅終る

川西市 米原 雪子

助っ人のカタカナ語辞書手放せず

集中豪雨川は突然鬼の顔

七の字に日本の文化生きています

山の宿せせらぎの音眠らせず

隠し芸お人柄をも引き立てる

三田市 久保田 千代

のど元を過ぎればやってくる誤算

見上げれば誰も平和に包む空

梅雨晴れ間土塀の映える古都の街

こんなにちは自信の聞けるいい響き

着崩れぬ姿明治の女です

三田市 石原 歳子

友が逝き心に穴が開いたまま

地図帖の線路をたどり旅気分

何もかもこなしで遊ぶ心地よさ

子雀の隠れ家なくす草刈り機

亡き母と同じ顔して本を読む

三田市 堀 正和

黄味ふたつ今日は嬉しい朝ごはん

イワシ雲見ると食欲湧いてくる

行き詰りはじめて読んだ説明書

本棚を一段空けた電子辞書

好奇心満たすネットを散歩して

西宮市 門谷 たず子

極楽行きのバスが只今出たばかり

手を引いてくれる子がいる水たまり

渦巻の中を逃れてゆく旅か

幸不幸振子のごとし鰯雲

遺書かけぬベンがこの世に持つ未練

西宮市 西口 いわゑ

心ない嘘をついてる負の境地

日本人やはり浴衣がよく似合う

沈黙考時々動く団扇の手

例えばという空間でためされる

胸に火がまだ残ってる走らねば

西宮市 山 本 義 子

蟬の一生ひきあいにして済ませぬ

ブラックコーヒーで収まるほどの怒りなり

切り花より鉢植を買う小賢しく

赤とんぼ深呼吸する秋の風

好きな秋駆けてきました白芙蓉

西宮市 牧 渕 富喜子

おばあちゃん虹が出てるとメール来る

わたしより上手に娘育ててる

やり出すといっ気の癖が直らない

人生書すなおに読んでくたびれる

民主主義もらったつつけがどつとくる

西宮市 緒 方 美津子

樟若葉緑陰にする清掃夫

二つ折り祖母のいぬむり苦しそう

火遊びはしたい火傷はしたくない

午前二時楽しい事はひらめかぬ

災いはこの筒抜けの声だった

西宮市 片 山 忠

さらし者みたいに夫を待たず癖

ぶちまける相手はいつもお父ちゃん

精力のバランス妻に合わせとく

好きだった女に黙祷クラス会

救急車呼ぶよりさすって貰いたい

西宮市 菊 池 トミエ

蟬しぐれ風鈴鳴って二重奏

風になり会いに行きたい人がある

腰曲げて仲間が揃う盆おどり

浴衣着て川床料理おいしかり

丸うちわきれいな花の夕涼み

西宮市 井 上 松 煙

柔らかい物腰について気を許し

お若いとお世辞いわれて真に受ける

低い腰高い勘定払わせる

相聞歌いまも唄っている埴輪

細やかに目標立てている余生

西宮市 坪 井 孝 一

自分史にいつも邪魔する迷いごと

振り向けばボクを叱ってくれた人

精一杯生きてる何時も頑張って

無人駅風と訛りに触れたくて

充電のつものの酒で火傷する

西宮市 秋 元 て る

盂蘭盆会父知らぬ子も定年だ

耳遠く独り合点の悲喜劇も

絵手紙へお礼は電話のミスマッチ

握りしめられた見舞の手が痛い

風化した昔の恋がいとoshii

西宮市 亀岡哲子

醜いが味ある茄子となりはじめ
病院をたまに体験老い仕度
十代のもったいなくも厚化粧
子を守る輪の広がって行く仲間
この星の戦国時代いつ終る

姫路市 古川 奮 水

目玉焼今朝も元氣だ髭を剃る
二次会に地酒持ち寄り夜が白む
曇天の午後もしんわり紫外線
雑踏に負けじと宣伝カー響く
病む床に年金日きて西瓜買う

兵庫県 大谷 幸次郎

さわやかな口調が気障と疎まれる
海藻の殖えない海で海開き
土用波旅立つ燕追うように
蟻の列獲物の翅を旗にして
ひょいと頭を擡げる胸の正義感

奈良市 米田 恭 昌

海鳴りは厳父の励まし聞く如し
熟年離婚積もる怨みが弾け出す
パソコンを基敵にして老父夢中
なりゆきにしては奇特な子沢山
寝たきりが這い出してきたいい話

奈良市 天正 千梢

自分流定位置決めている寡黙
舌足らず天下とりたい夢を追
頂点で心さみしくなっている
情けには負けてはならじ帯を締め
恩返し何も出来ずに日が流れ

生駒市 飛 永 ふりこ

浴衣きてギャルも内股夏まつり
食べ放題桃の頬つべを丸かじり
おかげさま三代揃う墓参り
太陽と海が手招くフラダンス
波の上まばたき惜しい花火会

香芝市 大内 朝子

あっけなくさよならをする夏の恋
手のひらをひらりと返す寒い風
鬼灯の中身抜くコツ知っている
娘に戻り父母偲ぶ墓参り
リセットの出来ぬ命をあたためる

橿原市 居谷 真理子

老いの恋これはニギビじゃないかしら
耳打ちで君の匂いに染められる
民宿の娘今年はどう喋る
上乾のちりめんじゃこの目の強さ
虫けらの命をかけてする脱皮

檀原市 安土理恵

告白はしないこのまま見てるだけ

良心はまだある貧乏くじも引く

野の花が好きです淋しい女です

秋だなあ妻移動性低気圧

ドナーカード今なら具合よい五臓

大和郡山市 坊農柳弘

菊愛でる亡父の意志を抱いたまま

コスモスの誘いにひとり無人駅

沈黙考自分探しの秋ひとり

天辺を狙う足許固めねば

ひと言が多くて一人蚊帳の外

奈良県 渡辺富子

蟻になり炎天を這う人の群れ

万歩計へピンピンコロリ言い聞かす

受けるギャグどっさり持つて友見舞う

相打ちの傷かさぶたになって秋

父と子の思惑ずれるのが普通

和歌山市 木本朱夏

引き返す勇氣あの時あったなら

粒選りの涙おんなのアクセサリー

さみしさが押し寄せてくる夕明かり

ひとりでは寂し西瓜の種を吐く

一途って良いなあ胸がキュンとなる

和歌山市 喜田准一

輪の中で被害加害が入れ替わり

黒白をつけずに友を引き止める

詰め寄れば酒を注がれて躲される

成績は問わぬ元気で育つなら

誤解した素振りですべての好意

和歌山市 福本英子

真心を売っているのに気付かれぬ

もつたない話は姑と協和する

夏休みああ夏休みくたびれる

背伸びして着付けにかかる汗ばとり

脱税の額が気になる貧乏性

和歌山市 武本碧

逆風へ一途に回る風車

月下美人夜明けの月は見ぬ定め

ラッキーなレールにもある魔の軋み

DNAのいたずらだらう汗っ掻き

酸欠の脳に届かぬ洒落一つ

和歌山市 玉置当代

越して来た坂を今更振り向かぬ

忙がしく回る論吉もわたくしも

治つたら今度はおしやれすると言う

滝の如く汗を流して小商い

ピリ辛のカレーに頼る暑氣払い

和歌山市 田中みね

和歌山市 楠見章子

やっぱり夫婦どうくさそうが貶そうが
ごしごしと嫌な握手をしたこの手
糠喜びにおわりシヨックを隠せない
面白い顔らし赤ちゃんよく笑う
褒められてその気になって後こなす

和歌山市 松原寿子

空白が続いて運が逃げてゆく
さむい掌にいつも望みを持ち続け
陽をはじく森はだんまり押し通す
限界と知って崩れる砂時計
崖つぷち続きふたたび抱く炎

和歌山市 堀畑靖子

地獄絵の夏もはるかな蟬時雨
九条のベースを守りたいミット
公約にホンマかいなどガムを噛む
当然のことをせぬ人多すぎる
死にそうとヒマワリ悲鳴あげている

和歌山市 古久保和子

本日多忙昼寝想定内のこと
声色で電話のセールスと遊ぶ
赤信号の少し手前にある木陰
への字しの字ミミズに酷な油照り
耳底へ連れて帰った蟬時雨

原点は裸やっぱり夏が好き
野菊一本飾る暑さのど真ん中
化粧水をたっぷり艶が戻るまで
ストレスをみじん切りする台所
秘密など無いさ仏壇開けたまま

和歌山市 福井桂香

ひたすらに涼を求めて蟻がくる
しょうもない物でもその気配りがうれしくて
老いらくの恋は祈りの形に手を重ね
アバンチュールもよい魂を迷子には出来ぬ
夕立は雷さまと二人連れ

和歌山市 松尾和香

シンブルな父のまごころ保証印
蟻の性 城を守って生きる僕
少年の澄んだ音色にハーモニカ
燃え尽きる八月の恋蟬時雨
青い空鐘の音色に原爆忌

和歌山市 宮本三喜夫

役人もボロ次々と出て来ます
私欲ばれ辞職勧告市議が増え
自信ないお方は辞めておきなさい
湯沸し器昔の事故を今騒ぐ
今の子は働かなくて悪さする

海南省 堂上泰女

沈む陽へ孫と一緒に童うた
全身が笑顔になったフラダンス
満月が浮き世へ零す潤滑油
スリムなボディー無駄なく生きているんだね
妙に遠慮しないあなたに気を許す

鳥取市 鈴木公弘

朱に染めた独りよがりの手を洗う
夕焼けの味覚を忘れないように
スタートはきらきら光る靴だった
まっすぐに飛び出た頃の羽がない
ひとつずつ忘れ去られて風になる

鳥取市 倉益一瑤

六法は知らぬが涙たんと持ち
初恋が黄ばんでいますクラス会
しらんぷり上手になってから太り
ひとひねりしました芝居打ちました
口いっぱいに種をふくんでいる野心

鳥取市 夏目一粹

思いやる心はいつか解けてくる
気休めに叩いて買ってゆく西瓜
心配がなくなり思考回路ON
死ぬまではゆつくりさせてもらえない
細りゆくキャッシュカードの独り言

鳥取市 有沢せつ子

古希というちよつと寂しい歳迎え
今日の事日記に書いて荷を下ろす
完熟を待ってたトマト葉が枯れる
ご馳走を囲む瞳がやわらかい
口紅を塗って自分をしゃんとさす

鳥取市 土橋はるお

この上も御祓箱にならぬよう
うなずいてばかり解った顔をする
年金が余るだなんて法螺こくな
合併の不満なにもつきまとう
手拍子も音痴男はずれている

鳥取市 武田帆雀

跳躍の名選手なり蛙の子
盆客へほつこら咲いた蓮の花
アメリカが来てガムを噛むプロ野球
字配りを揃えて無駄のない葉書
鉛筆を挟む大工の耳の型

鳥取市 春木圭一郎

妻の言う通りにすればつつがなし
何気ない会話で夫婦保たれる
プライドを傷つけあわぬのがルール
奥さんが明るい家は明るいね
結局は二人で築く夫婦像

鳥取市 中村金祥

水平線彼方に拉致の子が叫ぶ
好物を孫と競争して食べる
駐禁へ街が素通りされ寂びる
亡父の顔いつになつても睨んでる
おしゃべりの中にヒントが詰まつてる

鳥取市 土橋睦子

道草がすぎて断り辛くなる
大海の怖さを知らぬ雑魚の群れ
色白の息子に小麦色の孫
ラブソング花に聴かせて水をやる
どの案も金の話にゆきづまる

鳥取市 録沢風花

介護保険有無を言わず値上げされ
この炎暑耐えねばお米作れない
スポーツも戦国時代のようになり
旧姓で呼ばれはてなと考える
両親に贈りたかった感謝状

鳥取市 杉本孝男

約束の場所へ恋人来てくれぬ
自己主張ばかりで耳を貸さぬ国
外交のカードに核をつき付ける
好カード寝不足なんか厭わない
核心を衝く新人の頼もしさ

鳥取市 岸本孝子

激辛のカレー体に活入れる
痛いとは言えず老老介護する
夏休み蟬もカブトも身構える
あの人の無心よほのことだろう
どの色が欠けても虹の絵にならぬ

鳥取市 林露杖

残照の微風に光る稲の花
暑に耐ゆることも試練と老いの夏
粗方の仕来たり省く盆用意
原爆忌カッとカンナの朱が燃える
郡山で聴いた終戦詔

鳥取市 近藤佳子

ご馳走と言えはおはぎという育ち
枝豆のポツンと跳ねて異次元へ
食べて寝てむつかしいこと考えぬ
脳みその隅までとどけ豆ごはん
褒められるようなことなどしてません

鳥取市 西村黙光

酒とろり魔法使いが馳けてくる
夢売りへハート煌めく陶冶の詩
水割りと熱燗集う熱帯夜
傘寿になり縁切り誓う免許証
酔い回り時計の針が狂い出す

鳥取市 吉田 弘子

夾竹桃平和の彩で咲きほこる
弾み癖あつて反省繰り返す
乗せられて冒険好きが投資する
ダイエツト敵は自分と言ひ聞かす
暑さなど物ともしない球児たち

鳥取市 奥谷 彩子

大空をつかめと父の肩車
たくましく育てと白地図子に渡す
冒険の風に乗りたひ夏帽子
灰皿の出番なくした会議室
ガンジスに俗世を離脱する流れ

鳥取市 田村 邦昭

嘘つきの握手冷や汗とまらない
男とはロマンを食べて生きている
いまさらに空気のうまい故郷を知る
ちぐはぐをうまくまとめていい夫婦
名月をいつまで愛でる手酌酒

鳥取市 加藤 茶人

北枕私は心地よく眠る
恐いのはテポドンよりは浮気ばれ
ボケて来て神も仏もなく眠り
釣るまでと釣られてからにあるギャップ
生きているものの都合で仏事延び

鳥取市 堀 寛子

平然とミスる己が恐くなる
スーパ―へ今日もボトルで貰ひ水
うまい水血もサラサラでおひるねを
炎天下はびこる草の根と勝負
甲子園アラマ私が打つたらか

鳥取市 山本 益子

迎え火の灯りに霊は故郷へ
酒の宴リストラの愚痴ほどほどに
夏盛り毒だみ草のきつい香よ
急ぎ足タイムバーゲン女ゆれ
地産地消費省の子らに海の幸

鳥取市 福島 庸二

握手した手の温もりを忘れない
点滴の雫と長い会話する
思い出し笑いの涙堰切れる
絵手紙に添えた言葉で引き立つ絵
信頼もことば一つで軋み出す

鳥取市 西川 和子

延命の器具に見舞も辛くなる
盆おどり精霊たちも輪の中に
またチャンス逃したらしい黙り込む
さあチャンス努力の汗は惜しまない
そこそこの成果に自信取り戻す

鳥取市 福西茶子

隣地から蔓草ナスの首締めに
省エネの部屋でサウナと同じ汗
騙す気はないが逢う日の厚化粧
貧乏と親の汗みた子はぐれぬ
旗揚げぬ人も旗日には休む

鳥取市 福田登美

小半日心を洗う盆施餓鬼
ひとつひとつ言葉を選ぶ歳になる
過去の絵は遠くなるほど美しい
年毎に脳の軽さが気にかかる
決意などしない女の自然流

鳥取市 永原昌鼓

骨になる人が讃辞を聞いている
逆縁の母を泣かせた骨拾う
いとし子の拾った骨が軽すぎる
骨のある男も転ぶ銭の道
カサカサリわたしもこんな骨になる

鳥取市 宮脇道子

猛暑です守宮の親子今晚は
老いの夏グランドゴルフ汗飛ばす
猫の群れ涼を探して眠りこけ
大海を初めて知った青蛙
若い頃海で遊いだことがある

鳥取市 下田茂登子

合併に憩の家が消えた過疎
方言で喋ると口が楽になる
農道も渋滞します休みの日
切札は核を出します最後の手
歳忘れ頑張りすぎてずっこける

鳥取市 山宮愛恵

マイペースのそれぞれが居ていい五人
五人から学ぶ野心のないおんな
笑うたびやさしくなっていくようで
三人が目と目でかわすカフエオーレ
夕食のおかずで話けりが付き

倉吉市 山中康子

梅雨明けと立秋あわや鉢あわせ
水害の怖さ歴史に残るほど
現役に余生は絶えず頭下げ
八十路坂越えた夫婦の倦怠期
メリハリの欠けた暮しも楽でない

倉吉市 米田幸子

最後には人の情けに胡坐かく
よれよれになっても銭は手放さぬ
あばら屋を涼しい風が吹き抜ける
六畳の海に鯨が横たわる
カーテンが開かぬ独居の身を案じ

倉吉市 猪川 由美子

鳴き砂へ自己の悲しみ合わせ泣く

イケメン医へドキドキ異波の心電図

取組後浴衣の背なは物語る

セレブ女医リッチの蔭に杜撰有り

ホリエモン出所美食でリバウンド

倉吉市 最上 和枝

松かさの写生じゃが芋出来上る

ハウスの城で熟れた苺の大会唱

ほのぼのと半熟卵風呂上り

酒と縁切って甘党宗旨変え

戦争に菓子奪われた昭和一桁

倉吉市 牧野 芳光

毎日が記念日になる母子手帳

神はこの世を片目を閉じて見てなさる

暇な日は迷惑メールさえも来ぬ

空の青見れば恥じらうことばかり

いたわられるたびに傷口うずきだす

倉吉市 山本 玲子

疲れたね気楽に寝転べる我が家

転ぶなよ手をさしのべたのは夫

ブライドにけしかけられて綱渡り

あの頃はわたしも株主だったっけ

母さんの愚痴を聞くのも親孝行

米子市 政岡 日枝子

よろこびの菓子が誰よりも語る

松が倒れる私支えてあげれない

親しく見れば橋の由来も面白い

沈む陽が待つてくれる故郷の橋

挨拶が始まるみんな同じことを言う

米子市 白根 ふみ

石けんで洗う昭和史まだ匂う

伝承を庇いとおして築地松

わたくしの城を折おり開け放つ

駄菓子ざらざらで方言なめらかだ

職人と松の会話はむずかしい

米子市 野坂 なみ

天災と人災夏の水攻めに

招待状かく夜明けの大賀蓮

城下町の格式県庁持っている

同じ法被着せてもらって仲間入り

心経の空のところが掴めない

米子市 林 瑞枝

面映ゆい女性の寿命世界一

花火散る夜はわが家も宴会だ

声上げて歌った夜はよく眠る

孫の嫁お目出度らしいいい電話

カメラ提げ美女の後追う山歩き

米子市 光井玲子

八十路坂明るい彩を身につける
庭の松伐つてころに穴があく
城一つあるかないかで街の格
平穩に過ぎる暦のありがたさ
時々呼吸が乱れ老いを知る

米子市 中井ゆき

城あとの風はやさしい語部だ
風の盆みんなで رفتた坂の町
一二三気合を入れて立ち上る
これからも生きてお盆の灯をともし
逢えぬ間にすげなく伸びた松の芯

米子市 青戸田鶴

夏つばき散つて新盆悲しかり
五十名山三位の大山うれしいな
だんかいの世代に向ける応援歌
眠りからさめた平野の土偶たち
甘い菓子急に食べたくなる日暮れ

米子市 門脇晶子

コップ一杯明るい朝の神の水
無口から引き出している糸車
盆踊り月の明りも透きとおる
孟蘭盆仏の住処みとどけたい
終列車発車まぎわに乗るつもり

米子市 木村春枝

私の地図いつも明るい橋かける
肚のうち打ち明け合える友がいて
また一つ諦め積んで八十路ゆく
いざの時考えながら充電中
恙ない一日でしたただ感謝

鳥取県 谷口次男

一時でも平和が欲しい血の叫び
人間は知らぬ同士が響き合い
日本が廃れる国に数えられ
国連は役に立たない飾りもの
飾りならアフリカ人が世界一

鳥取県 山本正光

体重の増えたことなど言うわぬ
やうとこさ阪神勝ったテレビ切る
百選の大山三位乾杯だ
カンナ咲く今年もめぐる原爆忌
大山が呼んでる秋の深いそら

鳥取県 竹信照彦

熱帯夜黙つてとまる蚊を叩く
真夏日は動かぬように努力する
紫外線避けると家に籠るだけ
地球でも散髪しよう草刈機
切れぬ鎌研いで畑へ持つて行く

鳥取県 蔵本悦子

出入口迷路になつて行くこの世
びつたりと合わぬがこれも人生だ
夕立は空のストレスかも知れぬ
この暑さ色気も欲も消えて行く
女房が毒を吐いたか色気出す

鳥取県 佐伯やえ

逆縁の仏へ上げるホトトギス
昔からちびた鉛筆には弱い
人生挽歌美しい絵よ秋の道
夕焼けの音がきれいでまだ死ぬぬ
ひらめきのあるうち遺書を書いておく

鳥取県 深田倶久

盆に鳴く育ちの遅いホーホケキヨ
何時の日か吾も納まるか墓掃除
旗立てて没句が夢路襲い来る
終戦の夏の日語る老い二人
手を合わせ平和を希うご来光

鳥取県 太田幸枝

転つて来た幸運を取り逃がす
老いらくの恋のチャンスがつかめない
病んでから老人らしくなつて来た
何も手につかないほどに恋こがれ
認知症脳ミソ振つてみたくなる

鳥取県 盛田夢路

朝露に咲いた名もなき花を活け
政治家が口を五つも持つている
煩惱が我が身滅ぼす種つくり
藍色の女で偶に嘘も言う
名ばかりの親が虐待する恐さ

鳥取県 平尾菜美

らくらくに染まるはじめが鈍くなる
前線に備えた傘が大好評
上目使いやめて額は大らかに
今私姑の境地に立っている
姑の影まといさまよう森の中

鳥取県 山下節子

ご先祖の肥やした土だ捨てられぬ
一粒の豆が天まで案内する
四股ふんで頬をたたいて活入れる
設計を骨ぬきにして墓穴掘る
耳たぶが手頃な話よりわかる

松江市 松本文子

思い出がぶよぶよしたら忘れよう
手を洗ひさあ始めよう形見分け
カラコロ橋伝説だけは知っている
喪の家に集う忍者の彩を着て
白に包まれ卵の黄味は超過保護

松江市 小川 注湖

改革は勝ち負け分けて知らん顔
転勤地出雲の神で家族出来
甘味さえ塩の加減で引き立てる
改革が通った後に閉じた店
掛け軸の鯉は空見てやる気出す

松江市 三島 淞丘

一日のシナリオをねる朝の膳
まだ見えがあつて頑張るストレッチ
出不精になった夫婦に遠花火
ボトル一本空いて今夜を締め括る
広島をヒロシマなどと書く歴史

松江市 安食 友子

バーデイーをちよつと身内になつて観る
人生もおじゃんになった天の邪鬼
断崖はくだらぬ私欲受け付けぬ
滝しぶき虹も背負ったハーモニ
自由さと不自由さとのごっちゃ混ぜ

松江市 津川 紫晃

善人でいたい愚直な汗を積む
身のほどを忘れて高い木にのぼる
笑わせる嘘は大きい方がいい
歩で終わる根っこは大地離さない
土を踏むことを忘れてる素足

松江市 川本 畔

米一粒を見捨てた微罪つき纏う
疼くものそのままに踏む足の裏
口惜しさを絞るほろつと一雫
祈らねば耳に戦車の音がする
淋しさのあまり電話を抱いたまま

松江市 松本 知恵子

さりげない顔集まったボランテニア
核廃絶ひたすら祈る原爆忌
やどかりと浜辺ですごす夏帽子
分別をつけない線が揺れている
青春のカケラを置いた橋向こう

松江市 佐野木 みえ

熱帯夜しばらく会わぬ人想う
初どりのゴーヤ手のひらでミニサイズ
枝豆の色にひかれてビール手に
ミシン掛け今日はご機嫌よく動く
母さんと手花火ぼとり赤い玉

出雲市 園山 多賀子

栗の花優しくなろうと咲いている
コーヒーにパンつつましく朝の贅
注ぎこぼすビール他人は惜しまない
勿体ない明治女のサバイバル
向日葵の主張拍手を惜しまない

出雲市 伊藤 玲子

出雲市 岸 桂子

警策に眠り始めを叱られる
泣かせてねあなたの海で眠るまで
おいしいと言わず一品腕まくり

山の宿えんぴつが友月が友

郷愁を誘う綿菓子祭り笛

出雲市 富田 蘭水

出雲市 森 茂美

何となく流れて日々を殺してる
邪魔をする老いの病魔が憎らしい

前向きと事さら言うけど元のまま

四季がある人の命も同じこと

原爆忌六十一年むし返す

出雲市 石倉 芙佐子

出雲市 持田 多輝子

痛みまで以心伝心する夫婦

沙羅双樹眠った私を目覚めさす

退院日青く澄んでる夏の空

人の世のエアポケットに嵌りこむ

寄せては返す波にもまれる木の葉舟

出雲市 小白金 房子

両の手に溢れひ孫の名がもつれ

二度童子介護やさしく手をつなぐ

よく喋る女が貝になる恐さ

朝顔もぐつたり日暮れの水を待つ

八月の過去を引きずる波の音

間違いは秋に始めたダイエツト

大切なお客と知らず吠える犬

ゆるやかに神話の里に季がうつる

晩年の夫婦に水が澄んでくる

カタカナ語やたら新鮮さが欠ける

出雲市 森

盆おどり輪も年ごとに小さくなり

ど忘れはするが健康だと思ふ

水分を沢山とれと医者と言う

甚平が売り場に涼を呼んでいる

戦後史の字引きのような妻だった

紙一重予測の出来ぬ明と暗

波風を立てずに一步距離をおく

度胸ある教師がほしい団地の子

不信感抱くトップの返り咲き

政治家の胸は痛まぬ予算組む

出雲市 多久和 敬子

梅雨晴れ間湿った心竿に干す

有難い今日も元気で主婦終る

老い二人静かに星をながめてる

かつぼう着脱いでお客の輪の中に

ドア開けて今日の幸せ招き入れ

雲南市 毛利 幸

七色の虹に人生垣間見る
夏祭り花火が主役人に酔う
七曲りして人生が蛇行する
いざという時の余力を溜めておく
昨今は主語が抜けてる会話飛ぶ

島根県 伊藤 寿美

夕星の埒り魁夷の湖がある
図書館にもぐりわたしを裏返す
もう少し独りで住むと翁草
溜め息にそつと被せておくラップ
亡夫の部屋にまだ残ってる専門書

岡山市 井上 柳五郎

敗戦日勲章埋めた異国の地
血圧の降下ツボ押す効き目かも
不祥事に詫び馴れをした役員よ
恥しいこと躊躇なく言える人
新聞を読み理解度の疎くなり

倉敷市 撰 喜子

ラーメンの屋台でデートしめくくる
ライバルを木馬に乗って追いかける
群れをなす羊の孤独聞いてやる
おしゃべりの母にしっかり針をさす
トンネルを掘る中央で合う不思議

真庭市 国米 きくゑ

歌唱力プラス爽やか大ヒット
ひらかなの心睨みが通じない
遊ばされてる休耕田のうめき声
人呑んだ渦巻く河の泥しぶき
胃カメラに暴かれそつと見てる恥部

真庭市 福嶋 智恵子

遅咲きの余白を埋める一行詩
山の宿蜚飛び交う句座の会
古里の青空市の国訛り
早朝の地震安否の子の電話
子が思うほど心配のない独り

美作市 小林 妻子

じいさんは頑固向日葵が笑う
炎天の舗道へ強かな杉菜
四国山脈の衝立台風逸れました
日本は平和犇めいているまつり
天下り止めて川柳でも如何

美作市 大石 あすなろ

夢ばかり食べて肥った体脂肪
聞かぬふり見ぬふり上手くやり過ぐす
ギブアップしたら直った偏頭痛
バーゲンになるのを待って贅を買う
控え目な寸評じわり利いてくる

美作市 山本玉恵

長生きの秘訣に恋の炎を抱いて
気休めのまじないで良い明日がある
流れには素直に乗って花筏
泣くな泣くなと風は女の背を叩く
飄飄と風と踊ってどこまでも

美作市 福原悦子

七癖を互いに妥協する夫婦
捨てきれぬ古い手紙にある慕情
二人して歩けば弾む万歩計
晩学へ弾む一步が重すぎる
父の忌に灯明囲み顔がゆれ

宇部市 平田実男

土砂崩れ種も仕掛けもあったとこ
赤をみな青信号に見せる酒
手取り足取りが遅らす自立心
父母逝って実家の酸素薄くなる
他の国へ援助自国は火の車

竹原市 岩本笑子

昼の月小休憩の輪の中で
学校のテストの夢を今もまだ
友情も団塊というてんこ盛り
順不同でも一番が好きといひ
人間を告発してゐるドームの碑

竹原市 森井菁居

満面に笑みを浮かべて再会す
ミスは一度切りなら多分許される
力んだら空振りばかりしてしまう
何とかなるつもりでみんな生きている
今日を逃げ切ったなら素敵な明日が来る

竹原市 正畑半覚

太陽が五つかサブランカが咲く
豪雨の日ミミズいきいき散歩する
もう一步前へと書いてあるトイレ
血と涙あるね人間なんだよね
気をつけて帰りんさいよ黄色帽

竹原市 時広一路

グーチョキパー力瘤には用が無い
僕の目が字の大きさを気にしだす
万歩計見たくないよと僕の膝
疲れたら蟻の列でも見てみよう
花の笑顔に浮かれた蝶が舞うてみせ

美祿市 安平次弘道

楽天家がいるから夢を見るのです
まあいいか産まぬ娘もいるんだよ
プレッシャーがあつて解決遠ざかり
意地張っているから視野が狭くなり
火の車になつても俺も守り抜き

川柳塔の

川柳讃歌

②②

木津川

計

大事なことは小さな文字で書かれてる

緒方 美津子

五年前、大腸癌を告知されて愕然の僕は、癌保険の診断給付金一〇〇万円を請求したのです。が、五〇万円の給付に問い質すと「契約書通りです」「ええーっ!」。よく見ると極小の文字で下の方に「満六五歳以上の場合」は半額」とあったのです。何いーっ!! 心得ておいでの美津子さんが、一杯食われるな、と喚起してくださいました。

待合せ遠い人から早く着き

大谷 篤子

高を括弧することがあります。玄人裸足と言いますね。相手は素人と高を括弧していましたが、おれより上手ではないか! と判った玄人が裸足で逃げだします。

何事も安易に考えてはいけません。待合せに遠い人は渋滞や事故も予測して所要時間を割り出します。近い人が高を括り、遅れます。

篤子さんの人間観察眼、川柳の原点です。
雨の日は雨と話して逆らわず

菊池 トミエ

空が晴れ、雷が鳴り、雪が降るのも神様の思召しかもしれません。どんな事態にも順応して逆らわず生きるトミエさんの穏やかな心構え。そんなひとに僕も惹かれます。

が、雨の日を人生の逆境ととらえたら、挫けてなるものか、で、例えば、雨の日は素敵な傘を差して行く、逆手にとつての美しい気概もまた大事だと思います。

スローライフ鐘の余韻に合う歩幅

宮尾 みのり

最近僕は「年相応」の意味が分かってきました。老人の物言いや挙措の落着きはそんな生理だからです。牧水の「けふもまたころの鉦をうち鳴しうち鳴しつづあがれて行く」の句集『別離』は二六歳での刊行でした。鉦をうち鳴らし牧水は急ぎ足でした。

が、みのりさんは、ごおんの余韻に合わすかのような歩幅ゆつたりした老境ですね。

兵糧は尽きた道草など出来ぬ

安平次 弘道

読売文学賞受賞詩人・天野忠さんの詩に「一本」があります。老友からの便りに「刀折れ矢尽きたよ、君は」に返事して「私には

矢がまだ二、三本残っている。それを杖にしてもう少し向うまで行く」、の末尾は「ほんとは一本だ」で終わります。寝たり起きたりの老友を天野さんは偽って励ましたのです。弘道さん、武士は食わねど心意気です。

オムツからオムツとの差が人生だ

川原 章久

魚釣りが鮎に始まり鮎に終るように、人間もまたオムツに始まりオムツに終る。なるほどなあ。その差の七十年か八十年は、仮縫いのまま、誰かのついでの喝采なき回り舞台をよるけながら後を追う、それが大方の川柳の人生観です。

確かに、切ない人生です。だからロマンが必要なのです。人間陶冶の詩もまた同様です。

川柳塔わたしを替えたいのちです

山中 康子

もし康子さんが川柳塔に出会わなかったら、どれほど楽しみな日々だったことでしょう。人はみな張りのある日常を送れてこそ生き甲斐を持てるのです。嬉しい人生に変えるほどな良き師、善き友を得た康子さんのよろこびが、どうか川柳塔人すべての方のものでありますように。

康子さんの希望の句に出会い僕も幸せです。

『上方芸能』誌代表

自選集

芳地狸村

森下愛論

幽幻の気配ただよう奥の院
お大師を囲む三山初登山
風鈴の音が暑さを忘れさせ
風鈴の音が冴えてる南部鉄
風鈴が風の強さを知っている

宮口笛生

八木千代

杖つけば似合う八十路を隠されず
ややこしくなつてるところへ引き出され
熱中症にならないように甲子園
まだ死ぬと死なないが癌もあり
酒うまいうちにしつかりのんでおこ

宮西弥生

八十田洞庵

鉢植えの朝の水からリズム
三食の力で国が動いてる
わたくしにときどき信号出す鏡
恋人と会う日いちばんええ笑顔
暑中見舞やさしく書く書いてある

階段を数えて上る癖がつき
下心少し見えてる背の丸み
はんわかと戯れに似た恋もして
うたた寝の足元布団丸くいる
静けさは独りベッドに転がつて
夕焼け小焼け今の私は小焼けかも
今をどう過すか秋の呼吸して
収集車供物もごみも花首も
送り火や いずれ私も火をくぐる
たなびいて煌めいてこの世の雲は
屑簾に昨日の仮面捨ててある
植木鉢気ままな枝は許さない
天寿まだ残りあるらし趣味に生き
ネオン街ふところ狙う火がともる
単身赴任柳眉逆立て妻が来た

両川 洋々

死刑執行みな善人になって逝く
汗かかぬ男の指図など受けん
罪一つ海は無言のまま許す
増税案他人ごとでは無いはずだ
浄土まで歩く足だぞ水虫よ

阿 萬 萬 的

不器用な癖に次々買う道具
知らぬ間に恥の上塗りしてたらし
法螺吹いていつそう惨めになっていた
大正生まれ頑固に続ける万歩計
亭主関白上手にそらす妻の知恵

石 川 侃流洞

台風空振り悔しい旅プラン
意地張って芝生に一株ねじり草
抱き癖をつけて満足姑が去に
蓮の葉の露ころろと真珠産み
父さんの靴履いて三歳ご出勤

板 尾 岳 人

分水嶺父と別れた村にある
神無月母と別れた風の街
父が先き母があとから火打石
父と母仲良く眠っている裾野
もう一度逢いたいのです秋桜

奥 田 みつ子

雲海を泳ぎ逢いたい人ばかり
朝顔がみな友の顔友の声
遊びから知った世の風世のぬくさ
わたくしのスベアどこにもないのです
性悪説信じて心安らぎぬ

河 井 庸 佑

岩穿つ滴る水を見て覚る
未だ元氣亡父思い出の腕時計
価値観が合わず話が擦れ違う
子に視線合わせ十分意見聞く
適量で杯伏せるのも勇氣

木 村 あきら

在りし日の栄華を語る古土堀
暁の明星天を制覇する
天高し雲雀も天を目指してる
夕茜明日もキット晴だろう
雲一つ無い碧空へ万歩計

小 島 蘭 幸

団塊の一人に流れ矢は当たる
上手にはならぬ洗濯物を畳む
万華鏡の中に退職後のわたし
孫はまだですかと昨日今日未来
食べたいときに岡山の桃が来る

小西雄々

木漏れ日を両手で掬い詩を詠む
学歴と別本棚の哲学書
脳は錆びからだのネジは緩みそう
酒代はなんとかなるさ枯れるまで
記憶力減退酒も弱くなる

小林由多香

人柄はいいのに口が軽すぎる
涙ふきながらテレビを見逃さぬ
鳴く虫と鳴かない虫が同居する
腹いせに飲んだお酒へ酔いつぶれ
気配りの外でのんびりしたくなる

斉藤 磊

一生に何個剥くだろ茹卵
野苺がぼつんと熟れて敗戦記
合格の封書スキップして届く
作業着を好きで離れぬかたつむり
ひまわりの千個の笑顔撮っておく

塩満敏

夏野菜旨くて夏痩せしない僕
私の川柳図書館開館す
整理した机の中から宝物
鶴の句碑きつと浪速に建つだろう
その内にメダカの学校作ります

新家完司

寝転んで海と空とが見える部屋
額縁に収まりきれぬ日本海
暑い日は気合を入れて飯を食う
二千円分ほど名水を汲んでくる
ころころやごろごろである夏の午後

田中正坊

オレンジのような満月見るテラス
満月はよし弦月 三日月も
もう少し生きよう月が美しい
身辺の整理はつぼつ始めねば
惜しい物何もないのもまた困る

玉置 重人

老夫婦笑い袋が小さくなり
輪の中でそつと泳いで生きのびる
階段をよたよたと上がる自己嫌悪
身奇麗にせよと娘がやかましい
年金の出る日忘れることがない

恒松町紅

炎天下今日は予定のないゆとり
物騒になったと鍵をかけている
冷房の居間百歳の健康法
もう恥も外聞もない掛け袍
まだ欲があるから酒の味もいい

遠山可住

波多野 五楽庵

ああ青春軍艦マーチに踊らされ
宝くじ売場に並ぶ秋の風
遠花火浴衣の胸のふくらみに
孫の手に渡す平和というバトン
ふるさを見たくなくなったら眼を閉じる

土橋 螢

背の順に並んだ真ん中よりうしろ
文月の海から鰈^{かひ}鰯^{あじ} 虎魚^{こぎょ}
上流に河鹿が卵産みにゆく
苦しみも貧しいこともお断り
爺さまが草刈り鎌を研いでいる

西出 楓 楽

美女だから許せないこと許すこと
彼岸から帰ってほしい人ばかり
軸足を違えてからの転びぐせ
例えばの話に略す主語述語
運鈍根運鈍根と歩くのみ

仁部 四郎

雁行に似て国民の義務権利
国民であるのであるの納税者
平成の辞書にも出てる非国民
国民の誇りメッキはすぐ倦きる
国民はおそらく国を愛してる

平成十八年度川柳塔碑合祀祭実施要項 於 高野山大霊園

日 時 11月11日(土) 雨天決行
集合場所 南海電車「なんば駅」3階中央改札前
集合時間 午前9時30分(9時50分特急に乗車)
会 費 5000円(交通費、昼食費)
申し込み 10月10日までに本社事務所宛

○別の交通手段で参拝される方は、その旨川柳塔社へご連絡の上、12時までに直接大霊園川柳塔碑前(奥の院下車)にお越し下さい。

(大霊園事務所 TEL 0736-56-2966)

到着後すぐ法要を営みます(12時10分より約30分)

○遠方の方で宿泊希望の方はお申し出下さい。

○帰りは16時16分に乗車予定

合 祀 者 (敬称略)

岡本吉太郎・亀井 皎月・本吉 宗光・中後 清史
久保まさお・野村多茂津・北岡波留吉・藤井 明朗
本間満津子・田口 虹汀・岩屋 美明

肯定も否定もしない風の音
一日を静かに終えたパンの耳
頬杖が途方にくれる更年期
ストローの弁解などは聞き飽きた
思いちがいばかりしている鏡です



奥田みつ子選

和歌山市 土屋 起世子

八月の雲忘れずに赤とんぼ

枝豆とビールで今日を締め括る

朝の陽をビタミン剤に靴を履く

精いっぱい生きてぶつかるのも家族

浮き沈みそれでも雑魚は夢を追う

いとおしい花は人目に触れず咲く

泉佐野市 稲葉 洋

走馬灯影絵に過去が回ってる

背を向けた肩が語っている辛さ

敗戦忌進駐軍がまだ居てる

アイアムアシニアシングルノーマネー

しくじりを咎められない老い侘し

目をむいてつかみかからん仁王の気

今治市 塩路 よしみ

六段の調べ青春巻き戻す

随筆はわたし好みの彩で編む

土壇場で不思議に勇氣湧いてくる

丸木橋渡ればきつと答出る

それなりの誇りをもって雑魚の群

あの日から時計止まったままの寡婦

大阪市 尾崎 黄紅

老いの散歩は先になり後になり

光陰は背負うた孫に掌を引かれ

搜してる額の眼鏡探してる

戦知るひと減り戦臭いだし

知ってるか赤紙という恐い紙

靖国でないわが仏壇に御座します

三田市 阪本 藤朗

合併で暑中見舞いを書き損じ

庭の花集めたらしい墓の花

お茶の間で黙祷します終戦日

三世代時に小さな波も立ち

九条の前も後ろも知りません

泉佐野市 備後 三代子

戦時中勝つを信じておどらされ

もう誰も居ない古里山の墓

未知の人なのに寄り添い六十年

なおざりの甕に一輪未草

明日なき日今日かも知れぬ遠花火

安来市 原 煩惱児

血を分けた蚊と戯れる老いの夜

盆の月孫に話がたとある

永平寺包む万緑森の精

パソコンもケイタイも無く老い達者

厳しさに耐える雲水明日の夢

京都市 榎本 宏子

兵馬俑子に伝えたく図録買う

待つ本があつてはかどる朝の家事

言葉じり奥歯にひよいとひっかかる

早い目で引いた男の自尊心

使われぬ二階賑わう盆休み

今治市 渡邊 伊津志

左手は大事な人のためにある

物言わぬ父は我慢を教え込み

慌てまい運も不運も回りもの

笑うコツ蓄が開く音を聞く

人思う心が覗く有難う

堺市 大久保 伸子

打算ありつくり笑いをしています

異常気象地球が喘ぎはじめたな

人生の仕上げゆつくり考える

あればいい前頭葉に効く薬

こだわりを捨てる余生生きやすい

岐阜市 平野 あずま

矛と盾の論議が続く戦好き

パフォーマンス見せて哲学ない政治

捨て石にやつと回つて来たチャンス

スローライフの時計も同じ二十四時

恙ない日々で空瓶よく溜まる

和歌山市 柏原 夕胡

言訳の声がときどき裏返る

おとぼけがとても上手な猫じやらし

睨めっこまあまああと宥めとく

おつとつとうっかり尻尾出ました

ヤジロベエ嘘と誠が揺れている

八尾市 脇 俊子

血のくさり孫の仕草をあきず見る

夫婦旅長いトンネル出ると晴れ

夫病んで窓から雲を追っている

紫陽花の心の様を替える梅雨

歩いて歩いてもまだ域抜けず

大阪府 神野 千恵子

尼崎市 河津 正治

縁側で今日も心が旅をする
凸凹の手触りがする生きている
もう少し赤がほしいと思う今日
本を読み想像力をリフレッシュ
他人事のように自分を許してる

八尾市 西川 義明

無い袖も振ってやります孫のため
寝込まぬようにいたわり合っている夫婦
生涯で許せぬものにエノラゲイ
敗戦忌語ると渴く喉仏
九条を触るとまたも焼け野原

札幌市 三浦 強一

エンピツで奥の細道なぞる旅
ビール日和などと予報士いける口
無器用でいつも本気の恋をする
雑談で分かる家柄お人柄
思い遣る嘘が優しく醺酔し

神戸市 両川 無限

欲に目がくらんで的に当たらない
愛の字に洗脳されて五十年
ふる里の風が後押ししてくれる
父として筋を通した独り酒
目を開けていると真実見抜けない

サングラス外し微笑む好好爺
歯痒さを砕く入れ歯が噛み合わぬ
三本の矢の戒めを子に残す
終演のベルよ余韻をありがとう
屋根を葺きやつと我が家の顔となる

大阪市 三浦 千津子

粗方が終り静かな波がしら
繕ろうて繕らう母の愛深し
辻褄を合わせた後の荷が重い
生き方を変える四角い殻を脱ぐ
言い過ぎてうまく畳めぬ今日の悔い

京都市 西村 益子

昔からもつたいないで生きている
同じこと出来る毎日ありがたい
バーゲンに行っただけに無駄遣い
キャンパスにどんな絵描こう年金で
家計簿で引き算ばかりうまくなる

草加市 飯土井 健夫

納屋にある先祖の品を嫁が捨て
学無いが長く続けて実るもの
一日をフルに動いている明治
初七日の仏間に鳩が二度三度
盗んでも褒められるのに知と技と

シドニー 坂上 のり子

メルボルン 藤原 ポン吉
水を得た魚のようにじゃれる猫

日本とは名指さず敵と記してる碑
許しても忘れ去るなど建つ兵碑
散歩道の兵碑に庭の花手向け

物想う哲学猫のいる窓辺

品格を守り妥協をしない猫

シドニー 内山 佳代子

朝露に生き生き光る庭の芝

人手なく木に残されたみかんの実

野の小花じつと待ってる春の風

日向ぼこ向かいの猫にごあいさつ

日曜は朝寝それからパンケーキ

シドニー 三谷 たん吉

どっちみち代り映えない首相だろ

ジャイアンツ勝ち負け共に暗い顔

湖底のマリモも遂に鉄条網

車からオイル抜かれる日も間近

人よりも犬ネコ毛虫まだかわい

シドニー 森本クックバラ

お役所も排水溝もしまり無し

原爆忌知らぬ日本の留学生

アメリカ産肉もライスも危なそう

天皇が詣らず首相が詣る怪

日本の辞書から消えた恥の文字

エサねだり猿知恵使うボチけなげ
オオカミはワルじゃないよとほえている
兎亀池なら亀が油断する
ピノキオが教えてくれる人の道

山鹿市 阿部 ミツ子

ちろちろと灯火薄れ逝く貴方

お棺で花に囲まれ晴れやかに

旅立ちには山鹿灯籠の日でした

雨の後待ってましたと蟬時雨

嫁姑酒酌み交わし笑み交わし

香南市 桑名 孝雄

身辺整理ははじめましたと各地から

頼りない大黒柱だと自覚

功罪が半ばしていたとは不遜

アドレスになにか曰くがある符号

鯨飲馬食鍛え抜かれた胃でござる

香南市 百田 幸

せつかちでエスカレーター駆けあがる

祝杯を涙で交わす娘の巣立ち

大正の旗振る夫と五十年

手を広げすぎて何かに追われてる

空腹で買物に来て無駄を買ひ

大洲市 花岡 順子

天秤の上で揺れてるのが本音
本音だと判ってくれる人という
煮え切らぬ男へ会釈などしない
真ん中を射通す弓を張っている
今が旬仕事も趣味も手抜きせぬ

宇部市 高山 清子

いくつもの嘘をころがす喉仏
流行を追えず個性を発揮する
ついはずみで言った言葉に責められる
一言で失うものの重さ知る
言い訳をするほどはまる蟻地獄

府中市 藤岡 ヒデコ

ピーポーを何度も聞いた熱帯夜
心身を滝のオゾンにゆだねた日
ドンと鳴る花火に想う亡父の葬
遠花火思い出だけを積み重ね
この猛暑負けてならずと四つに組む

府中市 馬場 利子

残照の中に埋めたい彩を選ぶ
子の心読めて安堵の陽がまぶし
野良に家事夜は趣味へとペン走る
流れゆく雲が記憶を連れて来る
団塊のにぎわいを知る木の校舎

松江市 山根 邦代

じりじりと朝から蟬の賑やかさ
ほおずきが恥ずかしそうに頬そめる
日照草暑さしらずの顔で咲く
暑さ負け蟻の行列見て飽かず
熱射病悲鳴上げてるナス胡瓜

出雲市 荒木 英子

夫逝き仏間に祈る日も多い
老い二人詰った頃懐かしい
暑い日々仏前花も萎れ果て
ときめきにやがて熟れゆく青りんご
叩かれて祈る座禅の爽やかさ

雲南市 菅田 かつ子

検診のまたまた背丈小さくなり
そして今姑と言う名で負け上手
信じろと軽く言うからひよつとして
気がつけば歩く姿も丸くなり
それなりの暮しゆっくり楽しもう

倉吉市 大森 孝恵

騙された振りして尻尾握っている
仏壇に出たゴキブリはたたけない
楽しみがあつて目覚めのさわやかさ
汗飛ばし若さはじける夏みこし
聞き上手愚痴を聞く目の温かさ

倉吉市 前田 喜美子

和歌山市 たむら あきこ

金婚式数字で見ればすごいこと

七輪の烏賊あぶられてイナバウアー

目が覚めて動く手足に感謝する

もうちょっと句会で遊びたい八十路

ボーイ捨てと決めたこの服またたむ

米子市 小塩 智加恵

看板につられ飛び込み味不満

ケイタイを持たされ外もかごの鳥

夏祭り踊り子連も歳重ね

やさしい子ぶつきらぼうも同じ腹

西の窓朝顔のつるよく繁り

鳥取県 岩崎 和子

課外授業受けてる子等の柔和な目

気の弱い男の愚痴を吹きとばす

笑い顔泣き顔過ぎて今平和

干した物からりと乾くうれしい日

あの人が顔出すだけで弾みつく

鳥取県 小飼 和代

同窓会渾名呼び合う良い出合い

飲み放題人間の欲さらけ出す

桜茶が五臓にしみる目出たい日

強い歯に保証されてのグルメ旅

豊作へ案山子の顔も安堵感

ストローの先に氷の笑い声

蟬しぐれ禪問答をしてみよう

にんげんの心閉じたり開いたり

母の神話崩れて少子化がすすむ

入道雲に闘志貰ったことがある

和歌山市 山田 侃太

正論を言わねばならぬ役回り

私にもあったヒトへの恐怖心

過去ログが仕切る部屋には戻れない

いびきには鬼の気配がしてならぬ

キタミナミ一筆書で食べ歩く

海南市 小谷 小雪

これからも白馬の騎士を夢に見る

あといくつ寝ると子どもが帰省する

美人にもそれなりの苦があるらしい

仏壇に父を迎えて正座する

手作りの旨い梅干し出来上がる

紀ノ川市 宇野 幹子

目測をした目が妥協してしまふ

不言実行背から自負が匂い出す

命の限り反核うたう蟬時雨

木下閣無理な話を強いられる

税金の話になると眠くなる

田辺市 大峠可動

八月や仏の笑みが見えますか
風となら垣根も越せる虫の声
空想は五辯で星の絵になりぬ
陽の国の余熱で咲いた曼珠沙華
限界を越えて墓穴の闇に落ち

和歌山県 辻内次根

うちわ風すなおに夏を受け入れる
万病に効くお笑いの処方箋
秒針の上で遊んでいる命
深呼吸よどむ気持を入れ替える
予定にはない親切にあう遠出

和歌山県 森下よりこ

イヤリングちゃらちゃら饒舌な女
エレガント過ぎる器は嫁に出す
天袋からご先祖の忘れもの
一人でも時々鯖ずしは作る
一人旅風の誘いに乗ってみる

和歌山県 木村徑子

槽太鼓に吸い寄せられて行くゆかた
今宵華白寿毅然と音頭とる
ひよっとこのお面のゆかたうちの人
くま蟬の合唱団も命がけ
夢二の絵指の仕草にある音色

奈良市 乾春雄

古本の紙魚に明治が生きている
魂が帰るふる里童唄
赤い爪やがてオシメを替える指
嘘一つ混せて白衣の温い指
ゴミが流れて川は無口になつて行く

奈良市 矢野良一

涼風がやさしく癒す峠茶屋
湯の街に旅情を誘う下駄の音
温泉は地獄が生んだ極楽地
ぬくもりに本音がポロリ屋台酒
胸の痞え酒で吹つきる縄のれん

奈良市 尾畑なを江

まほろしの唄めいて来た過去の罪
亡き人を恋うているのは鈴虫か
人生に落し穴あり飛び越えよ
騙されし女静かに矢を放つ
駆け寄ると恋は二つに割れていた

神戸市 木村忠義

家で酒飲むことにして本を買う
ぼくにとつて心のくすり本と酒
お茶代で作家に会える文庫本
住んでいる証に表掃除する
誰もせぬ溝掃除してうまい酒

相生市 村木信子
ハングリ一の時代のり越え終戦忌
錆ついた鉄へ母の詩がある

控えめな言葉に滲む愛の彩
建て前へ消化不良の本音秘め
平凡で良かった悔いのない老後

尼崎市 桑原東園

居眠りの上手な人の地獄耳

もう少し使い残しの運がある

口車乗った拳句は火の車

マイナスをプラスに変える老いの知恵

寂戻る花火大会果てた空

篠山市 谷田多美子

梅雨空に血圧計が落着かず

今日もよろしく仏に新茶入れかえる

曾孫の声が受話器にあふれすぎ

世渡りの下手な老婆の一人言

まだ八十 もう八十と使い分け

三田市 臼井二英

何かさびしい考えながら飲んでいる

腰痛で大物釣りはさけている

ジーパンの脛も自分で齧ったか

車内メイクまわりの人はみんな石

幼な子のホッペのごはん食べるママ

三田市 上垣キヨミ
決め兼ねて金魚に明かす悩みごと
底辺の辛さ転んでから解る

ワイパーがタクトを振って雨うたう

熱いとは言わぬ趣味には無我夢中

青い日の失言今も胸を刺す

宝塚市 丸山孔一

現役の癖で電話にペンを取り

故郷の道に車が大き過ぎ

同窓会歳を重ねて頻度上げ

信号も電車も一つ待ってから

別れ際残り香を追うこの未練

西脇市 七反田順子

キャンプファイアー夜の浜辺で気炎あげ

火の鳥を魅力溢れるバレリーナ

こんちきちん一度は見たい憧れが

ぶつかれば直ぐに謝る癖がある

不思議だなピカソ気分で絵が書ける

大阪市 森田明子

ほっとしてやがて寂しく夏終わる

鰯雲入道雲と押し問答

考えるポーズで眠るのが得意

金拾う神に試されてるらしい

捨て猫に弱味鋭く見抜かれる

大阪市 伏見 雅明

池田市 上嶋 幸雀

着古した作業ズボンが捨てられず

右脳まで左に負けず呆け始め

特攻の生還信じ待つ白寿

知らぬ間に妻に洗濯された脳

付いてくる妻に合わせて歩幅決め

大阪市 岩崎 玲子

初孫を抱かせて貰う恐恐と

夢いっぱい新生児室競い泣き

誰似かと皆の顔が押し寄せる

もみじ手で元氣いっぱい御挨拶

初孫はスターのようなオーラあり

大阪市 寺井 弘子

檸檬風呂ひとりの人を待っている

ルイヴィトン贗とは見せぬお人柄

父母に優しく出来ず疼く胸

遠い日の青いレモンの片想い

退職金自立する日と決めている

大阪市 原田 すみ子

さまざまな欲が私を進ませる

感謝するそばから不平顔を出す

風受けて葉を揺らしつつ動かぬ根

林立し天刺す木々に氣を貰う

はは思い未来図しかと描かねば

死 死 アウシュビッツの夜と霧

池田市 北出 北朗

神宮の雨に学徒は濡れて征き

お洒落しただけで国賊とも呼ばれ

B 29の爆音脳を掻き回す

餓死させる象エサねだり芸をした

泉津市 助川 和美

今になりナスの浅漬旨さ知る

モッタイナイの心届かぬお役人

片付けた積りがやはり探し物

繰返し戦時を語る老母元氣

戦争が地球の宝うばいとり

柏原市 伴 洋子

締め切りへ時計の針は容赦ない

風を聴き波と語りに里帰り

追い抜いて前行く妻のリズミカル

蚊取線香供えて帰る暮参り

追い風に乘った男の嵌まる罟

門真市 矢 阪 英 雄

由良川の鮎肌光り雨あがる
鮎すしを小脇に急ぐ過疎の駅
鮎すしに地酒の冷やが腑にびびく
林業で栄えた町のなごり酒
はねるさま残して膳に鮎並ぶ

堺市 羽田野 洋 介

うつとりがうつかりになる酔い心地
人柄の光る姿に触れたくて
責任をとりますと言う無責任
いいもんだ雨が勧める骨休め
穏やかな言葉の陰にある本音

堺市 阪 井 智 之

乾杯の泡消えたのにまだ話す
お葬式派手な着メロ鳴り響く
道渡る蛇よ車に轢かれるな
誕生日誰も気付かず日が替る
言つてあるやつてあるはずブル事故

堺市 萩 野 像 山

骨太の政治医療費こたえます
お出掛けの妻はわたしに見せぬ顔
毒味してこれは美味いと供えとく
味変わりしてはならんとお下げする
直ぐ下げられて苦い顔して亡父

吹田市 二 宮 栄 子

小半日物を探して日が暮れる
早朝の目覚めを襲う蟬しぐれ
無理したらあかんと妻は念を押す
心地よく目覚めた窓に有難う
茜雲明日を予約して帰る

高槻市 峯 村 勲 弘

故郷を渋滞道路遠くする
儚さを花火遊びに教えられ
また来いよ敗者に優し甲子園
ベランダで挨拶交すホタル族
下請は乾いたタオル絞らされ

豊中市 神 野 宇 乃 子

自販機が酔えぬお酒をゴトリ出す
酒の味苦いと覚え苦いまま
利き酒に杜氏寡黙に控え居り
初絞り杜氏の意気も共に飲む
酒よ酒離れがたきはなあ酒よ

富田林市 古 田 千 華

オルゴール聞いて睡りにつく蘭鏡
非通知の電話のベルは不安です
柔らかく肩たたかれた花火の夜
庭見れば住んでる人の貌がみえ
血液と心入替え深む秋

寢屋川市 森田 麗

磨き粉も束子も効かぬ今日の鬱
年金の目減りにボチの案じ顔
思考力鈍った脳にチヨコレート
夏草に教え乞うてる呼吸法
ひめゆりの塔の映画を見る盛夏

寢屋川市 岡本 勲

ちぐはぐな歩幅結構仲がいい
化けの皮すぐにばれます父の嘘
スムーズに老化してると医者の方
恋人だった今は仲良し老い二人
どう嘘についても妻は騙せない

羽曳野市 松本 静子

安心が不安になるときがある
ざおん太鼓おなかにひびく音でした
どんどんと格差が進む日本国
モーニング食べてこれからボランティア
温暖化南の島が沈んでく

羽曳野市 永田 章司

リストラは中年に問う試金石
言い訳は半分嘘が混じってる
ポーズより自然体です古希の坂
ペットの死私のリズム狂わせる
リボン掛け優しさひとつプラスする

羽曳野市 福田 悦子

叶わない夢なら見ない方がいい
節約を忘れましたという暑さ
甲子園球児が残す青春符
戦争の話は亡母が持つて逝き
平和とは三食足りて明日を待ち

枚方市 小川 良吉

お帰りと地蔵ほほ笑む郷の道
念仏も愚痴も飛び出す僕の口
寝ていても仏は私生かしてる
来し方を思えば仏何時も側
み仏も顔をそむける社会面

枚方市 二宮 紫鳳

おだちゃんをせがんでもみじの肩たたき
蟬しぐれBGMで夢の中
アニメ見る孫の瞳がキラキラと
写メールに孫との夏をハイポーズ
盆踊りうちわ片手に孫弾む

藤井寺市 西村 栄一

我を折って忠告を飲む泣きわらい
隅っこの椅子で自分と飲んでる
水飲場うわさ話が落ちている
冗談が思わぬ風の向きを変え
少しずつ動きが鈍くなる手足

藤井寺市 津田シルク

上品なジョーク句会の梅雨晴間
悪戯つ兎軒並みチャイム鳴らしおり
鉄鉢に幼さ残し顔の汗
七光り天狗の鼻が高すぎる
同じよに育てて違う姉妹

藤井寺市 増井ヨシ枝

美しい声の電話に逢う不安
ハンサムね誉められてるはうちの猫
車椅子慣れたか歩調合わすポチ
お名前が解らぬままに長話
猛犬注意書いてチワワを飼っている

八尾市 松葉君江

本能の原点母の胎教に
もったいない声が孫には届かない
でたらのわりにストレスよくたまる
寝たきりへ家族の汗は乾かない
子守唄母子の絆の原点に

八尾市 赤木妙子

鞭打って歩幅をすこし広くする
勘所見極め糸を締め直す
アクセル踏み日々の暑さと向かい合う
身のほどを知って迷わぬ靴を履く
夜爪切る親を亡くした我独り

八尾市 笹倉ひろし

走り過ぎ今は余生の夢を追う
駆け足で生年月日逃げて行く
古都の夏煮沸させてる山車と人
肩で風切っても薬飲む時間
天神の夏船渡御で昇華する

八尾市 田邊浩三

大声で訴えている地球です
マニフェスト投票までの命です
でたために本音をチョット混ぜてみる
悩みある間は命続きます
式典の日の丸何故かさびしそう

大阪府 若月裕作

君想う胸のどこかで焦げている
後がないはめを外して遊んどこ
夏の宵闇の小川にホタル狩り
食べることに飲むことだけはかかない
食卓にハモサケカレイ多国籍

京都市 清水英旺

高齢化に反比例する福祉策
抗老化のメニューが売りのレストラン
愛犬と妻を川の字昼寝する
万歩計が叱咤激励ウオーキング
アナログな脳を刺激のリユース巻く

京都市 三宅満子

東京都 井上つよし

手を引いた子に手を引かれ墓参り
夜遊びの猫の帰りを待つ夜半
西瓜切るよまず一番に猫が来る
肉筆の葉書心が見えてくる
爆撃の音に聞こえる遠花火

京都市 中野六助

東京都 笠原乃りこ

雲ひとつ浮かべてこそその空の青
ドラマいま佳境迎えてちぎれ雲
母はいま夕映え海を見てるらし
ほとほとと胸を叩いた路郎の句
一途なる思いの先に母の笑い

佐渡市 高野不二

昭島市 野口忠

冷房で働きテニスで汗をかく
婦人公論男に見せる記事で売る
眠られぬ夜起きられぬ朝になる
泣けそうな記事が三日に一度ある
血圧の高いのだけが父に似る

横浜市 中尾哲代

日立市 加藤権悟

二日酔いのシャワーに起こされる
孫が来る前に英気を養おう
丁シャツが物干し竿で手をつなぐ
受け答えみごとにハモル双生児
空気だけ乗せて一両電車往く

一病が増えてもひとつ角が取れ
年金暮し専守防衛四苦八苦
健康法は時に義理欠き朝寝坊
待ち兼ねたバス来て気付く忘れ物
デパートとスーパー僕の軽井沢
虹の橋渡って行けば母が待つ
マニュアルに無い受け答えボロを出す
呑めないのでもアナタには酔っている
ガラス越し色と泡とに目から酔い
手術台地位も名誉も脱いで乗る

久し振り電話の声はセピア色
長電話切る切っ掛けが逃げていく
背伸びした付けがしつこく追ってくる
夫婦では全て直球勝負です
白髪染め試して皺も気にかかり
立秋の暦にちさい秋みつけ
廃校の廊下に鬼やんまの飛行
豊穡の大地に赤トンボのエール
夕焼けの奥より萩の相聞歌
太鼓うつ村に後継者がいない

鳥取県 岡村孝明

ゆつくりとくねくね道を老い二人
青い実も気長に育て社をまかす
嫁が来て老いも活気がついてきた
歳重ね鳥の目ほしい思いする

藤井寺市 吉田喜代子

朝早く庭木と会話するゆとり
村中の賑わい潮の引くごとく
親と子も性善説が崩れてく
処方薬飲むを忘れるほど元気

西宮市 藤本直

夢追って飛んで着地が少しずれ
素になって波見詰めてる夏の浜
涼風を袂に包み浴衣の娘
親不孝の遺伝子無いと思いたい

尾張旭市 三浦きぬ

両方を勝たせたいから肩が凝る
贅沢が味方の今の世が恐い
あの世には謝る人が多く居る
長梅雨に猫と思わず大あくび

藤井寺市 俣野登志子

車中化粧なんで私が恥ずかしい
老眼鏡かけて手鏡自己嫌悪
過保護だと言われようとも孫の顔
かと言って孫の匂ばかりとはいかず

静岡市 中西雅

中折れ帽好きな亡父のやさし顔
大木の根が這うような私の手
胸の内曇りガラスでとどかない
犬ふぐりまたたく星に似てる青

大阪市 吉川弘泰

三味の音とすず虫の音が風流に
野仏の菊一輪に霜の朝
あれこれと相手探せど神無月
押し寄せる秋が来たよと絵画展

大阪府 畑中節子

料理ほめ器もほめて古都めぐり
草引きの手荒れに耐える母の背な
耳鳴りに負けじと蟬の声しげく
百日草百日庭の花であり

枚方市 小林和子

子に内緒ルーペ片手に辞書を繰る
紙一ぱいに描いた顔はお母さん
人の癖す早く覚えねだる猫
日捲りの今日の一言もう忘れ

松江市 松浦登志子

黙々とただ黙々と歩いてる
敬老に戦後生まれが仲間入り
毎日を忘れ上手に自分流
詳細はネットを見てと医師の背な

倉吉市 福光京子

香南市 近森功

早朝に姑を拭くごとと墓洗う

児の問いに夢を壊さぬ回答者

温暖化に向けて体力つけておく

窓全開自然の風をキャッチする

河内長野市 宮守正博

裸婦の絵の前で溜め息一つつく

朝の音母割烹着夢の中

松竹梅ブライド捨てて梅にする

弱い者いじめがすぎるタバコ税

池田市 多田契子

抵抗力つけて政治に物申す

枯れるかも最後に見せた花の意地

メッセージ気付かず叱り子に詫びる

御詠歌に亡母呼び戻す盆集う

藤井寺市 伊藤アヤ子

老人会お誘いが来る歳になり

まだ足りぬ努力を叱る生駒山

しっかりと結んだはずの絆だが

一服にお茶一杯の有難さ

尼崎市 小池幸子

夏が好き八月生まれ海を恋う

揚花火浴衣の姉妹駆けて行く

縁側で抹茶金時遠花火

雑草の元氣と競う老いた腰

諦めてしまえばただの過去の女

考えて考えた末諦める

小さい恋線香花火が火をつける

聞き上手下手な話に添える花

八尾市 中島春江

櫛の歯の欠けゆくように盆の友

若い僧の下手な読経にはほ笑まる

初めての老いの経験とまどうよ

女らしさ無くしおんなを主張する

取手市 葛西清

要らぬ口たたいて背負う重い籠

計算は世辞のとなり置いてある

物忘れ妻の分まで被される

見ていたら電車化粧に睨まれた

境港市 遠藤那珂子

胃袋をいたわり夏をこえさせる

流れる曲に青春だぶらせる

流れてはいけない心立ち上がる

芯がない私に風がハッ当り

東大阪市 大塚サキ子

カーテンを開ければ眩し夏の色

孝行な子のため頑張る子孝行

ヨン様のビデオでやつと癒される

久しぶりお隣さんと立ち話

山鹿市 栗川 四代目

空を見てはつと怯えた飛行機雲
合併で得をしたのは政府だけ
身を捨てて子ども助けた真教師
不便性知恵と工夫の宝庫なり

山鹿市 松岡 純子

すぐへこみすぐ立ち直るのんき者
もう五十いえまだ五十まだ女
あの人も同じこの月見てるかな
やさしさはこだまとなって戻り来る

唐津市 岩崎 實

立秋の後も猛暑がまだ続き
カナカナの輪唱ベダル軽くなり
遠くても片手をあげる仲となり
旧市街看板だけがまだ残り

東かがわ市 赤澤 貞月

誉められてえくぼの花がぼつと咲く
無い袖に見栄を絡めて振ってます
久しぶりばあちゃん皺の中で笑み
医者縁いらんがどうも出来そうだ

東かがわ市 中塚 寿々女

初孫が覚えた芸で総おどり
ほいほいと弾みをつけて動く母
芸の道流した汗に拍手湧く
厚遇に日夜感謝の日々迎え

府中市 岩本 雅代

物忘れ手柄のように話す老い
炎天下犬も散歩をいやと言う
錆びかけた脳に活力五七五
低金利預金に夢が膨らまぬ

松江市 相見 柳歩

ほのぼのと写真に写る四世代
来世ではお菓子の家に住んでみる
お菓子の家綿アメさんを雲にする
一時の恥が一生続いてく

出雲市 川島 和歌子

陽は真上賑わう浜辺黒い顔
藁帽子日焼けた顔の目が光る
剪定の松の隙間に覗く月
眼鏡かけボタンひとつを探す夜

雲南市 福岡 博利

ほどほどに歩いた道ですあかね雲
斐伊川の流れに孫と砂鉄くむ
ストレスを五七五へもつていき
趣味少し行き違いする老い二人

雲南市 武島 ちよえ

その時の気分で回るひとり独楽
親しさがつい行きすぎて出来た溝
押し売りと押し問答で負けました
頂上は何時の事やらカタツムリ

鳥取市 中宇地 秀 四

一步二歩戦に向う風が吹く
良く聞けばなるほど妻の言う通り
賽銭の箱に溢れる欲の皮
生きている喜び癌に教えられ

鳥取市 山口 千代子

振り向けば八十も遠くに流れ去り
ガラス越し丸くなったと背を伸ばす
子育てに走った昔今いずこ
若さはいいな食べて動いてよく笑う

鳥取市 岡田 信恵

動く虫二歳児みつまめ首を振る
名医でも治せぬ傷は失恋だ
物忘れ不意に自分が信じれず
朝早くウォーキングでルンルンだ

鳥取市 谷岡 清子

年金は明日へ明日への細い綱
踏まれつつ雑草強い花も実も
人生はつまずき悩み日々流る
寢床より拝む幸せお月さま

鳥取市 近藤 秋星

立秋は暦の上でまだ真夏
ゼロ金利解除預ける金が無い
蛸が落日の曲弾いている
夏バテが食欲の秋待っている

倉吉市 酒井 美美子

ぐいぐいと飲んでもうさは晴れはせぬ
強情を張り仲間から外される
ここだけの話が一人歩きする
腹を割り打ち明けたのに裏切られ

境港市 中井 虎尾

中古人体修理の医者通い
この元氣くすりのおかげありがとう
番傘の日本の音をしびれ聞く
これはいいピンボケ写真しわがない

米子市 猪森 スミエ

朗報にうなずき合ってほろりする
前うしろ嘘はつかない三面鏡
三猿が教えてくれる処世術
大波小波越えて八十路の共白髪

鳥取県 飯野 菖子

寺の鐘野良から帰る村の人
人生の花咲く芽です孫笑顔
駆け足もここらでちよっと一休み
座らない机がいまも部屋の隅

鳥取県 大田 勝誉

身を以って得た感動は永遠だ
欲の皮薄いようだが厚くなり
頑張って何度も華を咲かせたい
少しずつ大人になった娘のセリフ

和歌山市 田中 すす

力不足を嘆いて割れるシャボン玉
群れ離れ澄んだ音色を聴きにゆく
真つ直ぐに生きよと命からの声
怖いもの知らずで打ってくる先手

和歌山市 根田 よしこ

ケータイを夫に持たせ妻持たず
良い音色出ぬと楽器に文句言う
この暑さ一雨ほしい人も木も
盆がくる仏も人も忙しい

和歌山市 坂部 かずみ

長梅雨で梅も布団も土用干し
守宮来て二人暮しも賑やかに
振込みは工事代だと先に言う
夕立は記入洩れらし予報官

和歌山県 村中 悦男

父母の遺影が生きる盆の月
考えて考え込んで入る迷路
後で効く肥料だけではない話
寄る歳の話はどうも後ろむく

生駒市 小西 稔

盆おどり別れる夏に汗流す
中年は子育て終り趣味に生き
車すてのんきに歩く野や山へ
子は育ちのんきに老後二人旅

橿原市 藤永 実千代

肩書が男の過去を支えてる
一言が足りずもつれていく話
幸せが妊婦のお腹満たしてる
我が母が一番良いと皆思う

神戸市 武田 恵美子

友の句におもわず笑い手をたたく
海荒れて木の葉舞うよう魚たち
毛染め前三毛ネコたちと同じだわ
ピカソ展首をひねって外にでる

尼崎市 古川 正子

早朝の蟬しぐれ聞く青い空
炎天下はつとして見るサルスベリ
若い人箸の持ち方気になつて
十五夜月うつとりながめ一人ごと

加東市 安達 厚

毎日の昼寝長寿を呼び寄せる
一病と禁酒に耐えて八十路です
腹八分食べ過ぎですよ腹六分
傘寿とやせんこ花火の味で生き

加東市 岩本 美緒子

月水金のゴルフが若さ呼び戻す
大切な命と思う日を紡ぐ
石臼の水は鏡よ庭の月
夏休み貰うてぼつぼつ秋の活

加東市 黒崎 美紗子

沢山の実がなりうれし梅漬けた

休憩の間うちわの風やさし

積立金皆で行く旅夢に出る

夕立が去って涼風呼ぶ座敷

三田市 辻 開子

俎にのって信じる医師の腕

朝顔が今年の暑さを和らげる

レントゲン心の痛み写してよ

夏休み洗濯ゆれるカラフルに

西宮市 石野 照代

高い値の野菜にしみなし長い雨

ど忘れをクイズ形式老夫婦

山みどりドレッシングでたべたいね

少しでも人も楽しむうそをつく

兵庫県 永井 かほる

子供連れ揃い浴衣の思い出が

黒豆とデカンショ踊りはこる町

お盆には亡夫に会って何話そ

孫も皆亡夫のお墓お祭りだ

大阪市 平嶋 美智子

空蟬が見つめ続ける青い空

秋あかね飛んで疲れた蟬の声

くるくると舞う夏帽子追いかける

喜びを分け合える輪の中にいる

大阪府 前田 紀雄

猛暑去り鳴く声近しコオロギの

あれこれと追いかける夢でんこ盛り

増税であてが外れた楽隠居

裏切りへ笑顔で返すお人好し

大阪市 吉田 富美

追伸の二行が本音秋の雲

助産婦の看板かすむ町はずれ

健康を靴に託して万歩計

過去の夢秋思の糸にからみつく

大阪府 平井 露芳

こんなにやくも刺身になつて格を上げ

合祀には朕も反対してました

貧乏人テレビ見られぬ五年先

旧暦で見上げておくれ天の川

大阪府 島田 誠一

中年は中古車に似た痛みキズ

中年を越えたのにまだ世にうとく

半分は妻のためにと言ひ含め

亀田節嫌い半分茶の間裂く

大阪市 吉内 福世

愚痴いわぬ愚痴聞き流し丸い膳

風化なお八月来れば兄恋し

趣味を持つお陰の気力夏をこす

ストレスを川柳にはき命あり

河内長野市 黒岩靖博

短くも長くもあつた六十路過ぎ
ほおずきもお盆の花に色を添え
辻褄をはつきり言わず酔つた振り
夫との口約束の頼りなさ

河内長野市 木太久 正一

靖国のみことばのメモ現われて
焼い弾降つたあの日は吾二十歳
モーツァルト聞いてゆつくり朝のパン
トライアスロン頑張っている孫ふたり

河内長野市 内海綾乃

総理選ぶ国民ほしい選挙権
事故がありプールのずさん明るみに
北朝鮮世界をテキに回してる
買いためのタバコなくなり禁煙す

岸和田市 坂口英雄

風呂上りゆかたと団扇まるい風
野性的魅力が欲しいプロ選手
いつも騒ぐ星だと月のひとり言
暴走族独りになるとおとなしい

岸和田市 中岡香代

選んでる横から先に持つてかれ
失恋の痛手をいやす一人旅
歌声も亡き夫に似て泣かされる
胸に抱く正義のあまり疑われ

吹田市 早泉早人

四十年飼ひ馴らされて濡れ落葉
不都合はノーコメントと決めている
人生の節目節目にある儀式
蒲焼の匂いをあてにカンビール

吹田市 元田 さとえ

幸せに気付かない娘の不幸せ
化粧して笑顔が戻る老婦人
心地よく酔わされ本音つい洩らす
木洩れ日がさせば微笑む石地蔵

高槻市 安田 忠子

爽やかに女子学生の更衣
清張のゼロの焦点イッキ読み
黄金の目をした猫に睨まれる
ヒロシマ忌ナガサキ忌今日祈りの日

豊中市 源田 啓生

野良猫も軒先伝うこの酷暑
作務衣着て煩惱少し遠ざかる
心地良い朝を紙面が暗くする
拒否権と言う国連の旦那衆

豊中市 荒巻 夢

言いたいよ金のことなら任しとき
彼の人も四十九日のお茶となり
クールビズ襟元さびし懷も
満月に兎をみた頃母も居た

寢屋川市 北田 ただよし

暑いのに庭で雀はしゃべりすぎ

三人三様に昼の砂時計

二歳児の澄ましたフォートまた増やし

寝ころべば背負う重さが消えている

寢屋川市 小嶋 みさと

戦禍絶えぬ民の幸福はるかなり

今生きてあることの福かみしめる

蟬しぐれ起きるも臥すも共に生き

原爆忌悔しき思い消えるなく

寢屋川市 長濱 賢山

八つ当り出来る女房がいてくれる

いがみ合う国にも月はまんまるい

これしきの字をと悔しく辞書を繰る

静かなるファイト明日へ種子をまく

羽曳野市 森 下一知

ふる里に酸素噴き出す母が居る

快いショックを受けるほめごろし

コンパスの長さが攫う恋かたき

ひらがなの形に曲がる老母の背

羽曳野市 吉村 久仁雄

性善説に生きてゴマメでいる矜持

いい人でつまり人畜無害です

人間を磨いて赤い血を忘れ

真つ当に読むと戦はしない国

箕面市 寺井 柳童

虹の橋北の彼方は消えて見え

飛び乗ったエレベーターがシンドラ

振り向けばまだ見送っていた女将

食らいつく魚にもある運 不運

八尾市 寺川 はじむ

走り過ぎててもブレーキを踏む妻が居る

中年へ心が着せる派手な服

正直な舌が困っている返事

一日がうーんと長い日の無口

大阪府 高木 道子

木漏れ日に頬なでられる地蔵さま

連発の音も虚しい遠花火

一族で文字なぞりては墓洗う

邪魔な物勿体ないの成れの果て

大阪府 西川 冷子

海底へ捻子巻く如く鳴門渦

食べ頃の西瓜人より蟻が先

井戸水の冷たさ嬉し夕涼み

テトラポッド波静かでも底唸る

大阪府 大屋敷 婦美子

介護日々尊大になる自分いや

放浪記過去の自分がなつかしく

戦争のおろかさを知る終戦日

愚痴るくせおさらば出来てやれうれし

大阪府 小栢 こずえ

汗と泥まみれ自分を研ぎ澄ます
ビール飲む心地を花に水を掛け
淋しさもあるが一人の開放感
フウツと寝た見たい番組終つてた

北名古屋 片岡 文男

散歩にも買物リスト持たされる
適温を超えて脳内停止中

ご近所の床屋はいまもコミュニケーション
混んでても椅子の荷物は譲らない

可児市 鶴留 百合

腰痛も予定は変えぬ草むしり
丸ごとのスイカ何人家族だろ
ひと回りもう伸びている庭の草
溪谷へ幾多のキズが癒される

横浜市 巖田 かず枝

嬉しいね嬉しがられてボランティア
先輩にご苦労様は言えませんが
伝えよう悲惨な歴史原爆忌
テロリスト達も母いる父もいる

横浜市 金森 徳三

団塊の定年始動サバイバル
年金の格差を知った市民税
日本人どこへ行ったか世の乱れ
無理するな言いつつ無理をさせている

子供ニュース僕のレベルに合っている
昇進に頑張ったねと言つてやり

総裁も人気で決まる日本国
殺人のニュースまたかと聞き流す

横浜市 長島 亜希子

出雲総合芸術文化祭 川柳大会ご案内

日時 11月18日(土) 11時開場
会場 パルメイトホール 4階
兼題 (各題2句) 席題 1題 締め切り 1時
「近い」 但見石花菜 選
「からす」 金築 雨学 選
「寝る」 松 彬 選
「急ぐ」 内田 久枝 選
「連れ」 奥田 勝子 選
「小さい」 今井 築子 選

会費 1500円(昼食費含む)

賞 市長賞、教育長賞ほか

欠席投句の方は、参加料1000円または80円切手
12枚を添え、10月31日までに〒693-0052出雲
市松寄下町284 吉岡きみえ宛お送り下さい。

主催 出雲市・出雲市教育委員会・出雲総合芸術文化祭実行委員会・出雲市川柳連盟

あかつき会 川柳会

日時 11月10日(金) 14時
会場 国労大阪会館(JR天満駅すぐ)
兼題 「反省」「実り」「遺産」
投句先 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102
森村 美花宛

愛染帖

新家 完司 選

京都市 高島 啓子

火事を見に出てくる人は決まつて

(評) 火事場が遠ければ自転車をつり張り出してすつ飛んでゆく。そのような人はいつでも同じ人。性格は死ぬまで変わらない。

池田市 上嶋 幸雀

心頭を滅却できずビール飲む

(評) 心頭滅却すれば火自ら涼しらしいが、そのような面倒なことは高僧や聖人君子に任せよう。凡人はビールを飲むほうが涼しい。

大阪市 岩崎 公誠

焦げ過ぎのパンも齧つて生きている

人生のほぼ半分は寝てる俺

大阪市 柴本ばつは

しゃきつとせよ残り時間は少ないぞ

はるばると街へ笑いに来たカラス

鳥取市 土橋 螢

引き分けにしようか雨が降りだした

仏壇の奥から虫が鳴いている

三田市 石原 歳子

ゆきずりの子に微笑むと親も笑み

故郷の物産展で買い過ぎる

横浜市 金森 徳三

喜寿を超え免許更新まだやる気

貧血と言われレバーを買つて来る

藤井寺市 太田扶美代

ガイド役買つて出るほど好きな街
リハビリの母と揃えたスニーカー

今治市 塩路よしみ

政局の流れどうあれ天の川

芦屋市 黒田 能子

賞味期限見にくいとこに書いてある

西宮市 緒方美津子

叩きたい彼のホッペに蚊よとまれ

常連も顔では飲めぬカフェテリア

堺市 和田つづや

わたくしの使命嬉しく生きること

晴れた日は単車を無二の友にする

藤井寺市 鈴木いさお

メル友は妻と娘と暮の敵

基敵へ生きているかと打つメール

鳥取市 武田 帆雀

甚六のこれも役目か墓掃除

人様に関係ないが菊手入れ

奈良市 尾畑なを江

長電話人の死ひとつふたつ有り

見るからに午前と午後と違う顔

池田市 北出 北朗

儂いという字は人の夢と書く

赤ちゃんを抱いたらお姉ちゃん拗ねる

河内長野市 坂上 淳司

無寄港の老ヨットマン高ぶらず

縁日の香具師の啖呵に聞き惚れる

大阪府 畑中 節子

仏壇に託びて五日を留守の旅
旅終わりましたも畑の虫となり

ゴミほどのタイヤで妻にありがとう

(評) 照れが言わた「ゴミほどの」。だが、妻としては、ダイヤモンドの大ききさんでとうでもいい、その気持だけで充分なのである。

吹田市 穴吹 尚士

玉子かけご飯のことで議論する

(評) 玉子かけご飯が見直されて、専用の醤油まで出ている。とは言っても、大の男が真剣に議論するほどのことでもないのだが……

弘前市 高瀬 霜石

ここが子の景色とおもふ子の下宿

(評) わが子が住んでいる周囲の状況、見ている景色を知らず「どうしているのか」と想像するのは難しい。母としてもこれで「安心」

和歌山市 たむらあきこ

八月はやはり普通の月ならず

(評) 八月は懺悔の月、祈りの月。人それぞれに想いはあるが、あの戦争の惨禍を忘れないために、「普通の月」にしてはならない。

西宮市 牧瀬富喜子

鳥取市 有沢せつ子

大人にもモラル教える塾が要る
夜店の荷朝から歩道占めている

唐津市 坂本 蜂朗

傲慢の子だんだん雄魚になるらしい
上役の不正許せぬ一揆の血

和歌山市 木本 朱夏

夏が近く大人の絵本 子の絵本
待ち侘びて耳にアンテナ生えてくる

大阪府 三浦千津子

一抜けを思う虚ろな時間帯
ちょこまかな男と恋は語れない

三田市 堀 正和

無神論老いがゆさぶりにかけてくる
究極のセレブと思う女王蜂

加東市 中上千代子

昭和史を生きて足腰まだいける
ホームラン一つ打たい喜寿の夏

鳥取県 竹信 照彦

欠席のわけはさまざまクラス会
帰りたいけれど帰れぬ外来魚

枚方市 海老池 洋

待っている妻の気持も知らず飲み
昼寝から覚めればラジオ鳴っている

弘前市 福士 慕情

本物のダイヤ妻には似合わない
体脂肪気にするうちは愛らしい

大阪府 津守 柳伸

藤井寺市 鴨谷瑠美子
カレンダー終着駅は書いてない

藤井寺市 高田美代子

ピカドンでなくてよかった大花火
期待はずれはお互いさまで添い遂げる

和歌山市 田中 みね

元気です犬も私もよく吠える
母のたもとで隠れた癖がまだ残り

大阪府 小谷 集一

孝行のつもりで母の愚痴を聞く
うっかりと抱き起こせない通学路

尼崎市 田辺 鹿太

血压が良いとスイカを食べすぎた
盆休み空一杯に星がある

吹田市 早泉 早人

振り返る子もなく地蔵はつねにと
仁王さんの肩あたりから秋の風

松江市 松浦登志子

健康のためとお笑いはかり見る
鏡にはまだ頑張れる眼が映る

四條畷市 吉岡 修

夕日見て今日一日の無為惜しむ
鏡にはまだ頑張れる眼が映る

三田市 阪本 藤朗

和歌山市 古久保和子
紙芝居の居そうな木蔭探している

唐津市 仁部 四郎

二度三度四度と親は同じこと
勿体無いばかりで金が回らない

大阪府 桑田ゆきの

外出に口紅だけの身嗜み
梅漬ける夫好みのしよっぱさに

寝屋川市 籠島 恵子

廃校の案内板にからむ葛
浴衣着てデートした日も遠くなり

和泉市 横山 捷也

酷暑の陽受けて傘寿が牛歩する
九十歳までの五年あやふや葱刻む

尼崎市 春城 武庫坊

認知症なつてたまるか経を読む
声出して会話もします朝の経

豊中市 樫谷 郁子

オイルショック嫌な記憶が袖を引く
東京のカラスは避暑に行くらしい

大和郡山市 坊農 柳弘

蟬かつぎワツシヨイ蟻の夏祭り
蟬かつぎワツシヨイ蟻の夏祭り

八王子市 播本 充子

唐津市 樋口 輝夫

香芝市 大内 朝子
ふる里の山河よ歳をとらないね

松江市 三島 淞丘
投げ出した足の裏から抜けるガス

西宮市 門谷たず子
やれやれとやはり一人に馴れた椅子

唐津市 久保 正剣
簡単に今日生き延びるカップ麺

米子市 政岡日枝子
引き出しの中の昔が燃やせない

和歌山県 三宅 保州
木簡がパズルのように欠けている

八尾市 高杉 千歩
年金の家計簿少しずつ赤字

寝屋川市 富山ルイ子
百歳の恩師へ誕生日のメール

河内長野市 村上 直樹
神の手と神を信じて手術台

堺市 羽田野洋介
ひたすらに信じるだけの手術台

和歌山市 田中 すず
謹呈とあるがお祝い考える

松江市 津川 紫晃
疲れてる形でシャツが干してある

大阪府 高木 道子
太陽を食べたトマトの赤い顔

鳥取県 石谷美恵子
燃えていた頃は愚痴など吐かなんだ

大阪府 初山 隆盛
地引網浜には老いた羅漢たち

熊本県 高野 宵草
パンツまで濡らした汗に満ち足りる

和歌山県 辻内 次根
のびきった夏の輪ゴムが落ちている

柏市 河野 桃葉
病氣して優しい心取り戻す

砂川市 大橋 政良
老々介護よたまたま回る独楽一つ

大阪府 米澤 俣子
ひもじさを知らぬヤングと反り合わず

鳥取市 田村 邦昭
妻からのほうび自由なひとり旅

高槻市 富田 美義
一戸建て庭ふく風も俺のもの

大阪市 森田 明子
好物がすぐ手に入り味気ない

松江市 相見 柳歩
昔はね松ぼっくりで遊んだよ

藤井寺市 若松 雅枝
夫逝きまだ燃えるもの見付からぬ

今治市 渡邊伊津志
自信ないから善人の振りをする

海都市 小谷 小雪
シャワーより夏もやっぱお風呂です

高槻市 左右田泰雄
リストラがこびりついてる鍋の底

奈良県 渡辺 富子
しじみ汁やつと夫婦の味になる

大阪府 神夏磯典子
金婚を過ぎて他人になつてゆく

豊中市 水野 黒兎
睡蓮に蟻一匹の浄土あり

米子市 青戸 田鶴
広い空あの一隅に誰かいる

西宮市 坪井 孝一
ライバルに酒の量では勝っている

倉吉市 松本よしえ
京都タワーがすかに揺れる最上階

堺市 志田 千代
非常袋コクゾウ虫がわいている

羽曳野市 酒井 一壺
妻の吹く笛に踊って日々平和

東大阪市 北村 賢子
いわし雲孫も娘も去りまたふたり

富田林市 片岡智恵子
若さもう帰ってこない盆おどり

奈良市 矢野 良一
縄のれんひとり手酌で飲むも良し

東京都 清原 悦子
青空の下で笑顔になつていく

鳥取市 倉益 一瑠
斜に構えおでこで睨む癖がある

藤井寺市 中島 志洋
自慢話この前聞いたとも言えず

森 茜
お金持には上限がないらしい

夏目 一粋
鳥取市
額いているがぶつかりあう心

田邊 浩二
八尾市
定年で晴れてジパンスニーカー

園山多賀子
出雲市
庇い立てしたばかりに共犯者

加島 由一
堺市
しみじみと時の流れる裏日本

福光 京子
倉吉市
踊りの輪曲がった腰も伸びていく

田中 章子
神戸市
天井が高いと心広くなる

山田 耕治
尼崎市
アルバイトかと親の目で心配し

岸本 宏章
鳥取市
僕よりも若い亡父に諭される

小川てるみ
高知市
六十の知識クイズに試される

村上ミツ子
八尾市
仏壇へそと供えた通信簿

瀧本きよし
高槻市
雑用に追いかける定年後

山本 半銭
堺市
終章でわたし好みに巡り逢う

伊達 郁夫
枚方市
良い知らせ葉書サイズでやって来る

西脇市
七反田順子
顔の皺作らぬように太ってる

谷口 義
東大阪市
読み終えた本と乾杯してしまう

録沢 風花
鳥取市
老いという初体験をしています

元田さとし
吹田市
パトカーにあわててシートベルトつけ

今 愁女
弘前市
犬に服着せて散歩の供をする

都倉 求芽
京都市
世の中を斬りまくりたい胸のペン

奥村 五月
大阪市
雑草の私にバラをくれた彼

板東 倫子
大阪市
守護霊とやりに助けてもらいたい

森下 一知
羽曳野市
極楽をのぞき疲れた空財布

岩崎 和子
鳥取県
食後すぐ歯を磨いたら薬呑む

桑名 孝雄
香南市
反戦の歌と軍歌が交差する

鍛原 千里
大和高田市
我が儘も生きる力のひと欠片

葛西 清
取手市
ぐうたらな息子の嫁の几帳面

吉田あずき
豊中市
玄関の小さい方が父の靴

美作市
小林 妻子
呑みすぎて線路走った人もある

市丸 晴翠
唐津市
よう来たね蚊も出迎える墓参り

片山 忠
西宮市
あいつよりましだと思いき生きている

亀井 円女
武蔵野市
勲章の皺また一つ昼鏡

柏原 夕胡
和歌山市
ダ・ヴィンチの脳なら移植してほしい

高橋 岳水
弘前市
止まり木で時どき背伸びして帰る

星野さらり
大阪市
話しかけてそれから楽し旅の人

宗 水笑
唐津市
青い地球下界は今日も黒けむり

飛永ふりこ
生駒市
好奇心食べて夏バテなどしない

中宇地秀四
鳥取市
お迎えよ来いと言いつつ薬飲む

池内かおり
東かがわ市
弔いに行つて見学して帰る

大橋 鐘造
富田林市
ごめんねの一言鬼も黙らせる

山川日出子
交野市
真夜中はギター之音もピアノシモ

武本 碧
和歌山市
水を向けられて本音がポンと出る

平成十八年度 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

和歌山市 喜田准一



大阪府

米澤 俣子

平和ほど贅沢は無し花の下

ときめきの数だけ若さと戻す

日本人せめてきれいな箸使い

女だけ長生きしてもつまらない

ほどほどという物差しが厄介だ

路郎賞準優秀作第二席

出雲市 伊藤玲子

一色の闇の妻さを好きになる

スロースローあなたに解けてゆく時間

どじばかり深目の帽子欲しくなる

恋文のようなネクタイさしあげる

やわらかい豆腐誰とも仲がいい

路郎賞受賞の報に驚きで、胸が震えました。よもやこの立派な賞を、私にいただけるのは夢にも思いませず感謝でいっぱいです。

これも先生方のご指導と、ご先輩、柳友の皆さまの後押しがあつて、今日までやってくることが出来ましたことと、感謝申し上げます。この受賞を機に「命ある句」を作ること

柳歴
平成四年 岬川柳会発足と同時に入会
平成九年 NHKりんくう教室川柳講座
（橘高薫風先生）受講
平成十年 川柳塔同人

平成十八年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

大阪市

和歌山市 田中 すす



森田 明子

芸のない犬で我が家に合っている

晩秋に女はひとつ歳をとる

自画像のゴッホに熱く見つめられ

削っても私無限の多角形

だんだんと素顔に合ってきた仮面

「参加することに意義あり」の心意気で応募

募致しましたが、受賞の報に大変驚いております。

お世話になった句会の諸先輩方に、深く

感謝致します。これからも沢山の出会い

を大切に、川柳に親しみたいと存じます。

今後ともご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

有り難うございました。

柳歴

平成十七年

新聞投句
川柳塔誌友

平成十八年

大阪城北川柳会入会

川柳塔賞準優秀作第二席

シドニー 坂上 のり子

人間がどんどん未来食い荒らす

留守電の赤チカチカとして無言

浮いているだけの地球に神多し

何あろうとこの地球より行き場なし

わが領地ゆつくり巡る猫の朝

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数159名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内 天笑	3		2			1							4			5				
板尾 岳人							2			5			4			3		1		
大橋 政良	3			4						2					1	5				
早川 盛夫			5					3		4			2			1				
高島 啓子		2		4		5		1				3								
岩佐ダン吉		1							2		3		4			5				
籠島 恵子				4			2	5				3		1						
鴨谷瑠美子							2			3					4		1			5
長谷川呂万	3		1			2						4								5
板東 倫子								2		1		3				5				4
藤村 亜成											3					2	5		1	4
亀岡 哲子					4					2	5	3						1		
黒田 能子			1			2				4						5		3		
西内 朋月				3	1		2						4							5
田中 みね						2	1						4		5					3
玉置 当代	1		4					3								2				5
石谷美恵子			2		5		3			4						1				
岸本 宏章			2	5						4	1		3							
白根 ふみ	4	2		3				1								5				
土橋はるお				1		5		2						3				4		
伊藤 寿美			2	5			3	4	1											
川本 畔		1	5	2	3															4
三島 崧丘			5	1	4								3							2
岩本 笑子					1	5						4			2			3		
古谷 節夫							5									3		4	2	1
岩切 康子	1										2					4		3		5
小澤 幸泉			5						3						4		2			1
	15	6	34	32	18	22	20	21	6	29	14	20	28	4	16	46	8	19	3	44
	榎本日の出	岸本孝子	伊藤玲子	川崎ひかり	失格	谷口義	山岡富美子	石堂潤子	牧野芳光	吉岡修	菊地政勝	居谷真理子	村上直樹	富田美義	井丸昌紀	米澤俣子	三好専平	松尾和香	大川桃花	喜田准一

川柳塔賞得点表 (応募総数 82名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

選者	作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内	天笑			4										1	5			3	2		
板尾	岳人		2	3							5		1								4
大橋	政良			1	2						3				4		5				
早川	盛夫		5				4	1					3					2			
高島	啓子			5									3		2		4	1			
岩佐	ダン吉			3									4	5		1		2			
籠島	恵子			5							3		2		1	4					
鴨谷	瑠美子			2							5		1				4		3		
長谷川	呂万					2									3			1		4	5
板東	倫子		2	4											5	3	1				
藤村	亜成	2	4					3									5			1	
亀岡	哲子	3				1							5				4		2		
黒田	能子		5					1					3		4	2					
西内	朋月			4		1						3	2						5		
田中	みね	2			4								1	3			5				
玉置	当代	4	5		2									3				1			
石谷	美恵子	2						5					1		3		4				
岸本	宏章				4				1				3					5	2		
白根	ふみ	2	3					1					5								4
土橋	はるお			5	4			3				2				1					
伊藤	寿美		5					3		1					2		4				
川本	畔							4				2	3	1	5						
三島	淞丘				5					2					4		3		1		
岩本	笑子		3		2							1						4		5	
古谷	節夫				3	2				4			1						5		
岩切	康子				3	5									4		1		2		
小澤	幸泉			3				1							4		5			2	
		15	34	39	29	11	4	22	1	7	16	8	38	13	46	11	45	19	22	12	13
		片山	柏原	坂上	土屋	長谷川	失格	花岡	野崎	吉田	両川	巖田	辻内	榊本	森田	加藤	田中	堀	上嶋	葛西	伊達
		忠	夕胡	のり子	起世子	康子		順子	勝	幸子	無限	かず枝	次根	宏子	明子	権悟	すず	正和	幸雀	清	郁夫

一賞選考規定 (要約)

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(五点)、第二席(四点)、第三席(三点)、第四席(二点)、第五席(一点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 主幹・副主幹(一) 選者数
北海道・東北 関東 北陸(2)
【京都・奈良(1)】【大阪(6)】【兵庫(3)】
【和歌山(2)】【鳥取(4)】【島根(3)】
【岡山・広島・山口(2)】【四国・九州(2)】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・檸檬抄欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 檸檬賞は二名の選者が選出した十句中から主幹が決定するものとする。
 - ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。
- (備考)
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十八年度から実施するものとする。

受賞者の皆さんおめでとう

河内天笑

毎年の事ながら八月十二日の二賞選考に臨んでは集中力を保つため前日はぐっすりと休んで体調を整える。六人で満員になる事務所は戦場さながら、張りつめた空気の中で行われた。今年は竹原から小島蘭幸氏も参加され、それぞれ四十名を選出。私が各二十名にしほるという作業は例年通り。去年に引き続き五賞を女性が獲得するという風潮が定着しそうな状態で男性作家のより一層の奮発を期待して止まない。

路郎賞の米澤俊子さんおめでとう。遅いエネルギーを秘めた作風はご本人そのものです。僅差で準賞の喜田准二さん伊藤玲子さん、来年に期待がふくらみます。川柳塔賞の森田明子さん、いい作品をありがとうございます。田中すすさん、シドニーの坂上りのり子さん本当におめでとう。愛染帖の居谷真理子さんおめでとう。永田俊子さんは檸檬賞最初の受賞となりました。一路賞の鍛原千里さん、それに唯一人の男性作家として大橋鐘造さんが各地柳壇賞を獲得されました。喜田准一・小谷集一・井伊東吉・小西雄々・藤井正雄・桜庭順風の各氏、男性陣は昨年よりぐつと層が厚くなりました。今後を期待します。花岡順子さん福西茶子さんおめでとうございました。

二賞選考経緯

木本朱夏

平成十八年度の路郎賞には百五十九名、川柳塔賞には八十二名の応募があり、応募締切後の八月十二日、主幹、理事長はじめ第二次選考委員が本社事務所に集合。

選考委員が選出した作品に規定違反がないか、昨年九月号から本年八月号までの川柳塔誌で確認作業にはいる。最終的に主幹が各賞二十編ずつを選び、コピーをして全国の二十五名の第二次選考者に発送。

あれほど規定違反がないか確認したにもかかわらず発送後に規定違反が二名判明。一名は誌友から同人に変わった人が水煙抄の月数が不足だったこと。路郎賞に第二次選考の方が応募していたことが分かり、一名とも失格となり選考委員として反省することしきり。

二十一日に返送された選考葉書を事務所まで集計。再び規定に照らし合わせた結果、受賞者が決定した。

川柳塔賞は昨年より数名応募者が増えたが、路郎賞は年々減少しているようだ。また締切後に到着した作品が数通りあり、せっかくのチャンス逃したことを大変残念に思う。

伝統と名誉ある二賞に来年こそは多くの誌友、同人がチャレンジされますようにお勧めしたい。最後に、選考者は応募できないこと、締切は絶対厳守のことを再確認したい。

二賞候補者居住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	大	鳥	出	東	失	東	河	堺	倉	四	横	檀	河	高	大	大	羽	和	大	和
	阪	取	雲	かが		大	内		吉	條	浜	原	内	槻	阪	阪	曳	歌	阪	歌
	市	市	市	わ	格	阪	長	市	市	市	市	市	長	市	市	府	野	山	市	山
							野						野				市	市	市	市
川柳塔賞	西	和	シ	和	東	失	大	国	犬	神	横	和	京	大	日	和	三	池	取	枚
	宮	歌	ド	歌	京	格	洲	分	山	戸	浜	歌	都	阪	立	歌	田	田	手	方
	市	山	ニ	山	都		市	寺	市	市	市	山	市	市	市	山	市	市	市	市

受 賞 作 品

檀 原 市 居 谷 真 理 子



居 谷 真 理 子

わが子だがその半分は時代の血
口紅も塗らず男は嘘を言う
絵のような家からも出るゴミ袋
空洞も見せて古木のありのまま
跳んだなら死ぬベランダでシャツを干す

評 居谷真理子：「わが子だが「口紅も塗らず」など、冷静な観察眼で得たものを内面に引き入れ、独自の想いを重ねて提出した。その分析力と独創的な表現力を評価する。
喜田准：「三句に共通するものは、軽い自嘲に流れるベーツ。川柳の基本「自らを客観視する」力を持っている。
坂上のり子：「会いたい」とは、友とのつながり。「猛台風」は親とのつながり。共に、こころの温かさが伝わってくる。
小谷集：「三句に共通するユーモアを買う。「ブランドに「義理である」は、人間の心理を掬って巧み。」

(新家 完司)

準 賞 作 品

和 歌 山 市 喜 田 准 一

引き寄せた肩を今では揉まされる
することがないので薬忘れない
逃げ足が早くても今日も生き残る

シドニー 坂 上 のり子

会いたいと思ってくれる友がいる
猛台風進む先には母がいる
法律がなければ人は何をする

大 阪 市 小 谷 集 一

不整脈でしよときめくわけがない
ブランドによく似た靴がお気に入り
義理でする握手は握り返さない

奈良という豊かな地で、川柳塔の皆様をはじめ他柳社の方々にも育てて頂いている幸せ者でございます。

このたびの受賞は皆様方が咲かせて下さった大輪の花。本当にありがとうございます。

これからも明日の花をめざし、精進を重ねて参ります。変らぬご薫陶をお願い申し上げます。

柳 歴

平成 十年 新聞投句
平成 十年 川柳塔なら入会
平成十二年 川柳塔同人

受賞作品

熊本市 永田 俊子

命抱く土ほんのりと暖かい

評 「命抱く」は、修辭的には、饒舌のむきもあるかも知れぬ。視点もまあ普通かも知れぬ。作者もサラリと詠んだつもりかも知れぬ。そうだとしても、作者の全人生の稔りが、ゆるぎない貫禄とでもいうべきものを、泰然として發露させている句と私には思えた。

(仁部 四郎)

毎月平均七五〇句をいただく中から三十八句、沢山の佳吟を没にしなければならぬ苦痛の一年間だった。川柳を始めた頃から薫風先生はじめ諸先生の選を受け育てていただいた事を思い、選者として私なりに全力投球出来たと思っている。有難うございました。

(藤田 泰子)



永田 俊子

樟樣賞入賞のお電話を頂き思いがけないことで驚いています。

いつも皆様方の優秀な句に圧倒され低迷を続けていますので、この度のこと光栄で何よりうれしくこれも諸先生方のお蔭で本当に有難うございました。

準賞作品

煩惱の引き算零になり難し
火の海を駆け抜けた日が懐かしい
井伊 東吉
小西 雄々

候補作品

焼香の順序きびしい過疎の村
祈ること多い手ていねいに洗う
笠井 欣子
金借りた方は懐かしがっている
北村 賢子
受かったな挨拶できた隣の子
高野 不二
極まればどんと動かぬ木の机
江見 見清
名簿からポツリポツリと散る椿
牧測富喜子
油断しています信じていますから
野坂 なみ
和田つづや

柳 歴

昭和二十九年 熊本川柳会入会
昭和四十一年 川柳塔社入会
昭和六十一年 川柳塔賞受賞
昭和六十一年 各地柳壇賞受賞
平成 五年 路郎賞受賞

受賞作品

大和高田市 鍛原 千里

変わらねば明日の夢が見えてこぬ

評 苦しい現状を変えるには思い切って一歩踏み出すしかない。千里さんの決意のほどが窺える。しかし、どこかの国の首相のように変な方向に改革されても困る。準賞の句、春は冬に鬱積したものが無くなり何でも成し出来そうな気がする。春を待ち侘びている順子さん。霜が降りた朝の畑仕事に出かける様子が浮かんでくる。太陽が出るまでに一仕事片付けようか。(福士 慕情)

自分を変えるのは自分と気付く人とそうでない人の違いは、夢を掴めるか否かにあると思います。千里さんに見えた夢は、どんな色をしていたのでしょうか。順子さんの句、打算のない明るさと前向きな姿勢に同感をしました。正雄さんのように耳を澄まして自然を楽しむ暮らし方に大賛成です。(古久保和子)



鍛原 千里

入賞のお電話を頂いた時、「まさか」と思いました。川柳も、私の人生も賞というものに縁が無くて、諦めていましたが、やっと運咲きの花が咲きました。これも、ご支援下さいました皆様のおかげと感謝して居ります。どうもありがとうございました。

準賞作品

春はいい希望が全部叶いそう
霜柱踏んで大地の私語を聞く

花岡 順子
藤井 正雄

候補作品

一日を丸い笑顔で締めくくる
新聞にでかでかと載る犬の鼻
少年の夢はまっすぐ天駆ける
感動に出逢う限りは生きられる

武本 碧
播本 充子
渡辺 富子
井伊 東吉

柳 歴

昭和五十四年

昭和五十七年

昭和六十二年頃

昭和六十二年頃

昭和六十二年頃

勝山双葉川柳会
川柳塔社入会
川柳塔社同人
同人辞退
川柳塔社誌友として
現在に至る

受賞作品

富田林市 大橋 鐘 造

気負わずに生きる風花舞うように

評 鐘造さんの句は、同じ人生ならかくあるべきかを詠まれ、ぎすぎすした世の中男性、女性ともに大いにロマンをもつて生きることを教えられました。

準賞二句は、くすぐりのある句に嬉しくなります。候補作品は、おおかさが溢れ純粋さを感じます。

(畠 清史さん、天国で二作句なされませ。(山本 義子)受賞の句、美しい着眼です。百歳までひらりと舞うように、それには健康で生きたいものですね。

準賞の二句、ゆったりと人生を楽しめる句です。若やぎと明るさが窺えます。候補作品、さらりと受け流す妙があります。(畠 清史さん、天命とはよくぞ申されます。頭が下がります。

(山村 一風)



大橋 鐘 造

突然のお電話で各地柳壇賞受賞のお知らせを頂き、驚き嬉しさに胸の高鳴りを押さえるのに必死でした。しばらくは呆然としておりました。本当に有難うございました。これからも川柳を無二の友として励んでいきたいと思っております。

準賞作品

寒村の六十歳はまだ少女 福西 茶子

女女しさも雄雄しさもみなとける酒 櫻庭 順風

候補作品

レントゲン腹の黒さは写らない 増井ヨシ枝

星空の魅力に抱かれ動けない 前田喜美子

さりげなく繰り返し見る裸婦の像 升成 好

天命と受け止めている闘病記 (畠)中後 清史

柳 歴

平成 七年九月 富柳会入会
平成 九年十月 川柳塔社誌友
平成十二年八月 川柳塔社同人

誹風柳多留——一篇研究 14

山口由昭・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦

小栗清吾
清 博 美

83 十三日伴頭白いさいをふり

小栗 采は采配に同じ。采配を振るは、自ら先頭に立つて、指揮、運営に当る。(日)

ここで十三日は、十二月十三日の煤掃きのこと。商家で番頭が先頭に立つて煤掃きの指揮するのであるが、指図するばかりで自分には要領よく汚れる作業を避けている様子を「白い」采を振ると表現したもの。

十三日白ひやろうハしかられる 安五義 3
十三日ふだんの顔はふしやうもの 九 4
清 賛。

84 あひす講上戸も下戸もうこけへず

小栗 恵比寿講は、陰曆十月二十日に、主として商家で商売繁盛を祝って行なうえびす神の祭。親類知人を招いて祝宴を開く。(日)

恵比寿講の祝宴は盛大で、客にとにかく牛飲馬食させることになっている。主題句もその一つで、上戸は酒を下戸は食べ物をもう動けないほど腹に詰め込んだというのである。

あひすかうしゆちにくりんで夜をあかし 安六義 4
とらまへて酒をのませるえびすかう 天四満 2

清 賛。

85 うけるから見れハ六てん女房はり

小栗 受けるは博徒用語。勝負に勝つ。(江)

正月などの素人バクチで、女房が妙に勝つと思つたら「六点張り」をしていたというような意味ではないかと思うが、実態がよくわからない。

因みに、「一点張り」という用語は、花札の「手本引き」というバクチで使われるらしい。手本引きのルールは、親が一から六までの札を持ち、そのうちの任意の札一枚を選んで、参加者(張り子)に見えないようカミシタという手拭い状のものの下に置く。張り子は親の選んだ数を推理して、同じと思う数の札を場に出す(張る)が、そのとき一枚(一点張り)から四枚(四点張り)まで張ることが可能とされる。

主題句は、そういう素人バクチで、女房が六点張り(必ず当たる)をしたということかとも思われるが、そうだとしても、そんなことが現実には可能なのかよくわからない。

伊吹 賛。配当にもよるが、必ず当たるけれども、負ける方が多い。

山口 ちょぼ一もあるようで、六点張りがよく解りません。

清 バクチの句はよくわからない。

86 明店の札所へ張る十四日

小栗 明き店はいっている貸家。あきや。
〔江〕 ここで十四日は、赤穂浪士吉良邸討ち入りの日。江戸の各所に潜んでいた赤穂浪士の面々が、討ち入りに備えて飯寓を引き払った。そのために江戸市中のあちこちで、明き店の札〔貸家札〕を張ることになったのである。

おしい見せなせ仕廻ふかと十四日 傍五十六
此雪に御出立かと大屋い、 八六三三
清 賛。

87 はるまねをいたしましたと手引いひ

小栗 手引きは、盲人などの手を引いて導くこと。またその人。〔日〕

盲人の手引きが「はる真似をいたしました」と盲人に伝えているという事だと思いが、状況がよくわからない。

柳雨「風俗志」では、瞽女の句とされているようなので、「はる」を「殴る」の意と考えると、瞽女と交わった後に殴るという奇習が連想されるが、解に至らない。盲人はあくどい高利貸しをすることになっているので、日頃その盲人を良く思っていない人が、見えないことをいいことに殴る真似をしたというようなことであろうか。今ひとつ釈然としな

いが、一応そういうことにしておく。

伊吹 賛。手引きが付くのは、瞽女よりも高利貸の方が相応しい。

清 賛。

88 めしの時つきやいしやうを付けて喰イ

小栗 搗屋は搗き米屋。賃を取って米搗きをする人。搗臼を転がしながら街上を回り、頼まれた家の前で拌み搗きをなす。〔江〕

搗屋は重労働であるから、

三きね程あて、つきやハ布子ぬぎ 九四
かいとりをつきや四五ついてぬぎ 二二三五

くさり帷子はいだて、米をつき 萬一二八
と、裸あるいは網襦袢姿で搗くのであるが、さすがに依頼客から食事をこちそうになるときは、布子を着て食べるのであろう。それを「衣裳を着けて」と表現したまで。

米つきに御めしといふとおびをメ

山田 賛。

つけ紐を着て米つきハめしを喰 明三桜六
清 賛。

89 なげられもしやうかと初会片くろう

小栗 「投げる」は、肘鉄砲を食わす。振る。「初会」は遊里語。客が初めてある女郎を相手とすること。〔江〕

初会の客は、相手の遊女に振られはしないかと、一方向的に苦勞に思っているということ。川柳では、初会の客は冷たくあしらわれることになっている。もつとも実際には、遊女も商売だから、いいお得意先になるのを期待して、それなりのサービスをするものだとは思ふのだが。

初会にハ娼妓頗る不人相

初会にハばさつもツントはすに座し

山田 賛。でも、どうしてそうなるのか理解に苦しむ。こちらは金を払っているのに、というのは現代人の感覚か。

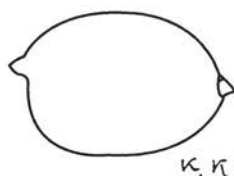
山口 賛。いい客になりそうな場合、いい男の場合は別にして、初会・ウラ・ナジミと吉原の勝手なルールを作って何度も通わせようという商売の手管。またそれを守ることが粋・通という客の見栄で、考えれば馬鹿なルール。

清 賛。だから、世界に例を見ない売春様式と小生は言っている。粋・通というのも瘦せ我慢の極致。

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「ぶつかる」 川上 大輪 選

横綱へはどんとぶつかるのが礼儀
悪友にぶつかりまして吞んでくる
一寸だけぶつかつてみる好きな人
ぶつかった親父の胸は温かった
ぶつかつて豆腐の角の硬さ知る
好き嫌い正反對でいい夫婦
アンテナにぶつかるでかい陽が昇る
ぶつかった柿の木ニツ実が落ちる
待ちぼうけぶつかる雲をじっと見る
ぶつかつて弱さを知った赤とんぼ
困難にぶつかり太くなる根っこ
ぶつけた怒りが無言で跳ね返る
ぶつければ罪が聞くとさがある
ぶつかったらジャンケンポンで譲り合う
ぶつかつていた頃は深かった
ぶつかりもせず自転車人が人を縫う

佐倉市 岡井やすお
美作市 小林 妻子
豊中市 安藤寿美子
宇部市 平田 実男
取手市 葛西 清
豊中市 神野宇乃子
和歌山市 楠見 章子
大阪市 松尾柳右子
京都市 榎本 宏子
松江市 松浦登志子
和歌山市 上地登美代
さいたま市 星野 育子
豊中市 田中 正坊
堺市 志田 千代
堺市 矢倉 五月
堺市 石堂 潤子

「ぶつかる」 松本文子 選

ぶつかった瘤だ素直になるだろう
正面衝突長いトンネルから抜ける
世襲対マドンナ地方区が熱い
ぶつかつてぶつかつて壁越えていく
ぶつかる相手がほしい独りっ子
鉢合せしてはいけないシャボン玉
幸せな人はぶつかつては来ない
ぶつかった記憶はないが傷だらけ
争いは些細なことよ大宇宙
ぶつかりはしたがするりと生き上手
ぶつかったところから新芽出て来たぞ
川柳にぶつかったのが運のつき
ぶつかった数だけ杭として打たれ
衛星にぶつからないか流れ星
ぶつかった時の手応え覚えてく
ぶつかつて脇の甘さを知らされる

鳥取市 山宮 愛恵
八尾市 宮西 弥生
八王子市 播本 充子
大洲市 花岡 順子
岸和田市 堤 植代
寝屋川市 籠島 恵子
東大阪市 谷口 義
佐渡市 高野 不二
可児市 板山まみ子
松江市 宮尾みのり
鳥取市 倉益 一瑠
唐津市 久保 正剣
鳥取市 加藤 茶人
大阪市 板東 倫子
尼崎市 長浜 美龍
大阪市 岡本 久峰

戦争だテロだと休まない地球

ぶっつけ本番シッポの先は濡れたまま

日本酒と焼酎ぶつけ合っている

ぶっかつた男と何となく夫婦

明日という壁へしつかり食べて寝る

ブレーキが利かぬ妻との車間距離

玉砂利を踏むとぶつかる国がある

二ツ三ツ瘤があるから大丈夫

真つ直ぐな人で嫌われものでした

鮮明とぼけがぶつかる老いの脳

嘘と嘘ぶつかり真実が笑う

ぶっかつて泳ぎ上手になる魚

ぶっかつた火花は今も燃えている

ぶっかつた意見保留にされたまま

ぶっかつてくるとは壁も酔うてるな

人生のこんなところでこっつんこ

ぶっかつたところから新芽出て来たぞ

八つ当たり猫が一番馬鹿を見た

ぶっかつたポストに喧嘩売っておく

秀句

ぶっかつてカサブタ一つ取れました

ぶっかつてみれば優しい鬼だった

たんこぶを作り大人になつていく

軸吟

体当たりこれが私の答です

大阪市 近藤 正

和歌山市 古久保和子

鳥取市 土橋 螢

米子市 政岡日枝子

羽曳野市 徳山みつこ

弘前市 福士 慕情

鳥取市 夏目 一粒

鳥取市 山宮 愛恵

弘前市 高瀬 霜石

大阪府 野田 栄呼

富田林市 片岡智恵子

海南市 堂上 泰女

三田市 上垣キヨミ

和歌山市 松原 寿子

橿原市 居合真理子

豊中市 吉田あずき

鳥取市 倉益 一瑤

大阪府 初山 隆盛

大阪市 升成 好

東大阪市 谷口 義

札幌市 三浦 強一

鳥根県 伊藤 寿美

人間の声にぶつかりたいメール

太陽と地球ぶつかりませぬよう

二人だけなのぶつかるお手洗い

タンコブに即効薬の祖母の唾

ぶつかるまでは言いたいことが言えなんだ

肉親の名誉にかけてした頭突き

一寸だけぶつかつて見る好きな人

ぶつかつてそれから私強くなる

ぶつかつて親子似ているなどと思う

やわらかい言葉ぶつかることはない

ぶつかつてみよう勝敗別にして

ぶつかつてそれからドラマ始まった

ぶつかつた火花は今も燃えている

あちこちぶつかりながら生きてきた

人間にぶつかるたびに鈴鳴らす

ぶつかるとうわがる意見聞きに行く

日本酒と焼酎ぶつけ合っている

生き下手で壁に当つてばかり居る

ぶつかつて痛み覚える一輪車

秀句

ぶつかり合うものを見ている梓の外

ぶつかる前に片づけるものがある

ぶつかりそうだ一本つけましょか

軸吟

生きなければ風にぶつかり虹にぶつかり

京都府 稲葉 冬葉

紀の川市 宇野 幹子

堺市 矢倉 五月

日高市 根岸 方子

鳥取県 佐伯 やえ

河内長野市 坂上 淳司

豊中市 安藤寿美子

出雲市 多入和敬子

西宮市 牧瀬富喜子

京都市 都倉 求芽

和歌山県 森下よりこ

藤井寺市 若松 雅枝

三田市 上垣キヨミ

愛知県 早川 盛夫

松江市 川本 畔

和歌山市 牛尾 緑良

鳥取市 土橋 螢

和歌山市 武本 碧

米子市 政岡日枝子

和歌山市 田中 すず

松原市 玉置 重人

堺市 志田 千代

朱

川崎ひかり選



お土産じやないし買えないサクランボ
花が散る利那の風が朱に染まる
しつかりと朱印を押した遺言書
遠い日の朱の帯胸の底に置く
ヒマワリを朱の色にして夕日落つ
嫁の朱にだんだん染まってゆく息子
わが家では妻がすべてに朱を入れる
朱を少し足して野心の皿に盛る
結婚に朱肉離婚にまた朱肉
永年勤続朱杯が語るいばら道
ルージユ朱に見事おんなは立ち直る
日の丸の朱は戦の血が匂う
あの世までふたりは一緒墓石の朱
逝く日まで女でいたくて紅をひく
もつれかけた朱の糸母の手がほどく
朱のバラが華やかすぎて身に合わず
朱の色はおとこの弱味知つて出る
朱の印を押せばローンが走り出す
はおずきのひと鉢老母と語り合う
願懸けて親の手術に朱印押す
顔面に朱に染めはった図星だな
自分史の冒頭に朱の足の紋

霜石 隆盛 倫子 ヒサ子 螢子 敏子 雅明 雅枝 彩子 典子 登美代 北朗 美紗子 セツ子 たず子 伊津志 孝一 かつ子 かおり キヨミ 高栄 英旺

傍線の朱筆が少し喋りすぎ
彼岸花の朱色浄土を思わせる
神の手に縋つて生きる朱を握る
老いたとて朱色の似合った時もある
喜寿過ぎてまだまだ朱唇褪せてない
袖裏の朱に女を意識する
改憲論もう赤紙は出させない
我先に朱印いたたく遍路みち
十年も一緒にいれれば朱に染まる
ひと時も横になれない朱のダルマ
悲しい日悲しく見える朱の夕日
何気なく押した朱印がする謀反
落花一片朱盃に浮かべている至福
神様を尋ねて歩く朱印帳
朱を足して少しメリハリつけてみる
住
朱を少し注ぎ女の喪があける
自画像の胸に朱色の染みが浮く
落陽へ舞台は夜の貌になる
役終えた夕陽抱きとる朱の海よ
幸せは米寿を越えた墓石の朱
人
八月の涙のみる朱に染まる
地
朱の色が褪せても重い保証印
天
朱と燃える女の裏に棲む阿修羅
軸
実印の朱肉にからむ遺産分け

寿美 一粹 雄々 放任 ルイ子 よしみ 輝夫 章子 昌鼓 東吉 明子 忠 俊子 扶美代 ヒデコ 信子 哲男 みつこ シマ子 弘風 理恵 幸雀 大内朝子

童

小川 注湖選



童歌いつしか孫は背でいびき
童顔に戻してくれた里の川
親の背を先生の背を見て童
ふるさとへ着くと童心甦り
童謡だけは今もはつきり歌う母
今は昔童童疎開という悪夢
童話聞く特等席は母の膝
悪い子は一人も居ない花畑
童歌聞かれなくなり世も荒み
懐かしい童話に孫がアンコール
童話から抜け出たような好好爺
ふるりの野山に残る童歌
錆びてきた脳へ童の歌が好き
風の子が童話の森へ駆けてゆく
わらべ唄うたう子供のない路地
童唄歌えば心風いでくる
童唄なら最後まで唄う母
児のない村で童話が枯れて行く
綿菓子に童心に還る夏祭り
童謡に心は帰る故郷に
通学の児童に無邪気失せた国
ゆつくりと童謡うたう老ホーム

信月 半覚 英子 恭昌 あずま 賢山 章司 雅枝 一知 雄々 慕情 昌鼓 正和 彩子 みさと さとえ 徑子 キヨミ

初歩教室

題一 無

三宅 保州

初歩教室に「年間賞制度」創設！

当「初歩教室」欄にご投句いただいている方々の力作に報いるため、「初歩教室年間賞（仮称）」の制度を、役員会等のご尽力により創設していただくことになりました。

初回の受賞対象句は、平成十七年十一月号から本年十月号までの当欄の「今月の推せん句」から、私が年間賞三句を選んで十二月号で発表し、翌年一月の本社句会の席上で表彰させていただく予定です。これを機に従前以上のご投句をお待ちいたします。なお、当欄の投句資格者は「誌友」の方々です。

当欄掲載洩れの方は別途添削します。

当欄は、初歩教室という立場上、ご投句いただいた方はできるだけ一句を掲載できるように心がけていますが、スペースの関係上どうしても掲載出来ない場合は、別途、当社の役員諸氏が添削して、直接返送させていただくこととしましたので、ご承知おき下さい。

【添削・批評句】

原 投句せず川柳塔はやるせ無し サキ子

寒屋落ち（川柳以外の方にはわかり難い）の句は避けましょう。思い切つてご投句を

原 今月も八十円の無駄遣い 宇乃子

入選せず郵送料の無駄遣いの句意ですか読者に分かる句を心掛ければ入選請負ます。

原 無人駅ホームで食事美女四人 忠子

四人の必然性がないので句が動きます。

原 一休さん無理難題をスラスラと 順子

誰もが知っている一休の説明にすぎません。その一休をどう思ったか詠みましょう。

原 一銭も無いと言いつつ寿司を食う 孔 一

寿司が好きだからですか。そうなら「寿司は……」にしたい。又は「無駄遣い」とかに

原 野球無い一日を持て余す はじむ

字足らずです。「プロ野球」「野球放送」等原 無礼講と言えど下座の心地良さ 幸

無礼講と言えど心地良さが矛盾しませんか。むしろ「無礼講と言えども油断出来ません」

原 金無くて買える幸せ見つからず クツカラ

淋しすぎます。「金無くて買える幸せ見つけます」的に前向きに明るく詠みたい。

原 金も無い力も無いとモテません 西洋子

希望的に「金もない力もないがよく持てる」

原 無為徒食今日でやめると鞭を打つ 満子

何度奮つてもという句意で「無為徒食今日でやめるとまた奮う」としませんか。

原 風鈴が悩む風無き午後位置 道子

大上段に振りかぶって作る必要はありません。「風鈴の悩む昼下がりの無風」

原 古い辞書セレフと言ふ字無いのです 美智子

添 セレフという新語など無い古い辞書原 無視しては通り過ぎれぬ迷い猫 麗

添 捨てられた子猫無視して通れない

原 母のあと慕い泣いた子沙汰が無い 乃りこ

添 泣き虫も果立つてからは沙汰が無い

原 無意識に食べた結果の体重計 那珂子

添 無意識に食べた結果の肥満体

原 七十年生きて来たのに無位無冠 こずえ

添 無位無冠だけど長生きして元氣

原 鮎釣りは心を無にして川に立つ みさと

中八、鮎釣りとは川に立つが重複気味。

添 鮎釣りの集中をして無の境地

原 セミシグレ無心になれと無茶を言う 早人

添 蟬時雨無心になれと鳴き通す

原 持っていないならばのこのこ出かけるな たん吉

原 募参り先祖に無限手合わせ

添 ご先祖に無沙汰を詫びる募参り

原 無し無しの暮らしの中の家族愛

添 何も無いけれども家族愛がある

原 無い袖を振って家計は火の車

添 無い袖を振ってはみても火の車

原 無駄遣い響き悪いが気持ちいい

添 無駄遣いとかわかっていても気持ちいい

原 無駄遣いかードの払い追いつけず

添 無駄遣いあつてロインに泣きをみる

原 無礼講本気で話す仲間たち

添 友だちとはいつも本気の無礼講

原 明日は無しとことん信じ粘り抜く

添 明日は無いものと信じて粘り抜く

原 我無者羅に生きた戦中戦後あり

添 我無者羅に生きてきました戦中添

原 無になつて写経の墨の彩を溶く

添 無になつて写経の墨に溶けてゆく

原 無一文それでも若さ武器になる

添 無一文だけど若さが武器になる

原 凡人の努力も無にはなりません

添 凡人も努力をすれば無にならず

原 無理矢理に勉強させる母の業

添 無理矢理に勉強させるのも愛か

原 無我の境悟れば闇に明り見え

添 無我の境悟れば見えてくる明かり

原 今日一日の無事故にほつとキーを抜き

添 感謝して今日も無事故のキーを抜き

原 無理するな金の無いのは分つとる

添 無理には言わぬと金を無心され

原 何も無いだから子供ら仲が好い

添 何も無いけれども仲の良い子ども

原 詐欺されるお金無いから気楽です

添 騙されるお金無いから気楽です

原 どうしても洗つてしまふ無洗米

添 どうしても洗いたくなる無洗米

原 無学にも国の行く末気がもめる

添 無学でも国の行く末気が揉める

原 世知辛い世とは知らずに無垢の笑み

添 世知辛い世とも知らずに無垢の笑み

原 残りもの無理して食べて肉がつき

添 残りもの無理と孫たち寄ってくる

原 無い袖を振れと孫たち寄ってくる

添 無い袖を振れと孫たち寄ってくる

原 無記名でいいならあれもこれも書こ

添 この次に使つてもうがもう無効

原 人間の無力自然に教えられ

添 慎みが無くなつたこの暑さ

原 若さは失うものの無い強み

添 無視してる振りしてカメラ意識する

原 無視してる振りしてカメラ意識する

無心にはまだなれませんが昼の月

無理無題ふっかけ器置確かめる

無人駅わたしの風のお客様

無と欲と背中合わせに生きている

かくれんは無くした亡母の古時計

鬼灯を鳴らして野心などは無い

ロスタイムなど無い父のスケジュール

越境におとがめ無し渡り鳥

音沙汰が無くて安堵の暮らし振り

心配を掘れば掘るほど無尽蔵

パソコンの無知を互いに誇り合い

特売日得たように無駄を買い

【今月の推せん句】

交配は蜂にまかせて無農薬

自然体の生き様が秀句を生んだのですね。

ジャンケンボン無心になった母の勝ち

はのほとした一幅の母子像を見る思い。

身の一つ置き所無い夜の咳

胸を打たれる思いのする秀句です。

物の無い時代に生きた力瘤

戦中派の苦勞が「力瘤」に窺えます。

【私の句】

無理には言わぬと無理を強いられる

銅像に往時を偲ぶ無人駅

千代子

宣子

徑子

映子

寿々女

幹子

イセ

賢山

キヨミ

かずみ

のり子

河洋子

西川

冷子

土屋起世子

赤澤

貞月

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

伊藤アヤ子

秀句鑑賞

同人吟 海老池 洋

— 9月号から

毎月または隔月に届けられる川柳誌は七誌

ありますが、気の向くまま楽しんで拾い読みしております。今月は秀句鑑賞ということで約千九百句皆様の力作読ましていただき、見付け・句の仕立て方・表現の仕方など勉強させていただきました。

伝統川柳・現代川柳・時事吟・十四字詩など種々と読み、幅広く勉強したいと思っております。そして多読多作を心掛けたいと思います。

靖国が火種英霊眠れまい

古手川 光

八月十五日小泉総理の靖国参拝。近隣諸国の非難を浴び、国内でも賛否喧々報道されております。政教分離の問題・A級戦犯合祀と昭和天皇の靖国メモを含む分祀問題・外交問題など、総理の靖国参拝問題は尾を引きそうです。外交・政争の具にされないようにしたいものです。

怖いけど乗らねばならぬエレベーター

板東倫子

エレベーター命からがら乗っている

西川 更紗

エレベーター製造マークにらんでる

安藤 寿美子

シンドラー社のプログラムミスその他で死亡事故をはじめ多くの事故がありました。保全点検不足のエレベーターに乗せられる者にとっては命がけです。安全監視は困りもの。過去から事故が頻発しているのに問題化されなかつたことも問題。また八月中旬の東京大停電でもエレベーターに閉じ込められた事故が多発しております。高層ビルの泣き所か。

災いと背中合わせに住む日本

森井 菁居

山には山の言い分があり土石流

岩本 笑子

人災・天災の多い日本ですが、人災が天災の被害を大きくしてるケースも多いようです。山林の荒廃・砂防対策の不足・乱開発など山には山の川には川の言い分あって、土石流堤防決壊を起こしてしまっています。

ワールドカップ二時間ほどの愛国者

木本 朱夏

郷土愛・愛国心がスポーツ応援だけに終つてはなりません。自分の帰属する国を愛さない国民にした教育は問題。愛国心は軍国主義ではないのです。

多機能に故障のおまけ付いている

岸本 宏章

使いたくない機能が故障の原因になることも多い。故障の真の原因は何十円何百円の一つの部品の故障によることが多い。部品の数が増せば故障の確率も多くなります。多機能より故障の少い使いやすいものが年寄りには向いています。

副作用承知で飲んでいる薬

黒田 能子

一般には薬の副作用の確率は十パーセント位と聞いています。しかし多種類の薬の組み合わせの副作用なんて、個人差もあり確めようがないと思います。薬は用心して飲むのに限ります。七種類の薬を飲んでる僕なんか副作用の実験台かもしれません。

軽量化男の骨と傘の骨

播本 充子

新素材利用で傘の軽くなるのはよいが、骨っぱい男が減っているのも事実。

戒名で呼ばれたことのない先祖

北野 哲男

言われてみれば父母の戒名も忘れていた。
ましてやご先祖さまも。お墓参り・年忌の時
に頭に叩き込むよう心掛けたいものです。

緑青の屋根が昭和を遠くする

江 見 清

銅板葺きの緑青屋根に赤レンガ、そんな建
物もだんだん建替えられていくが、文化財と
して保存しようとする運動も起っておりま
す。大正も昭和も遠くなりました。

悔いはないですと精一杯の嘘

小 谷 集 一

男らしくやるだけやった、悔いなんかない
と言いたいです。しかし本心は未練たっぱ
り。人の心理を穿っています。

公衆電話も俺も時代に乗り遅れ

三 宅 保 州

ケイタイの普及で公衆電話の影が薄くなっ
てきました。保洲さんはご謙遜でこの俺は私
に当てはまりそうです。

街薄暮機窓のビルは墓碑のよう

早 川 棲 世

地球に突き刺さる大小のビルを薄暮の機窓
より墓石としてとらえた写生句。大都市は人
類の墓場かも知れません。

思いどおりに中々歩けないものだ

高 田 美代子

人生なんて中々思う通りいくものではなく
進む道には順風も逆風も吹きます。「智に働
けば角が立つ。情に棹させば流される。意地
を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにく
い。」という心境でしょうか。

メール打つ親指きつと淋しがり

徳 山 みつこ

ケイタイを持つ中学生の四割が見も知らぬ
人をメル友にしているようですが、それはそ
れとして、変な事件に巻き込まれないよう
にしたいものです。

寝るまでの時間が長い休肝日

堀 正 和

毎晩晩酌をやっているのに、飲めない日は
ご飯を食べる時間も短く何となく淋しいもの
です。いつもは夕食を済ませテレビを見てい
ると、ほろ酔い気分になり眠気を感じてくる
のですが、休肝日は目の冴えたまま。この気
持ちはよく分かります。

生きてるか人差指で突いてみる

川 上 大 輪

地に落ちた蟬。眠っている金魚など指で突け
ば動き出す。一寸やってみたらなるものです。
酔生夢死の私も突かれそう。

この辺が身の引きどころ箸を置く

長 浜 美 籠

お呼ばれの場合も役職も人生も引く潮時があ
ります。その潮時が難しいのです。

あみだくじのように人生突きすむ

籠 島 恵 子

人生は一本道ではありません。あみだくじ
のように紆余曲折を繰り返して一生を終えま
す。運を信じてベストを尽くすのも人生。

観たいものあつて早目の晩ごはん

長谷川 康 子

老夫婦の生活となれば、食事の時間もテレ
ビ番組により早くなったり、遅くなったり。
身近かなこと軽くとらえられた佳句。

忘れるとなしにわすれている四恩

天 正 千 梢

四恩とは衆生がこの世で受ける四種の恩
で、父母・国土・衆生・三宝を言います。忘
れてる訳ではないが、われわれ凡人はつい雑
事に追われ忘れていきます。

君が代は直立不動で歌う歌

安 達 忠 央

君が代を軍国主義の象徴と見る人もいる
が、フランス国歌は革命の歌、アメリカ国歌
は米英戦争の歌で、君が代の歌詞に軍国主義
の歌詞はありません。直立不動で歌うべし。

水煙抄

秀句鑑賞

— 9月号から

高橋宏臣

切り取り線決断つかず辛夷咲く

塩路 よしみ

コブシ、嘗てはその花の咲き方で季節を占
い、その習性は農漁民の作業の目安となった。
中七に滲む作者の存在が下五によって、鮮
明に浮かび上がるのを覚えていく。

少し甘えて肩の力を抜いてみる

田中すず

気の抜けない状況の中で、許されなと思
いつつちよつと力を抜いてみる。確かにこれ
は甘えであろう。

傾き、何かホッとさせられる句である。

どくだみの花の白さにある悟り

赤木妙子

科学は対象とする事柄やものに己を語ら
せ、文学は対象とする事柄やものに己を語る。
歌人白秋は「青みて迫る君がまなざし」と、
どくだみの花を詠んでいる。

もう一度着てはまた着て捨てられず

尾崎黄紅

自分を脱ぎ捨てる。これはなかなかである。
いったん捨てると決め箱詰めにしても古着
の扱きは頻りである。

愚痴言つと猫は尻尾で駄目と言つ

増井ヨシ枝

聞いて貰える相手の居ない愚痴を膝の上の
猫に聞かせる。猫は駄目と答える。

でも、応じる相手がいる事に満足をする。
情熱が冷めた頃から太りだす

両川無限

燃えた志も半ば。やがて歳月はゆとりをも
たらす、過去に抱いた情熱は忘れたように。
さて、その時太りだすものといえは……

炎天下ぼくが乾いてしまひそう

辻内次根

茹るような舗装路を陽炎と歩く。それは飢
餓の時であり、乾いてしまひそうになる。
何か心ひかれる句である。

辞書にそう書いてあるからそうだろう

近藤秋星

「：そうだろう」とは、分らないけれど
であり、違つかも知れないでもある。しかし、
その気にさせる。

日常の中に、ままある滑稽の一つである。

かまきりの子どもを見たよ風に揺れ

荒巻夢

微動だにせぬ蟬の自尊心。そこへ吹いて
来た風、羽が風になびく。

句は蟬の子どもである。危なかくもあ
り、可愛くもある。

決断は少しぬるめの風呂がいい

村中悦男

熱湯の中では勇み足、ぬるま湯では足踏み。
少しぬるめの風呂がいいとは、妙を得たも
のである。

人波に押されているが皆他人

中井虎尾

兎に角、人並みに人波に押されている。
しかし、ある日ふと人波は影であり、人並
みは他人の中である事に気付く。

地上でも浮輪ほしいと足が言う

神野千恵子

むぎわら帽夕闇の中忘れられ

矢阪英雄

もう一人産みたかったと老いの愚痴

小池幸子

どたん場た白紙で望むことにする

福岡博利

低燃費それは困るとさする腹

藤原ボン吉



岩屋美明さんを偲ぶ

山田 耕治

岩屋美明さんが、去る七月二日に逝去されました。美明さんとは絵のサークルで、長年親しくしていたこともあり、追悼文を書かせていただくご縁を頂戴しました。

川柳でのおつき合いは、五年前にNHK梅田教室を、私が受講してからでございます。

ひと回り歳は違うのですが、ふたつの趣味が同じということは、しんから気が合うというところでしょうか、本社句会のと、梅田の居酒屋へよく御供いたしました。「今日はどんな句出したんや、わしのはこれや、あんなのも見せてみ」と、つきせぬ川柳の話、絵の話、大先輩と楽しいひとときを過ごさせていただきました。

長身瘦躯、いつもセンスのよい若作りで、そのことを申し上げますと、息子のを着てるんやと笑っておられました。

絵は風景画を得意とされ、明るくてやさし

い色使いで、氏の川柳作品と共通するものがございます。一方、句は、絵をお書きになる方ならではの、視覚的な感性の作品が多く見られます。

冬の虹僕を詩人してくれる 美明

コスモスの風をわたつて来たピアノ ♪

北斎の富士の向こうにある宇宙 ♪

キャンブカー海の夕陽を見て飽かず ♪

分かりやすい、人間味あふれる句が多いのもお人柄でしょうか。

ひとり旅家は忘れることにする 美明

ゆつくりと自分の部屋で見る手紙 ♪

土掘って命を返す種袋 ♪

鶴はかり折つた母の年となり ♪

なども私の好きな句でございます。

美明さんは、昨年十二月に朝日新聞の「朝日なにわ柳壇」入選百句を達成されました。

今頃は、薫風先生とたのしくお話をされて

いることでしょう。

遺品は処分いたしましたとのことでしたが、先日奥様から、病院へ持っていったスケッチブックが見つかり、その裏に川柳のようなものが書かれているとお電話をいただきました。

ホスピスの主治医

わずかに父に似て 美明

父は医者であったが、自分は嫌って医者にならなかったと、伺ったことがあります。

この夏の色を出せるか絵具皿 美明

五月に、箕面の病院へ御入院、この時はまだ病院の窓から新緑の山々を描くつもりでおられたのでしよう。涙を禁じえませんでした。

二月の本社句会のと梅田で飲んで「夜はよう出んけど、昼間のは行くからね」とおっしゃってお別れしたのが、元気なお姿が最後でした。御病名は、中皮腫とお伺いしております。

法名 新緑院美観明鏡信士 行年八十二歳

手を振って梅田の地下で別れたり

耕治

合掌

本社 九月句会

九月8日(金) 午後五時半

ア ウ イ ー ナ 大 阪

盛り返した厳しい残暑の中、九月本社例会は八六名の参加で定刻開催された。

お話は阿萬萬の氏。昭和8年から73年間、かわり続ける川柳についての、貴重なあれこれ。戦時中は句会も監視を受け、柳誌も他に聞に漏れず検閲を受け、ついに全誌休刊に追い込まれる。

戦後、各柳社合同で立ち上げた「西日本鉄道人川柳大会」が「大阪市民川柳大会」にながり、その後の岸和田、寝屋川等、市民川柳の裾野を広げる火付け役になったと当時を振り返る。

井上剣花坊の句碑が出来「通り抜け」の桜と川柳のかかわりが出来たと言っ。

その驚異的な記憶力で、今は亡き川柳家のエピソードや思い出を語った。

(富美子記)
月間賞は志田千代さん(堺市)に輝く。

(司会―玄也)(脇取り―月子・直樹)
(受付―かすみ・潤子)(清記―直樹)

席題「木」 渡辺 富子選

拍子木がチヨンチヨン楽の幕降りる
木の香り平常心を取り戻す
この苗木きつとたわに夢の実が
接木成長親木の脛が痛みだす
老木にも税金だけは掛けてくる
雨風の日もあつたらう木は寡黙
最近の妻木刀と寝ています
口下手を妻が添え木のよう支え
乱伐を神が裁いた土石流
棟梁の腕は木の目と仲がよい
おだてられ木から下りれぬ半可通
ひこばえが元気に育っている安堵
大木になれよと折るクレヨン画
木登りが出来なくなった老いた猿
折々の季節が息づく木の住まい
出張費浮かして飲んだ木賃宿
檜風呂年に一度の隠れ宿
手作りの木目染しむログハウス
廃線で木造駅舎だけ残り
鉛筆の木の香り嗅ぐ答案紙
繊細な匠の技を出す木植
太陽を食べて木陰で昼休み
栗の木を揺すると落ちる少年期
年金の生る木励まし一万歩
釘無用古木寄せ木で建てた寺
競い合うかたちで杉は天を指す
子が建てた家で木の香に酔っている

いさお 義 孝一 シマ子 たもつ ダン吉 淳司 尚士 鐘造 一風 和夫 いわゑ かすみ 瑠美子 富美子 弘風 五月 能子 玄也 恭昌 美籠 一風 洋 直樹 章久 朱夏 弘風

オルガンの音が沁みてた木の校舎
耐震でない木造に住んできます
老木はサプリメントを飲んでいる
木版に志功のいのちほとばしる
流木を磨き新たな命生む

住 木になろう父になろうと背伸びする
星空を見上げて木馬夢を追う
もう秋が腰かけている木のベンチ
木でもなく石でもないが無感動
贖罪へひたすら彫っている木仏

人 もう斬るか言うたら柚子がたんと成り
地 伐採の鉋に森が哭いている
天 木漏れ日を縫って思案の渦の中
軸 木の上の天狗もきつと知るやがて

兼題「あべこべ」 矢倉 五月選
逆縁と言う運命に勝つ白寿
ブランドの財布中身はスカンピン
毎日が休日だから忙しい
病院に病氣さがしに行つてはる
僕よりも妻が三歩を先に行く
海遊館鯨が人間見て回る
後ろ向きに上がつてみるか老いの坂
肝試しキヤツと叫んだのは男

楓楽 淳司 義子 楓楽 見清 公誠 篤子 茜 千恵子 理恵 天笑 潤子 直樹 喜子 正坊 哲男 蕉子 一歩 哲男 みつ子 朱夏

夫より酒が強くてよく稼ぎ

ごめんなさいぶつかったのはあなた

あべこべにして何か変わるか石を蹴る

加害者の人権過大擁護され

あべこべに文句言いたい妻の愚痴

あべこべに彫る篆刻のままならず

太陽が回っているとも見え

逆さでも児はきつちりと本を読む

患者さんが勇気くれたとベテラン医

頑張れよ言われて帰る見舞客

逆縁の恨みはだれに終戦日

親が子を看護している長寿国

ロボットが人間さまを困らせる

横綱が平幕の倍稽古する

カエルコール今では妻がかけてくる

あべこべの食器に悩む左利き

やんわりと彼女にプロポーズされる

父ちゃんが母ちゃん起こしおるすばん

年金が減った代りに税が増え

あべこべに貼った切手にある謀反

決算日分けたのれんに助けられ

あべこべに送ったメールから火花

年金で飼うバラサイトよく肥る

嬉しくて泣き淋しくて笑ってます

佳

二度の戦もとの部下からくる仕事

オイお茶と夫に言うてみたくなる

老人ホーム逆縁は知らされぬまま

あべこべを許さぬ足袋になる律儀

朋月

潤子

ただよし

玄也

洋

茜

ただよし

見清

深雪

一風

和夫

れんげ

日出子

いさお

直樹

理恵

天笑

かすみ

笑司

郁夫

遠野

いわゑ

直樹

希久子

正雄

洋

志千代

俣子

あべこべにはいたパンツで後地獄

料理上手が条件ですと娘たち

薄型のテレビ台だけ先に買い

店員に講釈をして買わず出る

ついて来い言うてた人が濡れ落葉

兼題「昔」

二度の戦昔をみんな脱がされる

汽車賃と言うて古いと笑われる

今は昔にしてはならないキノコ雲

戦争もむかしむかしになりました

ひもじさの中でも夢があった頃

旧暦に農の節目が生きていた

恋しがる昔を包み母見舞う

茅葺屋根に昔むかしが座つて

閻魔にも昔ばなしをするつもり

サンマ焼く妻が昔の母に似る

負け犬の昔話を聞いてやる

素うどんが昔のばくを知っている

故里が昔のままでいてくれる

帰省して昔話をよめますが

今更に昔が恋し竹トンボ

貧しいが助け合いた大家族

ゆで玉子今も昔も変わらない

昔から変わっていない楽天家

笑司

和夫

公誠

耕治

好男

哲男

洋

たもつ

志千代

昭子

公誠

一風

舞夢

きよし

かりん

美籠

美籠

たもつ

千里

泰子

サザエさん昔のままで笑わせる

さるすべり咲いた昔の現住所

昔のこと忘れましてと言っておく

おうむ貝太古の夢を見つづける

昔なら赤ちゃんつけて済ます傷

雨の酒むかし話がしたくなる

軽い痴呆の姉が昔をよく喋り

昔むかしそれは優しい妻でした

自家菜園昔の味のするトマト

象の耳昔話を聞きたがる

九条が昔あつたとなる恐れ

昔なら三行半になるケンカ

昔の話母は遠くをみています

手をつなぐだけで火照つたのは昔

佳

わたくしも昔の事は内緒です

沙羅双樹むかしむかしの話する

老け役で凛と昔の名女優

ロッキンゲチエア揺らすと見えてくる昔

掘り出され昔を語る埴輪の目

人

昔からつばめ来た家壊される

地

お月さんと昔ばなしをしています

天

少年の昔へ飛んだ竹とんぼ

軸

指切りをいくつしたかなわが昔

志千代

瑞美子

耕治

俣子

玄也

富美子

天笑

尚士

能子

楓楽

深雪

月子

理恵

淳司

恵子

みつ子

尚士

楓楽

俣子

求芽

いわゑ

富子

兼題「喜ぶ」

西内 朋月選

これしきで喜ぶ僕が情けない
喜びの余韻ひとりて旨い酒
喜びの陰で典範揺れ動く
男の子九月六日に御誕生
喜びと花屋の前に立っている
癌完治酒をたらふくまた酌める
バースデー薔薇一本に有頂天
深呼吸して喜びをふり返る
ペランダに小さな喜び花茗荷
吉報が地酒を下げて駆け付ける
体重が十キロへった夢だった
つましく喜ぶ母の童女めく
好きだよと言えば喜ぶ君が好き
台風がそれて嬉しい風の盆
細々と生きて来ました誕生日
喜んでばかりはもしや認知症
喜びの涙は壺に溜めておく
喜んで待つ人のいる窓あかり
喜びのまん中にて失語症
おふくろの喜ぶ顔がエネルギー
喜ばれ今更嬖だとも言えず
今日もまた笑いたいから歯を磨く
北の海眺め喜ぶ日はいつか
肩を叩いて喜び合ってくれる友
喜びをかみしめながら煮る小豆
入賞のメーブルを開き回し読み
喜びの拍手は全身で送る

時雄 哲男 求芽 昌紀 いわゑ きよし 直樹 萬美 富美 富子 月子 茜 遠野 朱夏 泰子 則彦 俣子 能子 楓楽 富美子 利昭 一風 理恵 正雄 奮水 潤子

喜びを振り撒いて行くマタニティー
長生きも要介護では喜べず
喜びが含み笑いに浮いている
喜びを素直に出せぬお父さん
酒飲んでよいと医者からお墨付き
佳
よろこびが大きくなると恐くなる
喜んでいられる人もいられる
押し入れに喜びが積んである
銚子ふり残った残つて残つて
喜びはチビリチビリと味わおう
人
花火見て喜ぶ母の車椅子
地
喜ぶとかえって怖い顔になる
天
点滴が外され眩し三分粥
軸
喜んでくつつかいていく三次会
兼題「ジंकクス」 前 たもつ選
ジंकクスを信じハンカチ青にする
ジंकクスをせせら笑った若かった
病院の四の付く部屋はありません
金婚へジंकクスなんてみな通過
金はあるジंकクスなんか何も無い
自然体に生きてジंकクスではない
熟年の恋ジंकクスを捨てました
ブランドもの着た日必ずけつまずく
尚士 玄也 郁夫 美籠 玄也 舞夢 泰子 恵子 天笑 扶美代 郁夫 昌紀 きよし 正坊 好 高栄 求芽 利昭 かりん 希久子 ばつは

優勝戦昨日の泥のユニホーム
ジंकクスを笑いとばして空元氣
ジंकクスを封印北向きのベッド
ジंकクスは出かけに鈴をならします
満月が欠けた逢うのは止めにする
ジंकクスを袈裟懸けにして風を読む
勝負師の目にジंकクスは映らない
ジंकクスを破る勇氣のある人だ
ジंकクスに惑わされずに立ち向かう
ニンニクを食べたジंकクス追いはらう
ジंकクスを破ってからはよく眠る
甲子園へ足を運ぶと負ける虎
五円玉一つになった空財布
ジंकクスに時々御神酒飲ましてる
れんこんの穴を数えてから食べる
揚羽蝶見るとラブレター届きます
ジंकクスを団塊世代吹飛ばす
惑星は八個縁起を担いでる
二死満塁左右の下駄を履きかえる
ジंकクスのハンカチ今日も洗われる
ジंकクスを踏み台にして立ち直る
屋上へおふとん干すときと雨
花の鉢で心安める裏鬼門
戒名をいただいてから十五年
佳
ジंकクスを孫に教えて笑われる
マージャンに勝つジंकクスは妻のキス
種蒔いた夜中きつちり雨になり
ジंकクスを忘れてしまいそうな朝
章久 五月 俣子 富美 柳弘 雅文 三喜夫 満作 朱夏 いわゑ いさお 一歩 きよし 義 月子 律子 たたし 昭 蕉子 鐘造 ばつは 俣子 耕治 志千代 シマ子 天笑 扶美代

自信句はいつも左に置いて来る

昌紀

蛇口全開シンクスなんて恐れない

美籠

人

この前のデートと同じ服にする

修

地

ここという時には赤を身につける

楓楽

天

大安にまとめて買いた宝くじ

兼題「漂う」

河内 天笑選

逃避行夕日沈んだ街が宿

時雄

九条が漂流してる昨日今日

准一

息子来る夫の仕草漂わせ

哲男

青いハンカチ青春を漂わせ

遠野

携帯というビールがここかしこ

千恵子

優しさを漂わしてる猫のひげ

郁夫

漂ってゆつくりおまけ生きていく

たもつ

本を枕に漂う僕の小宇宙

希久子

まだ青春匂い漂う嫁遅れ

章久

つましき漂う知的美人秘書

正雄

花束が漂う八月の海辺

扶美代

追伸に本音がすかに漂わす

昭二

振り向いて頭の下がるお人柄

昭二

封筒の中に漂っている火種

昭二

青空に漂う雲が鬼に見える

篤子

ストレスが漂っている言葉尻

楓楽

漂って少し黄ばんだ喉仏

千代

(久)

あぶなさの漂う彼が何故か好き

いさお

漂流の終着駅が近くなり

東吉

我が家にも浮いて漂うお父ちゃん

朱夏

言い訳をしつつ漂う北新地

恭昌

億ションに漂うさんま焼く匂い

和夫

浮草の漂う如く半生記

茜

ホルモンの匂い漂う街が好き

満作

行間に漂う母の思いやり

楓楽

ゆらゆらと生きる余生は自然体

修

年金の海に漂い生かされる

弘風

漂うても辨当箱は空にする

とし子

三日目のカレーの匂い漂わせ

耕治

佳

物好きな男と漂っています

義

老いらくの恋に漂うサロンパス

尚士

ひとりになると漂流をする癖がある

恵子

淋しくて街に漂うこともあり

瑠美子

漂ってあなたの胸にたどり着く

雅文

初恋がふわふわして花畑

朋月

人

漂うた肋に旨い家のめし

潤子

地

飄々というには欲がありすぎる

千恵子

天

漂っているうち鳥が見えてきた

志田千代

軸

飄々と己の道を歩むのみ

兵庫県川柳協会創立

30周年記念川柳大会

日時 12月3日(日) 午前10時開場

会場 兵庫県民会館9階大ホール

開会 午前11時 挨拶、表彰の後事

前投句(締切済)の入選句発表と表彰式

表と表彰式

ふれあいの祭典 川柳祭

会場 同所

開会 午後1時

当日投句(締め切り11時30分)

兼題と選者(各題2句)

「広い」 大西 泰世 選

「明るい」 長浜 美籠 選

「平野」 上野多恵子 選

「空港」 平山 繁夫 選

「菊」 赤井 花城 選

出句料 1000円(発表誌呈)

賞 文部科学大臣賞他

閉会 4時30分

主催 ふれあいの祭典実行委員会

後援 兵庫県川柳協会他

ふあうすと川柳社・時の川

柳社他

三省堂

現代女流 川柳鑑賞事典

新発売



田口麦彦【編著】 A6判・528頁・定価1,890円(本体1,800円+税)

これは劃期的な川柳集といっていだらう。
女性川柳家たちの、^{とき}関の声を聞く思いである。
田辺聖子

- ☆ 巻頭エッセー、田辺聖子「新しき女流川柳家への期待」を掲載。
- ☆ 時実新子・森中恵美子・大西泰世・なかはられいこ・やすみりえ他現在活躍中の126人の秀句を鑑賞。
- ☆ 鑑賞1句に、略歴・作家自選句20句ずつを添えた。
- ☆ 掲載作家からのメッセージを収録。
- ☆ 好評既刊『三省堂現代川柳必携』『三省堂現代川柳鑑賞事典』の姉妹編。

既刊・好評発売中!



三省堂 現代川柳鑑賞事典

田口麦彦【編著】

A6判・528頁・定価1,890円(本体1,800円+税)

☆時実新子・尾藤三柳・磯野いさむ・橘高薫風・吉岡龍城から、新進の、なかはられいこ・やすみりえ・倉富洋子まで現代川柳を代表する250人。
☆鑑賞1句に、略歴・作品10句ずつを添えた。



三省堂 現代川柳必携

田口麦彦【編】

A6判・528頁・定価1,890円(本体1,800円+税)

☆第23回「熊日出版文化賞」受賞作品。
☆秀句7,000をテーマ別に分類して収載!
☆鑑賞に、句作に最適!

三省堂

ホームページ <http://www.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14

☎03(3230)9411(編集)・9412(営業)

「各地句会だより」掲載について

表記の欄は平成九（一九九七）年七月号をもって終了していましたが、平成十九（二〇〇七）年から改めて一頁の欄を設けます。

川柳塔社傘下の小集句会で、紹介・アピールをご希望の会は川柳塔社事務所まで原稿をお送り下さい。

会の様子、または会員の集合写真を必ず添付して下さい。（前回掲載した句会も再度投稿可）

なお、掲載順・添削については編集部に一任願います。

内 容—会の特色・行事・これからの予定など

自由

締め切り—随時

行 数—たて20字×54行

（400字詰原稿用紙2枚と14行）

第21回国民文化祭・やまぐち2006

～維新と川柳胎動のまち萩から～

川 柳 大 会 11月4日(土) 10時30分～15時30分

（当日投句受付・入選発表・選評・表彰式）
萩市民会館

題と選者（各題2句）

「翼」 住田英比古選

「きらきら」 渡辺 梢選

「夏みかん」 堀江 加代選

第二次選者 今川乱魚・柏原幻四郎・木野由紀子

久保田半蔵門・竹本瓢太郎

賞

文部科学大臣奨励賞・国民文化祭

実行委員会会長賞他多数

入選作品は、「作品集」として発刊し応募された方（小・中・高校生は入賞者）

に無料で配布します。

事前投句は締め切り済み

問い合わせ先

第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局宛

TEL 〇八三八―二五―三五九〇

FAX 〇八三八―二五―三四二〇

主 催 文化庁・山口県・（社）日川協他

むねゆめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

他人では感じ取れない血の絆
言い合つてまた寄り添つてゆく夫婦
義理と言う唄が邪魔する嫁姑
まだ少しこの世に居たい歳となり
満点でないから先に夢がある
亡母偲ぶ名もなき花に立ち止まる
お隣の唄が聞き耳立てている
惚れる事終えてソロソロ惚け始め
蛇口から朝の精気がほとばしる
長寿策梅の威力に賭けてみる
病んでみて病院の長椅子固し
優しいがトゲを含んだ義理の母
悲しみを耐える自分の胸痛む

ローズ川柳会

山崎

君子報

てゐる
みつ子
哲子
トミエ

寿司飯をあおぐ元気な子のうちわ
この浴衣告白受けた祭りの夜
カラフルな浴衣が招くウインドー
心地よし寝はなに妻の団扇風
命がけて乗らねばならぬエレベーター
浴衣帯すつきり暑さたたみこむ
新柄の浴衣で友と若返る

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

カードでは買えないものが一つある
シナリオが未完のままで老いて行き
銀行のカードはみんな無表情
呆けまいとどんなことへも参加して
曖昧な返事に付けがいてくる
曖昧な笑いのなかの四面楚歌
野良猫は振り向きもせず庭に住む
曖昧に出来ぬ性です一人呑む
一生をつぶすカードにある魔力

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

消えるまで虹を眺めているゆとり
束の間の虹を見送る老い二人
巣立つ娘の門出を祝う朝の虹
無作法もよし本堂に椅子がある
親を見て娘の無作法のルーツ知り
無作法を叱られ黙つて呑んでいる
お誘いがかかれ蹴つたことがない
近く日まで君の性分直らね
遣うのが下手な性分ケチじゃない

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

まだ懲りず昼寝が好きな兎です
にこりもしないが心暖かい
世話好きな性に頼りにされている
我慢ない性分出世逃げてゆく
美人でもおそろく歳ではねられる
おそろくは醒めぬ琥珀のなかの虫
慕われてバラは散るのに散り切れぬ
お慕ひしますと一度言われてみたいもの
慕つた彼の人のいまも胸に住む
ボチだけは俺を慕つてくれていて
慕われてから五歳ほど若づくり
信長を慕う男の一本気
次の世もあなたの妻に生まれたい
届かない思慕が熟れてる蛇母
犬抱いて犬の散歩と言つてはる
永代法要いつか私は雲になる
手も口も金も出さない親で居る
漁火が風情を添える夜の海
無作法を卒寿の母が窘める
風ふわりあなたと今日のページ
酌み交わす寡黙な父と子の絆

郁夫
きよし
武史
孝一
照子
公子
典子
比ろ志
稲子
治三郎
葉子
秀夫
尚士
活恵
高栄
祐作
乃りこ
庸佑
かおり
求芽
幸雀

妻よりも大事お金の出るカード
白兎沖はんやり懸かる核の傘
罪な核やめて火花にしませんか
ひんたあを気にせにゃこの世住み易い
仕事する気のない猫とたわむれる
間違えば自爆の鍵になるカード
袋ごと捨てる葉をまたもらう
両スパイ稼げるときに稼きたい
診察券一枚増えて梅雨明け
道ばたもお金を稼ぐ駐車場
自由でも独り暮らしは淋しいな
無愛想な人はつきりになるカード
けしからん貧者に税が重すぎる
命つなぐカード一枚あればよい
核持つな言ってる国が持っている
けしからん頭突きはボールだけに
たおやかに男の骨を抜くおんな
菊座石土台に神社凧と建つ
民は無利子に株でもうけてけしからん
ひんたあを金にしてチャンス取り逃がす
菊座石皇の紋章崇められ
家の核でんと座って指揮を取る
安全なカード政治家出し惜しむ
心ってなんでそんなによく変わる

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

完司 善夫 菊香 孝明 茂登子 義徳 忠良 公弘 美恵子 孝子 圭一郎 無限 鍾旭 富子 志緒 金祥 孝男 昌鼓 雅女 一京 益子 はつ江 春名 一粹

智恵子 公美枝 信雄

よく転び情けをもらい立ち直る
有り難い情け一生忘れない
景気回復少しの情け有り難い
露草も情けがほしい野辺の道
耐えぬいて人の情けがわかりだす
心情の輪を広げつつボランティア
陽炎とゆらゆら揺れるわが情け

竹原川柳会

時広

一路報

君と見た大きな虹は忘れない
虹の橋手をつないで渡ろうよ
二本目の虹を見つけた帰りの道
宇宙まで渡られそう虹を書き
太陽のイナバウアーか虹の橋
今日中に虹まで届けシャボン玉
喜寿ふたりいつまで虹を見続ける
難聴を泣いて笑って生きてます
難聴の聞こえたりをするベッド
忠告をよく聞く耳を持っている
福耳も地獄耳にもなる怖さ
今日からは心の耳で聞くことに
母のひざ母の息吹きを耳そうじ
最終章私は小さな星となる
精いっぱい生きて無名の僕だった
人間に生まれて病氣ばかりする
流れ星願いは一つだけです
夢に向かって走る準備はできている
海の見える窓亡母も私も好きでした
ともしびのユラリユラりと姑の窓

久枝子 鈴子 弘子 和代 静江 正光 雄々 千代美 笑子 房恵 輝夫 節力 太虚 栄恵 幸子 淑子 半覚 敬子 比呂子 正宏 菁居 史子 千枝 貞子 厚子

佳句地十選 (9月号から)

石原淑子

今日は来る予感母を買って待つ
運命を開く鍵なら持つて待つ
止まり方知らず狂っていく時計
ふるりの山から虹が立っている
山椒魚と我慢くらべをしてみよう
まさかの時走れる元氣残しとく
焦点を少しずらせば陽が当たる
にんげんが汚した地球お祓いだ
胎児にも音楽聞かせ待っている
戒めも愛も童話に教えられ

煩惱かステンドグラスという窓は
夜の窓淡谷のり子の歌が見え
窓ガラス拭けば隣が近くなる
船窓にゆっくり変わる瀬戸が好き
一日が始まる窓に蝶の舞い

岩美川柳会

石谷美恵子報

うかうかの夫にしつかり者の妻
うかうかと口出し矢鱈するでない
ミサイルにうかうか漁をしておれん
うかうかと負けられませんまだ若い
うかうかとたまにするのも生きる術
大家族うかうかしてりや飯がない
炎色抱いて写真はねむりこけ
大相撲モンゴル勢が活気つく

静風 汎美 現代 一 路 高 菖 照彦 比る志 たもつ 碧 静恵 真理子 千枝 雄々

孝男 はお 蟹郎 菖子 一 粹 たぬ 一 瑤 かつみ

活気ある人に一生ついて行く

新顔は美人活気が満ちてくる

せかせかと檀家回りの和尚さん

合併に活気づいてる夏祭り

写真集喜怒哀楽のおれの顔

水のんで残りの活気出し惜しむ

老人の活気は医者や喧嘩する

活気ある子の遊び声ない広場

夏草の活気に挑む鎌の汗

失恋の涙真珠に変えた貝

さくら貝胸のボツケに入れたまま

般若経暗記している黒真珠

言い訳が下手です貝になりたいよ

青春の慕情はさくら貝の中

やわらかな中味を守る貝の慈悲

あこや貝女の夢が育まれ

意地なのか力つきたか口あけぬ

うかうかと百も承知の舌に乗り

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

ふくらんだ国の借金取り立てよう

忘れ得ぬあのピカドンのむこいさま

来世もしや夫婦やないやろな

絵手紙を飛び出したきた滝の音

水琴窟心まで癒すクールビズ

ふるさとに母ひとりいる風の音

夏休み家計ふくらみ四苦八苦

ふつくらと赤ちゃんの手にある未来

あの医者のもしや誤診でないだろか

茶子

主一郎

石花菜

睦子

重忠

螢

忠良

稔

よしえ

公乃

一京

和枝

節子

公子

和子

雅女

幸枝

美恵子

契子

肋骨

宇乃子

春代

柳童

勇治

禮子

長一

いさむ

核兵器もしやヒト科は退化中

乙女から女にふくらむ夏の海

古希を過ぎオジサーンに振り返る

当て外れもしやの期待大き過ぎ

ふくらんだ小鼻がなにか言いたそう

心音を聞く幸せの妊婦服

ふくらませ萎ませ夢を追うて生き

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

殺生のできぬ坊さん釣りが好き

太鼓たたくはつび姿にホの字です

お帰りの声忘れてる蝶番

短足の家系みんなが傘寿こえ

言分けを思案しながら終電車

法衣姿がそのまま匂う若き尼僧

帰ったらどの子も聞いた母さんは

スタイルは死ぬまで変えぬ頑固者

真夏日に月命日の花買いに

泥んこの球児が競う夏の陣

どう投げてどうなるものかお賽銭

帰りには無口が増えるバスツアー

胸チラに思わず不覚溝に落ち

帰る家忘れてない酔っぱらい

ふる里に帰ると時計道き戻る

万人が吠えても俺の道を行く

梅雨あけてあわれ紫陽花うなだれる

炎天が続き河童が音をあげる

出目金に睨まれている水中花

老けたなあ友の手紙が愚痴っぽい

黒兎

よしろう

信男

雪子

見清

螢柳

勝

五月

よし子

里江

耕治

美代子

宏一

亀子

勝巳

昭三

イサミ

孝一

正治

義芳

朋月

比ろ志

江彦

全美

きよし

鹿太

美龍

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

無造作に転がっている日曜日

ガリレオに意見したのは僕でした

こころ開けば転げ込む青い空

日常に興味を入れると目がまわる

鳴動にせぬよう父の日を祝う

諺言を素直に飲まぬベツト大

自分史へ夢がひしめく傘寿坂

諫めても総理靖国参拝す

夢だった聖徳太子ひしめいて

ひしめきを皿一杯につめた過去

転校のたびに馴染んだ町恋し

鳴動も読めずに明日は語れない

早朝にゴミ回収車がやってくる

胃の中でひしめいているサプリメント

お祭りがひしめいているお重箱

飲み直す酒を女将に諫められ

忠告をされて人間取り戻す

また転ぶおつづき言って立ち上がる

転ぶたびどんどん増えるおれの愚痴

ひしめいて芽が出た半分間引かれる

結論はひしめく多数決による

人間を小さく感じる稲光り

天下人諫めた黒い染茶碗

生き恥をギューギュー今朝のゴミ袋

あかつき川柳会

山本

柳昌報

美ツ千

小鹿

ひろこ

ひかり

孔美子

くに

黙光

かつみ

幸恵

睦子

和子

美知江

京子

龍枝

和

芳江

あづま

雄人

重忠

和枝

螢

芳光

石花菜

宣子

富美

里帰りみんなやさしい顔で寄り
やさしさをうつとうしと言う気まま
寄り添われやさしさこころしいまま
やさしいと思わせてから料理する
やさしい死に方を神様に聞こう
いささつのすべてを夢にしてみよう
すべてではないがおよそは知っている
すべて許すと癒つてしまった胃潰瘍
九条のすべてを読んでいいなさい
すべてルビ打って淋しさから逃げる
もうかと思えばすべて民営化
生きているそれがすべての車椅子
母さんは毎日包丁研いでいる
アメリカの武器の倉庫が国中に
腰痛の武器はただただ走るだけ
負けそうになったら武器を捨てなさい
ペン一本あれば息の根止められる
丸腰の強さはカマキリの教え
背の青い魚は武器を持っている
君も見ろその一言のいい映画
戦争と人間何度観たことか
認知症身につまされて見る映画
ジェルソミーナ人生の道僕の道
戦争はあかんはだしのゲンと泣く
国放棄社会保障自己負担
銀行のトップと素人とは許せない
戦争なら徒手空拳ですればよい
日銀で儲けの指南いたします
テポドンへ正義ぶつてる保有国

哲男 美智子 留美子 利昭 美子 扶美代 正坊 シマ子 ダン吉 良知 勝弘 美花 英子 美世子 蕉子 半蔵門 美代子 葉義 見清 一步 章久 守彦 朝子 紀雄 慕情 保州 正 ともつ

岸和田川柳会 原 さよ子報
割箸も我が家を磨く小道具に
割箸が他国の資源食い潰す
割れるまでびったり合った箸の仲
森林を思い浮べて箸を割る
割り箸を出されて実家遠くなる
割箸を割ったら地球儀の叫び
野良猫に一度の餌が甘かった
子に甘く俺に厳しいうちの妻
子育てに甘さ辛さを織りまぜる
また陳謝甘い管理の底知れず
螢よりわたしが甘い水に負け
お巡りにあわてて降りる二人乗り
違反など聞こえませんとケータイ中
いつくるの地球が丸く治まる日
裏切った奴も愉快でない筈だ
ささやかな裏切り重ね子が巢立つ
裏切りの掌とも知らずにする握手
澄んだ目の子等は裏切りなどしない
違反する堀江村上東大出
違反せよ街の空気も澄んでいる
万一の時の保険に裏切られ
夫婦ゲンカすく治まると笑う犬
治安よい日本の誇り崩れだす
荒れるクラス熱血教師良く治め
ご近所を治める妻のお節介
町会を丸く治めて盆踊り
割箸が老舗の顔となっている

和美 房枝 寿海 笑司 みつ江 ダン吉 力子 香代 ゆり子 蛙城 洋 植代 俊昭 泰弘 岩夫 淳子 守 浅子 仁緑 小淳 弘子 珠子 清 幸子 東吉

京都塔の会 都倉 求芽報
ご不幸をとことんカメラ逃がさない
薬とは縁を切りたい万歩計
ひまわりが汗もかかずに会釈する
生き方にも匂がありません姥さくら
ライバルに決して見せぬ常備薬
日の丸の布に涙の戦い
先客の温みのこつていた布団
買い溜めた布地たんすで年をとる
沖縄で白い布ぎれ旗にした
戦いを黄ばんだシャツが物語る
引き算が激しくなっていく余命
夫婦でも一線を引く小抽出し
あとへ引く事もおぼえた独楽の芯
引き潮にゆうべの悔いが満ちてくる
今日も無事夜のとりしが暮を引く
たわむれに引いたくじから迷ってる
やることはやってこの世の暮を引く
体裁ぶる男で友に疎まれる
ちゃんとして行つてください近所の目
見得張った上にきり鯨喉つめる
体裁にこだわりすぎてローン増え
病人が体裁かまうことはない
体裁をつい忘れてる食べっぷり
体裁を脱げば誇りが風邪を引く
体裁を維持する蔭にひと苦勞
体裁を気にするうちはまだ女
体裁より足にやさしい靴を履く

篤子 鹿太 春 美義 とし子 克治 宏子 和友 郁郎 欣之 典子 百合子 藤重 求芽 昌乃 則彦 庸佑 福子 高栄 きよし 正坊 葉子 弘之 英子 満子 益子

体裁を繕つてゐるが狸です
体裁にウソも出てきた四歳児

川柳塔鹿野みか月 土橋

うぶ声が赤ちゃんらしく遅い
ときどきは奥さまらしく跪く
微笑んで子育てらしく傘の下
やさしそうに善人らしく仮面つけ
人間らしく誰を基準にしながら
それらしく貫禄ついていた課長
女将さんらしい出迎え方が好き
偽物を本物らしく売り捌く
よる年波に女らしくを盗まれる
老人らしくなつたと思う影法師
漁火も燃える想いも波に乗せ
燃え果てた螢源氏の名を残す
草ばかり燃えるカンナは芽を出さず
腰みので貝がら節の夏まつり
燃え尽きた君を宇宙の旅へ出す
もう一度燃える火種は溜めている
八月忌燃える地べたの男泣き
燃えつきて出殻になつて欲が出る
気の弱い私が暑さに燃えている
残り火で燃える絵の具を溶いてゆく
燃え尽きた蟬の亡骸地に還る
取り締まるちよちん赤く祭りの灯
提灯の往つたら来た話し好き
提灯を点け迎え火を準備する
提灯を出せば仏に会うような

啓子
輝美
螢報

八重
和子
みどり
房子
はるお
みさ子
かおる
あづま
富久江
きみ子
彩子
節子
孔美子
睦子
くに子
宣子
茶子
実満
久枝
忠良
弘子
保子
永子
小鹿
汲香

提灯の明かりに従いて嫁に來た
提灯の絵の涼しさや御仏前
デラックス盆提灯は若すぎて
提灯の明かりで見れば菩薩さま

川柳塔なら 坊農 柳弘報

失せしもの夏の星座に問うてみる
雑魚達の個性尊ぶみすゞの詩
雑魚の棲む川はだんだん狭くなる
淡島海はかなしや流し難
耐え耐えてこらえきれずに流れり
雑魚だけど時々光る知恵を出す
南港の雑魚は猫も振り向かぬ
遠い日の母の乳房は海だつた
一生を働き抜いた海女の歎
移り気な梅雨に星座が見え隠れ
獅子吼えて空いっぱいの流れ星
満天の星に愚問を投げかける
思い出をつなぐと母の海に会う
空の色吞みこみ海は生きている
うろたえて魔女につないだ糸電話
水車の伝統を追う瀬戸の海
二度三度つなぎ直してきた絆
飽食の海で溺れているヒト科
陽も月も吞み込む海を信じきる
雑魚なりのポリシー守るイエスノ
雑魚の群れ国を動かす票を抱く
オリオンに梯子掛けている詩人
おだやかな海の匂いのする母よ

幸枝
武子
公子
螢
カズ子
ふりこ
春雄
千梢
春蘭
弘風
茂雄
六助
洋子
章久
真理子
良一
一風
博一
修
秋雄
寿美
富子
和生
弥生
隆盛
完次
朝子

雑魚でいい父の背中が温かい
望郷の昂に誓い鳥を待つ
星と星のないでばくだけの星座
待つことの愛を教えている星座
母になる海羊水が満ちてくる
下剋上雑魚の力をあなどれず
味噌汁の匂いに今日もつながれる

長柳会 村上 直樹報

月いちちは回転寿司で猫だまし
にこにこ握手を交わし腹を読む
この傷も猫が掻いたとごまかして
猫の恋騒騒しいが妬けてくる
携帯で絵文字造語を生む人種
居候鍋の蓋明けそつと見る
犬猫もペットホテルでお留守番
名医との出会い命を左右する
聞く耳を持たぬ頑固な父だつた
筋書を聞いてしまったミス터리
あの人の過去をそつとしておく情け
靖国で聞く耳持たぬ総理です
黒猫のタンゴで踊る老夫婦
そつと咲く一人静のような人
媚売つてかわいい猫になる余生
猫の目に見つめられて胸の内
車椅子押して夫の背の丸さ
招き猫上客見ると笑うとか
長生きは猫派の妻のマイベイス
聞き飽きた妻の愚痴にもある本音

道子
國治
順啓
恵美子
理恵
恭昌
孝子
直樹
美代子
明子
武男
登美子
マサ
不二雄
もこ
靖子
三和子
輝子
たけし
靖博
芳野
富美子
一慧
正博
淳司
正美
和代

しみじみとシヨパンを聞いた失意の日
無視出来る位置で噂を聞いている
里帰りそつと万札渡す妻
美女一人遅れてそつと通夜の席
嘘を聞く今日一日の長いこと
一周忌猫も座つて経を聞く

川柳塔唐津

仁部

四郎報

四季日本雨穏やかに降っていた
ママ育ちいずれおふくろ死語になる
汗流し最終バスで帰りゆく
バージンロード父の胸には父の海
念のため彼岸へ持つて往くダイヤ
八月の蟬の因子にきのこ雲
町会費値上げに二度の拍手要り
お土産はただの土です甲子園
ひとさまの揉めごと太くする他人

大原川柳社

山本

玉恵報

明日へとつづく足跡第一歩
厳しかった父の足跡追うて生き
夏草よお前の元気には負ける
爪跡を残して風はゆつくりと
四人目は男女系に春が来た
野良仕事張り切る嫁が跡をつぐ
焦つても師の足跡は踏めずいる
足跡は親の示した道しるべ
古日記小さな風の跡がある
敗けいくさ傷跡ばかりまだ疼く

けい子 和子 幸雄 敬二 よしお 正子 晴翠 勝視 正剣 蜂朗 水笑 四郎 輝夫 高明 あすなろ 絹子 静子 たづ子 みさえ 美佐子 巴子 喜美子 悦子 妻子

頑として譲らなかつた父の跡
亡父の跡少し継いでる詩の道
足跡は銭の匂いへ向いている
気が付けば姑の跡を追うている
寄り道をした足跡がついて来る
城跡と言う山肌のわらび狩り
夢の跡引きずつている花菜

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

旅土産土産の名産箸を買う
納豆を挟むに苦勞の箸使い
箸一膳並べる日は末長く
本膳より旨いもの出る箸やすめ
宇宙の無事を祈っています片隅で
宇宙の果てに桃源郷はありやなしや
トンボとぶ珍らしいねと一人ごと
昔から在った顔してビルが建つ
居眠りの上手な人の地獄耳
この暑さ取つて置きたい冬用に
連花火いのちをそつと抱きしめる
お薬でバランス取っている命
全身で笑う赤子を渡される

川柳ささやま

遠山

可住報

試食して買わずに帰る客ばかり
見通しの甘さを悔いる老後策
増える荷へ旅のガマガチ笑つて
ご近所へみやげ忘れて閉じこもり
この歳でまだ七夕に願ひあり

辰江 南花 地佳平 さちこ 敏夫 みづえ 玉恵 幸子 千恵 武庫坊 宏一 年代 薫 正子 寛之 東園 勝巳 紀乃 守弘 しづ子 精一 純子 美緒子 章 二英

サンブルをそのまま渡す旅みやげ
宅急便みやげが先に待っている
めざし好き言つたらみやげまためざし
あげ底のきれいなみやげついで手が出
親からの人生見本子が学び
七夕はかばちやいとこ煮母の味
少しづつ灯りが見えて来たカルテ
みやげもの近所へ配り旅終る
里帰り行きも帰りも土産提げ
年金が減る見通しはついている
嬉しくて見通しつづる日記帳

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

降らなくても降つても人は水に泣く
水一口胃へ届かない原爆忘
水掛け論なおも決まらぬ遺産分け
もう住まぬ河童は山へ水汚染
水に流すつと出ていたお腹ひつこんだ
肩ふれて都会の顔は無表情
憧れの都会で人間見失う
六本木ヒルズ日本の金を吸い上げる

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

蝉しぐれ妻の小言が聞こえない
ざわわざわわ昭和を語る音色です
八月の水に祈りを深くする
シンブルなセンス背筋が伸びている
語り継ぐ義務八月のきのこ雲
八月の沸点にある原爆忘

文子 美紗子 多美子 開子 照代 かほる つや子 富子 哲男 可住 靖子 ますみ 喜美子 慶子 香住 シマ子 能子 欣史子 あずき 准一 夕胡 登美代 和子 三男 泰女

八月の海カラフルに燃えて恋
八月は欠席します避暑地です

惻
輝子

葉月と名付け盛夏の生まれ夏が好き
八月の靖国の森蟬しぐれ

佐一
泰

八月の浜でわたしも甲羅干し
生き方もそれぞれ今日という音色

豊太
保州

シシブルな脳細胞へ活を入れ
母の背にシシブル重ね八月忘

紀子
和香

シシブルな幸せ夫が側にいる
せつからでシシブルが好き何もかも

よしこ
三喜夫

シシブルな服がやっぱり似合う妻
シシブルに農一筋に土に生き

正博
和

クールビズネクタイは少しシシブルに
ツクツボウシ聞こえてますか塾の子に

小雪
順子

あの時のあの蟬の声忘れない
空蟬の諸行無常という答

あきこ
紀久子

拝んでるかたち崩さぬ蟬の殻
自分みようと空蟬つい拾う

英子
稚代

忘れたい過去が呼び出す蟬の声
絵日記に蟬ばかり出る夏休み

富美子
克子

蟬しぐれ老母の記憶が甦る
平和を祈り蟬はひたすら鳴き叫ぶ

寿子
裕美

少年を呼んで森の蟬しぐれ
真冬にもミンミン蟬を鳴かせたし

大輪
松風報

高知川柳社

川竹

案山子の足短くなって田を守る
台風が反れて案山子に出た安堵

愛宏
三郎

案山子にも劣る男の二日酔

ただし

ユーモアが案山子にあつて笑われ
俄雨走り込まないのが案山子

京子
快風

案山子今日歩いてみた義足買う
九条を守って案山子弓矢捨て

千鳥
功

八起き目にやつとつかんだ勝つ自信
泣いて勝つ子等の思い出セピア色

典雄
まき子

逆境に打ち勝つ人の笑み静か
勝算があつて煙草の輪をふかす

和江
良雄

言い勝ったところで所詮うちの嫁
勝ち負けは言わず嬉しい酒になる

美々
てるみ

勝ち負けは言わず嬉しい酒になる
勝ち負けは敗者のこころ遠ざける

正躬
松風

口数で女はやはり勝っている
胸を張れマナーで君が勝っていた

暖

三幸川柳教室

古久保和子報

根も葉もない話に時を費やされ
ここが好き根づいて生きるこぼれ種

孝義
イセ

美しい花の根つ子にある打算
花も実も育てて驕らない根っこ

三千子
起世子

根に持ったばかりに狭くした世間
根つからの人間好きでたえぬ客

徑子
桂香

出しやばりと言われ根つからお人好し
好きだからあなたに根付く風媒花

靖子
和根

ジャガイモの根っこはきつと多産系
頑張るといふ字に似てる樹の根っこ

次根
かずみ

やっぱりと夢から覚める宝くじ
面を脱ぐやっぱりと夢の落ちる音

宏夫
昇

年の功やっぱりと母の塩加減

汗掻かぬ手にはやっぱり遠い虹
愚痴言わぬ花はやっぱりいとおし

碧
当代

見ている種はわからぬ手のさばき
ネット株種と仕掛けで大儲け

信子
一步

マジシャンの手に成程が隠れてる
奇術魔術の種をたつぷり袋詰め

千幸
秀

種のない西瓜はきつと手品だよ
手品師もおよばぬ母のチチンプイ

朱夏
保州

手品師はおよばぬ母のチチンプイ
追伸に母の手品が伏せてある

正治
町子

コンコンと水の音あり湧く力
水ので飲んで決断せまられる

美枝子
みね

誘い水聞かぬことまで喋り出す
どしゃ降りの雨に流したわだかまり

准一
公子

千枚田命の水が走り出す
覆水の方行はきつと海だらう

幹子
登美代

スポンジが水吸うように伸び盛り
はびきの市民川柳会

章子

はびきの市民川柳会
徳山みつこ報

真一
敏

亀でさえ自分の家を持っている
亀だつてお水の中は走ります

泰子
フジ

亀の子の一寸に目指す母の海
平和やと亀の甲羅干し見て思う

いさお
みつこ

八月忌命が重い亀の池
戦好きのヒト科が亀に笑われる

恵勇
ヨシ枝

窓際の椅子で悟った人間味
ばあちゃんの椅子は窓辺の温い場所

庸策
佑

座るだけで立派な椅子の天下り
栄転で座った椅子が軋み出す

安心の椅子に座ると眠くなる

一 壺

温もりを残したままの亡母の椅子

悦 子

風邪ひきのあいだに消えた椅子がある

扶美代

染みついた背凭れ椅子に亡父の顔

アヤ子

こたわりをやめたら椅子が見えてきた

ダン吉

木の椅子に掛けると幸せに気付く

美代子

突つ張りでどんな押しで千代大海

猿 查

チャンスだぞ嵩にかかつて一気攻め

章 司

どんなと絆が切れていく無常

吐 来

下積みにかじり続けたパンの耳

一 知

乾パンに軍靴の響き思い出す

喜久子

コーヒーにパン奥さんはまだ寝てる

久仁子

サンドイツチだけでは済まぬお下げ髪

六 点

破片から古代のドラマ紡ぎ出す

志 洋

敗戦で命拾うてからドラマ

たけし

西宮北口川柳会

黒田

能子報

描いてたドラマに遠い昨日今日

りつえ

眼鏡拭く迷いの心消すように

千 代

真つ直ぐに見える眼鏡で世を渡り

曙 蝶

朝刊のニュース眼鏡をくもらせる

歳 子

色眼鏡通せば世界歪み出す

貴代子

わが思い天地無用と書いておく

紀 乃

酒飲みの扱い方は知っている

朋 月

亭主関白うまく扱う妻の知恵

萬 的

扱いに苦勞させらる反抗期

江 美

われ老いぬたかがファックス扱えず

美代子

つい老母を子供扱いしてしまふ

富喜子

濡れ衣はお天道様が晴らします

光 久

一言のジョークその場を晴れにする

い わ め

晴れる日もあると苦勞は気にしない

五 月

口車に乗って晴れのち雨になる

比 志

肩おされ晴れた気分分で旅に出る

順 子

八月の汗は大事な意味を持ち

晴 美

明日より今日が大事と蟬が啼く

鹿 太

夫逝つて大事な人だったと思う

嘉代子

お大事に言われることが多くなり

哲 男

ふうわりと団扇が切りだしてくる大事

求 芽

この暑さ後生大事に饅買う

奮 水

母のレシビ舌が大事に覚えてる

和 子

一番目に大事なものが金だった

二 英

故郷の名譽をかけて甲子園

正 和

地蔵盆街もちよつぱり化粧して

孝 一

迷つても奇立つ時も風は吹く

折 杭

百人に百のかたちの幸不幸

直 子

幸運の神とどこかですれ違い

いたる

虫とりにケイタイ持たせ千代安堵

哲 子

赤信号銀杏の影がありがたい

いたる

川柳茶ばしら

板山まみ子報

こわごと甘い匂いの孫を抱く

秀 水

一時間早起きさせる熱帯夜

文 男

台風の子報はずれて邪魔な傘

百 合

大輪を咲かせ得意な移植ゴテ

八 木

言い訳を考えて出る朝寝坊

美千代

バーゲンの服なり少し無理があり

盛 夫

大あぐらかいて見落とす小さい穴

幸 子

なびかせる指しなやかに風の盆

かつ子

雨乞いを真面目に思う乾きぶり

まみ子

倉吉川柳会

竹信

照彦報

大雨を飲んでも青い日本海

石花菜

引き分けにしようか雨が降りだした

螢

豪雨牙剥けば畑も家も呑む

和 枝

大雨に山が動いたさあ逃げろ

賀寿恵

お出かけはいつも嫌われ雨女

由紀子

梅干しも上出来雨よ降つてくれ

和 子

雨もりを直し雨降り待つテスト

日出子

ちよつとだけ見せて次回のお楽しみ

よしえ

ちよつとだけ美味くしておく試食品

玲 坊

ちよつとした段差に足が試される

京 子

ちよつとだけ梅雨の晴れ間にハート干す

祐 子

世辞ちよつと云つて女がオホホホ

萩 江

手も足も出ないが口はちよつと出る

酔美蓉

仕来りもすたれ踊りの輪が出来ぬ

睦 子

廃屋のワラ屋に億の金をかけ

悠 子

手足口いずれ廃れる時が来る

龍 枝

廃れてる巨費を投じた干拓地

重 忠

山廃れ川が廃れて国亡ぶ

鬼 一

ふるさとが廃れる子らがいなくなり

小 生

ケラケラと笑っているよ耳首指

克 枝

飾りならアフリカ人が世界一

次 男

お迎いの車はいやにきんきらさん

秋 草

着飾つてみても行くのはお医者さん

泰 輔

結末を予言しそうなシャンデリア
わたくしの終の飾りをのぞきたい
オムライスの右に飾って見るパセリ
飾る物ないが笑顔が誇りです
困るのは降りすぎる雨降らぬ雨

翠 洋 会 谷 口

充たされた日は手鏡が好きになる
七十路顔鏡に向って抵抗す
万華鏡回せば動く未知の国
遊びから人生観を学びとり
入院で遊び仲間がまた増える
年金の枠にうかがう遊興費
ありがとう感謝しながらよく遊ぶ
よく遊ぶその上遊べという時代
あの日から遊んでばかり蟬しぐれ
木漏れ陽と遊び豊かな小半刻
懐に入れて遊んでくれた山
お盆にはスベアのお坊さんが来る
ばくのスベア ハローワークに落ちている
スベアキーそんなに持つてどうなる
特攻隊儚い恋を胸に秘め
わたしには儚い縁の諭吉さま
赤紙にはかなく散った幾十万
蟬しきり地上七日の儚さま
儚げな顔して女よく食べる
人妻と言えば娘も他人めき
若い保母泣く子すねる子まつわる子
耳手術このうるさ世に舞いもどり

茶子 康子 きみ子 かつみ 照彦

義 報

捷也 れんげ 水昇 満作 舞夢 絹子 日の出 照子 千歩 みつ子 昭義 富子 理恵 春 志華子 桃花 穀子 尚士 恭昌 正雄 さと美

ラッシュでも形状記憶のシャツ元氣
おろそかに打ってはいない寺の鐘
武器持てば何時か使つてみたくなる
川柳塔まつえ吟社 三島 滄丘報

孝一 千梢 正坊

時々は惚けた振りして老い庇う
そんな時あったと偲ぶ老夫婦
あの時の一言今も宝です
時々は贅沢をしている寿命
時々には憎まれ口も出る元氣
恋育つ見守っている花時計

川 柳 大 阪 長 井 善 純 報

夕焼けの浜辺神話が降りてくる
ハングルの文字が散らばる浜辺です
浜辺には出逢い別れのエピソード
産卵の亀を泣かせるやみの浜
砂浜で書けば消されるさみ波に
砂浜は地球の嘆き知りつくす
水平線こえて竹島領有権
君の名を線で囲んでいる私
新幹線も世界に誇る技をもつ
切り取り線の上でわたしは強くなる
琴線に触れて下さい待っている
うっかりと引いた線から乱となる
ピンク着てやがて百歳丸い顔
ロボットにやがて介護をされるだろう
遅時きもやがて芽を出す陽の恵み
やがて来る秋をかかしと待つてみる
本当のやがては星の真ん中に
やがて来る限界という処方箋
八月の折りは深し夾竹桃
折ること多くてどれも半端です
水干しされたに折った跡がある
靖国は折る所じゃないらしい
カタ言で折る神父のいずも弁
お祈りのかたちで蛙死んでいる

和歌子 政子 小生 柳歩 英子 きみえ 紫見 ちえこ 久子 房子 知恵子 喜美子 桂子 雪代 邦代 たけし 螢 多喜 多喜

梅雨晴れ間フル回転の洗濯機
女房の機嫌損ねて夏の陣
不況責め締める我が家の財務官
エレベーター高層ビルの落とし穴
初登山孫と一緒に天保山
目的の愛を指指してバラは咲く
ぼやくのはよそう歩幅が狭くなる
万歳で送られ石で伯父帰還
特売の形くずれを買う所帯
遠路来てしんどい首が浮く湯船
迷惑をかけてかけられ積む絆
老い二人ただぼんやりと生きてます
的にされ未だ悔しい原爆忌
九条で平和万歳たからかに
目標は100まで年金もらうこと
多数決万歳用のチルドレン
温暖化慣れて平気な三十度
負担増すずしい顔の大企業
靖国へ総理は懲りぬ胸の内
不摂生しても病気になるぬ人
万歳と送り出せない総理殿

福世 隆司 信醉 ひろゑ 珠生 孝一 重人 かよこ 五月 章久 柳昌 喜楽 朝子 鉄心 美花 川童 紀雄 洛醉 照月 東吉

注目の美人の影がゆれている
 的を得た質間拍手して応援
 テポドンのは見えぬ闇の中
 男だろ女泣かすなばやかな
 流れ星何かいい事ある予感
 人間パンザイ酒がうますぎる
 万歳を思わず叫ぶ定退日
 しんどいと言つても国は知らん顔
 五体満足ほやくことなど何もない

南大阪川柳会

吉川

寿美報

雑学をつないで人生走馬燈
 神さまと僕とをつなぐ鈴を振る
 故郷に私をつなぐ父母の墓
 人間の鎖大きな波になる
 歳月をゆるりとつなぐ命の火
 清貧の貧だけ僕にあてはまる
 清貧に生きて反戦句を残す
 貧しいが心の花は枯らさない
 清貧を守りこつそり貯めている
 大阪城我が庭にする青テント
 名物へ肩身の狭い岩おこし
 大阪発たこ焼おむすぶくだおれ
 食い道楽何でもおます大阪は
 淀川の産湯つかったこんたくれ
 大阪の水になじんだ土佐河童
 大阪は本音の町だ飾らない
 記念日を花屋で悩むあれやこれ
 あんたにはあれこれ言うて欲しくない

芳 香 一 風 彦 太 宏 青 道 笑 風 勝 弘 一 歩 善 純 弘 泰 修 尚 士 重 人 柳 弘 萬 的 丹 吉 集 一 更 紗 利 昭 章 久 憲 太 郎 朝 子 柳 吉 紀 昌 紀

あれこれを悩まず一歩踏み出そう
 あれこれと迷った末がこれかいな
 あれこれと悩んだ末の元の位置
 あれこれと未完のままで花が散る
 あれこれとストレスまててこねてます
 明日のためあれこれ種を播いておく
 あれこれとあるので今日も生きられる
 清貧が長寿の褒美連れてくる
 少女から女になった肩の線
 大阪の水に馴れたら抜けられず
 大阪はわたしに土に還るところ
 あれこれと嬉しい悲鳴子が嫁ぐ

わたの花

山本

宏至報

喜寿にして悟りの境地まだ彼方
 不器用に生きて表札褪せてくる
 神頼み渡る世間に鬼が居る
 ゴマメも僕も菌さしりしてる温暖化
 約束の結び目はどく共白髪
 給食の無い日はボクも厄日です
 でたらめ綴りうとまじき間我が兄まで
 意味不明で素通りする書道展
 火の河を渡る女の恋心
 でたらめと知りつつ母は金を出し
 でたらめな古墳保全とかバビ笑う
 青空がひまわり誘いツイショット
 世渡りが下手でいまだに回り道
 人生はまだこれからと鞭を打つ
 愛の鞭ふるって痛む親心

直 子 弘 風 栄 子 雅 文 ばつは 楓 楽 たもつ 郁 夫 寿 美 ひさ乃 志 華 子 シマ子 宏 一 風 幸 枝 晴 美 俊 子 浩 三 (本)たえ子 (赤)妙 子 ますみ いづみ 義 明 ふりこ 知 佐 子 民 宏 至

城北川柳会

吉岡

お盆くる仏同士は仲が良い
 お盆には帰ると言つて二年たつ
 盆と暮れおねだりに来る里帰り
 最後まで聞けば中身のない話
 中身では決して負けぬ鬼瓦
 分かっている中身も振つてみたくなる
 玉手箱叩いて振つて確かめる
 灰汁抜けは何の中身もない男
 派手な服中身の孤独包み込む
 中身みな打ちあけてから真の友
 うつとりと見せて女の下ごころ
 九条にうつとりしてる葉天家
 うつとりと秘仏へ祈り深くなる
 花嫁の鏡見つめている親爺
 ごしごしと削り取りたい体脂肪
 泣き顔は見せぬごしごし顔洗う
 すり切れた洗濯板に母の影
 父の背と思ひごしごし慕洗う

愛 子 博 子 正 晴 はじむ ミツ子 莊 治 克 美 美 代 子 君 枝 修 報 はじめ 萬 的 朝 子 美 智 子 高 栄 柳 弘 明 子 ルイ子 志 華 子 和 夫 典 子 正 弘 風 倫 子 東 吉 たもつ

ごしごしと磨かんといてメッキです

脳と膝どちらも老化進み出す

大正の挨拶ひとつにも気品

子を思い親を思んだ大花火

もう二度と会えない人と夢で会う

陽の当たるところに私の席がない

ひと事のように傘寿が来てしまふ

通い馴れた道間違える暑さ負け

容赦なく明日へ明日へと老い進む

まあまあと九い言葉で腹探る

錯覚の愛を温め合っている

配偶者控除廃止で子ども産め

川柳塔みちのく 小寺 花峯報

物価高なのに年金減らされる

途中から不意に消え去る遠花火

独りだと淋しさつのる遠花火

変幻自在なスターマインに魅せられる

孫花火祖父祖母もいて楽しいね

花火鳴る今夜もネプタの出陣だ

受け損なつたボールが未だ帰らない

九回の裏でまさかの砂袋

父のタクト情に流され狂い出す

仏壇の若い軍服まだ語り

岐阜提灯受けて黄泉路の先導者

尺玉がどうし平和な音になる

うたたねの鼓膜を颯る遠花火

団塊の世代が受ける不整脈

小気味いい音で調子を知るミット

集一

利昭

一步

麗

春蘭

とし子

昭子

達子

千歩

順三

ひさ乃

あやめ

きよし

一呑

誠子

洋子

てる

隼人

ヒサ子

愁女

花匠

井蛙

順風

銀波

黙人

花峯

慕情

花泥棒話せばくれてあげたのに

まだ母の匂いが残る形見分け

川柳塔打吹

野口

節子報

五楽庵

孝恵

美代子

茂夫

幸子

和子

禎元

貴恵

美美子

龍枝

かつみ

京子

滋

睦子

和枝

美知江

重忠

照彦

完司

紀美恵

石花菜

やえ

勝憲

玲坊

小生

三津子

お菌黒に烏帽子のおじやる移遊び

雨乞いの月に帽子をかぶらせる

よく似合う帽子ですわねと誉めておく

言い訳の一つが帽子から落ちる

夏帽子風を集めて青くなる

むらくも川柳会

毛利

民謡に女の希い雫する

大野望いつも怒涛に見すかされ

老化度をテストしながらリサイクル

お日様に叛いた雲の乱気流

朝露を踏み追善の杖にざり

ひたむきに国に捧げた夢の跡

同窓会八十路の友と賑やかに

夫々の想いめぐらせ聴くお経

ときめきの昔を語るダイヤ婚

何はとも心ときめき朝がくる

アルバムにときめき八十路物語

風鈴にやさしい風が吹き抜ける

風鈴の音色が冴えて涼を呼ぶ

いい顔で送ろう今朝は青い空

外仕事日陰もなく玉の汗

むしむしの気持ちふつとぶ冷ビール

むしむしとむし器の中でうめいてる

山の宿風鈴の音とせみしぐれ

岬川柳会

八十田洞庵報

何もかも猛暑のせいにして怠け

天敵に死んだ真似でもしてやろう

玲子

善江

きみ子

芳光

幸報

瑞枝

蘭水

俊夫

秀夫

かずこ

義良

寿

昭子

恵美子

ます美

喜美

安男

幸

美保

英男

彰

定子

信夫

年子

俣子

綱取りを狙う力士は異邦人
待も氣儘頭巾で来て遊び

大波小波越えて気ままなひとり旅

大舞台もつれ込んでる土俵下

浅くても失恋の傷癒えぬまま

終点まで乗ると自然に眠くなる

ネクタイをほどいてからの酒の味

清流の岩になりたい夕涼み

大手術はと乗り越え出る眠り

限りある資源と知りつつ使い捨て

忍耐を蝶ネクタイに教えられ

子の行方入れなかった胸の奥

消しゴムで消そう私の浅い知恵

植木鉢気ままな枝は許さない

川柳ねやがわ

森

サン格拉斯バイクの時は若返る

サン格拉斯まだ裕次郎忘れない

サン格拉斯を掛けてる方が刑事です

サン格拉斯どっちにしても冴えぬ顔

サン格拉斯ははずしてずばり吐く持論

過去閉ざす女が好むサン格拉斯

サン格拉斯外して真意確かめる

サン格拉斯似合う男の子煩惱

解き放し付かず離れずサン格拉斯

淀川の水を蛇口で受け止める

淀川は氾濫無いと信じ生き

淀川のわんど白鷺凜と立ち

里子

蛙城

和香

桜琴

珠子

とみ

和美

富美子

みやこ

房枝

茂平

令子

貞夫

洞庵

舊報

日出子

弘一

仁清

九好

修

一風

亜成

ただよし

朝子

庸佑

さち子

勇太郎

三郎

淀川の堤を信じきっている

淀川の栄枯しみじみみる鍵屋

淀川の流れ滔滔勇気わく

無料だと言うのでノーと言いやすい

断りもなく雨になり風になり

断ればしわ寄せのいく人がある

無心にも義理は昔と断られ

断った勇気が扉こじ開ける

そのうちに老人税が出来るかも

元気で長寿僕と妻との合いことば

過疎進む村に長寿の生き字引き

ニユータウン今じゃ長寿だけの街

喜寿を越え米寿の山へ這って行く

気紛れさ庭の草にはお見通し

ご同輩いまわだつみの声語れ

哲学になつてしまった我慢虫

貴方の子で幸ですと言つてくれ

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

あと少しひとり芝居を楽しもう

帰つたら褒めようセツトに妻がゆく

黙るからだんだん溝が深くなる

清貧に光をくれる窓を拭く

さっぱりと過去は言わない二度の職

天皇の独白メモに慌て出す

柊の刺が鋭い裏鬼門

爪に火を灯して残し何とする

残すほど無いのを知つて孫も来ず

我が家では銘酒もあわれ調味料

恵子

忠央

かすみ

とし子

茜

一炊

博泉

弘風

たもつ

高栄

薫

寿男

麗

鈍甲

郁夫

ルイ子

満寿已

求芽

早人

寅次郎

萬的

啓生

重人

庸佑

和子

慶子

夏浴衣うちわに下駄の日本人

大輪の花火の後のゴミの山

雑音の域を脱してきたピアノ

セツトした段取りくすす偉い人

大人達柱のかげでたばこ吸う

身幅ほどの蔭を求めて夏の午後

心太つるりと義理をかき平気

恩愛がわかりかけたか五十年

ワンセツト子連れ女を嫁にする

九条の恩で平和が守られる

亡夫は逝くあの日も蟬は鳴くばかり

癌告知亭主真青妻平気

目に見えぬ御恩に感謝し年重ね

差し向いルール守つて老いの道

火種まき平気な顔で去るおひと

人生は産まれて生きて死ぬセツト

座布団を綺麗に見せた母の足

足二本杖一本がセツトです

川柳さんだ

北野

哲男報

定年にとつても長い日が昇る

仕切り直し球児の夏にただ拍手

お転婆の浴衣姿を見直した

頑固者素直になつて行く不安

プレゼント機嫌を直す特効薬

電気器具買うより高い修理代

披露宴化粧直しに手を叩く

着駅で化粧直ししがビタリ終え

月面にアポロが残す靴の跡

都代子

幸雀

尚士

見清

宇乃子

夢

美義

玲子

寿美子

正坊

郁子

肋骨

久太郎

知香子

巴子

タミ

則彦

勇治

たもつ

章子

美紗子

千恵子

輝美

修

一之

聖也

泉

月光に八頭身のシルエツト

酔い醒めて月もわびしく終電車

老夫婦の歳を見せず月影

古里に月の数だけある棚田

辛子色好んで着てた亡母のこと

生徒には辛い教師がママ好み

気の抜けた辛子のような老いの恋

遠い日の祖母の松茸辛子漬

真夏日に餃子の辛子鼻に抜け

気を入れたとたんに負けている母校

まだ男美女が通れば目が遊ぶ

不思議だなピカソ気分で絵が書ける

きれいだね花に声かけ如露の水

昨日とは違う景色の車椅子

いろいろなヘソを見ましたこの夏は

幼子が涙一粒初泊り

雲囲気がおかしくなつて言い直す

川柳藤井寺

高田美代子報

バスツアー一期一会の花が咲く

客一人降りれば空っぽでも走り

シナリオの通りに来ない春のバス

満腹の帰りが眠い蟹のバス

部屋バスより大浴場が好きな歳

バス降りる時もヨイショが口に出る

質草に何度もなつた腕時計

老舗故質を落とせぬのが辛い

うかつにも寸志と書いた初月謝

キヨミ

俊昭

藤朗

哲男

婦美子

光久

朋月

直美

雅司

二英

好文

順子

房江

千代子

正和

宣子

歳子

悦子

武義

鐘造

重人

井竿

恵勇

淳司

美代子

喜代子

億の寸志忘れまして済む議員

紐銭の寸志がゆれる宮参り

入れ忘れたのか金のない寸志

菜園できゅうり取れたと置いてある

ご近所で寸志の中味決めてある

お布施をけつたらはしよられた読経

仲居に寸志お酒の入りがいようだ

文字通り寸志でお茶を濁される

思惑があるのか寸志多過ぎる

集まった寸志記念の樹を植える

サービスがぐんと良くなるポチ袋

寸志です何か言いたい目をしてる

国からの寸志で余生つつが無く

あす手術主治医へそつと茶封筒

墨痕も威風堂々たる寸志

少年の志の果てにある寸志

人々人々結びにする寸志

寸志の言葉いつも持つてあるありがとう

晩成の祈りを込めている寸志

政界の二重底にある寸志

線香花火ほどの命を生きている

いずも川柳会

佐藤

治代報

友情を貰いうれしい趣味の会

スパイスで暑さに負けぬ朝の膳

貰い物夜こっそりと眺めてる

親切を貰って分けてあげてるパン

ぶよぶよの私を包むBカップ

耕策

ヨシ枝

昭子

アヤ子

かつみ

進

栄一

史郎

雅枝

瑠美子

政男

絹枝

志洋

いさお

六點

みつこ

絹歌

婦美枝

扶美代

半蔵門

春蘭

敬子

律子

祐次

玲子

治代

ドアホーン恋人だけに鳴るように

触れないで今はぶよぶよ熱す時

失恋の傷口ぶよぶよ疼き出す

縁あつて鬼の靴下脱がせてる

ぶよぶよを一寸突つてみたくなる

エレベータードアに向かって皆無口

着て脱いで一人芝居の柄をよる

太陽にまぶしいほどに脱ぐ浜辺

脱ぎ捨てて未練一つを置いてくる

万人に知恵を貰つて生かされる

旅の友貰つたのと館よくしゃべり

取り敢えず仕掛けた事は片付ける

○□揉めないようにドアをする

ぶよぶよとやる気なくしたゴム手毯

シャネルの香仕掛けの臭いまいてる

脱皮してやつとこの世の風に触れ

異と知りだまされてやる親心

招待へ仕掛けがあつたとは知らず

ぶよぶよになるまであびる大ジョッキ

ライバルの見えぬ所に置く仕掛け

釘一本外せば仕掛け解けてゆく

他意のない笑顔に仮面脱がされる

もう少し待とうゼリーが固まらぬ

談合の声は遠くに二重ドア

憲法の仕掛けに返し針がある

堺川柳会

河内

月子報

捨てたいものいっぱい抱いて生きている

すみこ

久子

たえこ

喜子

富恵

多輝子

房子

美佐子

多喜

幸

佐余

寿美

テル子

歌子

蘭水

昌枝

まこと

満江

ちかし

茂美

多賀子

文子

きみえ

章峰

泰子

第57回 西宮市民文化祭 川柳大会

と き 10月22日(日) 開場12時
ところ 西宮市民会館(市役所南隣)
会 費 1000円(呈 作品集 郵送)
宿題・選者(各題2句 席題なし)締め切り13時

「くすり」 西山春日子 選
「骨 抜 き」 矢沢 和女 選
「男 と 女」 島田 握夢 選
「展 開」 西口いわゑ 選
「せかせか」 石井 冬魚 選
「残 り 火」 佐藤 純一 選

賞 各題 天・地・人に呈

交通案内 阪神西宮駅東出口を北へ1分
JR西宮駅より徒歩13分

懇親会 会費 4000円 当日受付
共 催 西宮北口川柳会 西宮川柳会
甲子園川柳社他

連絡先 〒661-0014 尼崎市上ノ島町
2-2-26-206
中岡千代美 TEL 06-6426-1991

堺 番 傘 川 柳 会 柳誌「ちぬ」500号記念句会

日 時 10月21日(土) 18時
場 所 堺市総合福祉会館 5 F 大集会室
(南海高野線 堺東駅下車西へ200m
堺郵便局裏)

あいさつ 堺番傘川柳会会長 中田たつお
宿 題 「自 由」 河内 天笑 選
「出来る」 阪本 高士 選
「激しい」 瀬川 幸子 選
「持ち味」 長江 時子 選
「風 車」 松本初太郎 選

<50音順>

各題2句 しめきり19時

会 費 500円(粗葉・記念号・発表誌 呈)
主 催 堺番傘川柳会
堺市堺区今池町6-6-15-602

中田たつお 方

TEL : 072-221-5298

FAX : 072-221-5296

第30回 寝屋川市民川柳大会

日 時 11月3日(祝) 正午開場
会 場 寝屋川市立総合センター4階
(京阪寝屋川市駅下車 バス西口①
乗場より守口市駅行 各5・35発)

兼題と選者「世 話」 龍島 恵子 選
「癖」 山本 三郎 選
「介 護」 鶴田 遠野 選
「安らぎ」 山本希久子 選
「計 画」 岡 良三 選
「返 事」 板尾 岳人 選

席 題 ありません
出 句 各題とも2句 締め切り1時
賞 各題秀句に賞状と記念品
会 費 1,000円(記念品・作品集)
投 句 10月30日必着(郵券400円)
送り先 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
TEL・FAX 072-827-9204
高田 博泉内 川柳ねやがわ

主 催 寝屋川市川柳協会
後 援 寝屋川市文化連盟・川柳ねやがわ

第16回 枚方市民川柳大会

日 時 10月29日(日) 1時半開場
場 所 枚方市立枚方公園青少年センター
(京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)

お 話 番傘川柳本社主幹 磯野いさむ
宿 題 「勇 気」 碓氷 祥昭 選
「笑 う」 森 イク子 選
「払 う」 松本あや子 選
「穴」 藤村タダシ 選
「泡」 寺川 弘一 選
「ページ」 松本初太郎 選

席題なし 各題2句 しめきり 2時
参加費 1000円(発表誌呈)欠席投句拝辞
賞 市長賞・市教育委員会長賞・他
主 催 くらわんか川柳会
後 援 枚方市・枚方教育委員会
午前中は会場近くの「鍵屋資料館」で
お楽しみ下さい。

連絡先 〒573-0081
枚方市釈尊寺町28-4-301
足立 淑子 TEL(072)853-8153

柳界展望

丘・伊藤玲子・富田蘭水・中居善信

○第10回川柳展望全国大会は、8月20日153名の参加を得てホテルアウイーナ大阪にて開催された。同人の秀句は次の通り。

駅の時計はいつも正しい
顔をすする 鈴木 公弘
酒を飲む時間しらせるい
い時計 新家 完司

○第37回奈良新聞川柳大会は、7月30日奈良県文化会館で約200名の出席(他に投句69名)を得て開催された。当日の本社同人の秀句は次のとおり。

村じゅうのエールを受ける
こいのぼり 渡辺 富子

○第7回文学ルート川柳は8419句の中から選ばれ、なお表彰式は8月19日に行われた。本社関係者は次のとおり。

〈佳作賞〉
寒牡丹だんだん君が好きになる 伊藤 寿美

〈優秀句〉
園山多賀子(2句)・伊藤 寿美・渡辺富子・三島松

大に開催された。

当日は中原諷人選による

ジュニアの部の表彰式も行われた。

▽同人動向△

○8月27日竹原川柳会50周年記念大会出席のため、天

笑主幹、みつ子副主幹、楓楽・たもつ副理事長他13名広島県竹原市行。

○9月3日西日本川柳大会へ選者として出席のため天笑主幹岡山県久米南町行。

▽訂正とお詫び△

9月号12頁目次下20行目、スポーツ体操↓スポー

ツ、体操 22行目、マラソンメダル↓マラソン、メダル 11頁下段6行目、短かめ↓短め 12頁下段22行目、眉を書く↓眉を描く 21頁上段15行目、70頁下段12行目、今出で、みたい↓今出たみたい

新同人紹介

鶴^ど留^{どめ}百^{ひゃ}合^り

―天笑・盛夫・まみ子推薦

編集部よりお願い

この欄への掲載記事、情報を川柳塔事務所へお送り下さい。

記事の採否については掲載される号については編集部一任とさせていただきます。

常任理事会11月9日(金)出席18名①17年度会計決算報告②誌友拡大プロジェクト報告③第12回川柳塔まつり準備④六賞選考について⑤18年度役員選出の件⑥川柳塔碑合祀祭の件⑦議案書について。⑧同人承認1名提案事項その他
次回は9月27日(水)

お知らせ

この度川柳塔社では『川柳しませんか』を好評につき増刷致しました。初心者を対象に各地での勉強会、講座、カルチャで活用してください。

10部単位で事務所まで申込んで下さい。

(1部100円、送料別)

川柳塔社(06-6629-6914)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 藤 井 寺	15日(日)午後2時15分締め切り 銃・ふたり	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日)午後1時半締め切り プレーキ・工面・秋風	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
東大阪市 川 柳 同 好 会	15日(日) 市民川柳大会 情け・きつい・ゼロ・読む 揺れる・妻・線	9月号 P.57参照 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川 柳 ねやがわ	15日(日) 正午から 連休・瞬間・番組・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 喋る・食事・プライド・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木)午後1時半締め切り 手切金・活発・やんわり・握る 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
富 柳 会	7日(土) 定 例 会 22日(日) 川 柳 大 会 安・名・多・牙・素・生	9月号 P.57参照 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
岸 和 田 川 柳 会	22日(日) 市民川柳大会 新聞・鯛・世界・生地 わいわい・ダイナミック	9月号 P.99参照 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市 民 川 柳 会	22日(日)午後1時から だんだん・洗う・猫・「メモ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日)午後1時から 満期・パニック・気合い	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
南 大 阪 川 柳 会	23日(月)午後6時半締め切り うわき・荒れる・穏やか メディア	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川 柳 塔 みぞくち	23日(月)午後7時半から メモ・栗・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前9時半から 苦手・叫ぶ・涙・うるさい	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
京 都 塔 の 会	30日(月)午後2時締め切り 塩・過ぎる・合図	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま	1日(日)午後1時から 余裕・鼓・パワー 「なぜ(何故)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 な　　ら	5日(木)午後1時から 燃える・冠・本気	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	6日(金)午後2時締め切り 動く・散歩・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城北 川柳会	7日(土)午後1時半締め切り 三角・踏む・めきめき・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から つながり・保険・移す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ	7日(土)午後2時締め切り 収穫・影・さて・呼ぶ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から もしも・浮く・善・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳塔 唐　　津	9日(月)午後1時半から ぼろぼろ・時計・大人	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗　水笑
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 横・口下手・どっと	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
堺川柳会	10日締め切り 秋の誌上川柳大会	9月号 P.79参照 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時から 電柱・ぶらり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 留守・回わる・やきもき	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打　　吹	14日(土)午後1時から 臍・輪・裁く	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	15日(日)午後1時から エアポート・公園・勝つ・雑詠	山本コミュニティセンター3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生

編集後記

☆今年も六賞受賞者が厳選の上決定されました。受賞されました10名の皆様まことにおめでとう存じます。檸檬賞については第一回目の受賞者となられたわけです。引き続き研鑽の場として多数のご投句をお待ちしております。

☆本年度から新たに初歩教室に年間賞が設けられ、前年11月号から本年10月号を対象に表彰句が選ばれ12月号に発表、1月本社句会で表彰されることになりました。ご期待下さい。

☆この度川柳塔社では、選挙により理事長に西出楓楽さんが選任され、8日の総会で承認をされる運びとなりました。これからの川柳塔発展の推進力として大いに期待している次第です。

楓楽さんは近年薫風先生から引き継がれた朝日カルチャー講師、朝日新聞などにわ柳壇、山陽新聞山陽柳壇の選者を務めながら編集長としての激務をこなしてこられました。このたび編集の仕事が私が引き継ぐことになりました。編集人としての私の役目は、ここから押し出し方式によるもので、力不足この上ないので、幸いスタッフに朱夏さん、恵子さん、尚士さん、アシスタントの真理子さんと恵まれており充実した編集部となりました。

☆川柳塔誌は同人、誌友その他の皆様の参加により、一緒に作り上げていく柳誌です。私共スタッフはそのお手伝いをさせていただいているに過ぎません。川柳塔誌へのご意見、ご要望等何でも結構です。お声を聞かせて下さい。

(希)

ひとこと

川柳の音読

「脳をいきいき」新聞音読の勧めが最近話題になっているが、先日大木俊秀先生の「川柳・音読の勧め」を読んでもとても勉強になりました。選者になったつもりで川柳を声に出して読む。その中で「六十年広島はまだヒロシマで 川上太輪。」この句を音読で聞いた場合「広島」と「ヒロシマ」の区別をつけるには、の問いに「ヒロシマで」と少しづつ間を置いて

カタカナの感じを出す。とあり感心させられました。

作者の気持を推し量りながらの音読トレーニング。「黙読にトチリなし」とか自分の句を声に出してみるとギクシャクしている所がよく分かる。

川柳の上達を夢見つつ、音読による「脳をいきいき」効果も期待して、川柳の音読を少しづつでも続けようと夫のいない間に今日も声に出して読んでいます。

(金子美千代)

★百冊の本を跨いで

なお飢えに 絢一朗

★インターネット社会は読書の形態を大きく変えつつある。本を手にとるのではなく、ネットで注文、ディスプレイで読む。ページを繰るのではなくスクロールするらしい。

★趣向を凝らした装丁、手触り、紙の匂い、著者と目に見えぬ対話を楽しむ読書の喜びはインターネットの

★読書にあるのだろうか。

★若いころ、一冊ずつ大事

に取寄せた文学全集の類いが、古書市場で一冊百円はおろか、ビニールの袋に詰め放題ナンボで売られている。いや棄てられていく。

★先人の著書を読みたいと思ひ古書市をのぞいても、川柳の本はほとんど出ていない。皆が大切に扱っているから古書市に出てこないのではなく、ゴミとして捨

てられているのではないかと危惧する。

★川柳人の計報に接するた

び頭をかすめるのは、その方の蔵書である。捨てられる運命の本を思うと胸が痛む。ゴミとして捨てないで！本の悲鳴が聞こえる。せめて古書店へ持ち込んでほしい。

★愛読書青春以来 ツルゲーネフ (朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)地名

都府道市
県
姓雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「のこのこ」 (10月15日締切)

12月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B

A

B

A

地名

市都
県府道

姓
雅
号

地名

市都
県府道

姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

初歩教室
「や」と
(3句)
三宅保州担当

一路集
(3句)
「時大計」
「ぼろぼろ」
伊藤丹後屋
録風花選

檸檬抄
(2句)
「のこのこ」
松本大文子共選

愛染帖
(3句)
新上家輪選

水煙抄
(8句)
奥田みつ子選

川柳塔
(8句)
河内天笑選

12月号発表 (10月15日締切)

1月号
檸檬抄「家族」
一路集「初」「寒波」
「松」
初歩教室「詣る」

第25年度 夜市川柳募集

第5回「魚」新家完司選
ハガキに3句 10月31日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

〒545-0005
大阪府阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
印刷所 美研アート
編集人 山本希久子
発行人 河内權治
定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)
二〇〇六年(平成十八年)十月一日発行
発行所 川柳塔社
電話 〇六六二九一六九一四番
振替 〇〇九八〇一五三三六八番

第58回大阪川柳大会

とき 11月25日(土) 11時開場
ところ 大阪市立北区民センター
(06-6315-1500)
(地下鉄「扇町駅」、またはJR
環状線「天満駅」から3分)
会費 1000円 (発表誌呈)
宿題 (各題2句・12時30分締切・席題2題)
「サムライ」 片岡 湖風 選
「 昼 」 前田英巳代 選
「 淵 」 赤松ますみ 選
「いまさら」 河内 天笑 選
「時事雑詠」 井上 一箇 選
「羽ばたく」 久保田元紀 選
賞 各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主催 番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文
学コロキウム・川柳グループ
後援 明暗・川柳太守閣・川柳瓦版の会
大 阪 市

本社 11月句会
7日(火) 午後1時から
兼題「文 化」「どっぷり」「増える」
「テスト」「着せる」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)